HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シベリア文学観光の研究 ： 地域アイデンティティ・記憶・身体化に着目して
Author(s)	Vovk, Viktoriia
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第16041号
Issue Date	2024-06-28
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16041
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92794
Type	doctoral thesis
File Information	VOVK_Viktoriia.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

シベリア文学観光の研究

―地域アイデンティティ・記憶・身体化に着目して―

ヴォフク・ヴィクトリア

北海道大学　令和 6 年

目次

序章

0.1　研究背景と問題の所在.....5

0.2　研究方法・目的.....9

0.3　論文の構成.....11

0.4　研究意義.....134

第 1 章　シベリア地域及びシベリア人の地域アイデンティティの実態とその特徴

1.1　本章の目的.....17

1.2　本論文で扱う地理的な観点からみた「シベリア」の本質.....17

1.3　歴史における「シベリア地域アイデンティティ」の形成.....20

1.3.1　シベリア人の視点からみた「シベリア地域アイデンティティ」の歴史的形成：16 世紀から 19 世紀まで.....20

1.3.2 シベリア人の視点からみた「シベリア地域アイデンティティ」の歴史的形成：19 世紀.....23

1.3.3 シベリア人の視点からみた「シベリア地域アイデンティティ」の歴史的形成：1917 年から 1922 年.....25

1.3.4 シベリア人の視点からみた「シベリア地域アイデンティティ」の歴史的形成：大祖国戦争及びシベリアにおける戦後の経済復興活動.....27

1.3.5 シベリア人の視点からみた「シベリア地域アイデンティティ」の歴史的形成：1980-1990 年代から現代まで.....30

1.3.6 歴史的観点からみた「シベリア地域アイデンティティ」に関するまとめ.....31

1.4 「シベリア地域アイデンティティ」の実態に関する問い.....32

1.4.1　現代における「地域アイデンティティ」のアプローチ.....32

1.4.2　「シベリア地域アイデンティティ」の特徴.....34

1.5　小括.....36

第 2 章　近年のシベリア文学観光実践における「シベリア文学」の実態及びその特徴

2.1　本章の目的.....38

2.2　「シベリア文学」の定義.....39

2.3 歴史的な観点から見た「シベリア文学」の変遷.....41

2.3.1　ロシア革命を境にした 20 世紀前半におけるシベリア文学の実態.....41

2.3.2　大祖国戦争を機に出現するシベリア文学の実態：「故郷」及び「ノスタルジー」の登場 43
2.3.3　シベリア文学における「農村文学」という文学的流れの実態及びその特徴 46
2.3.4　シベリアを故郷とするシベリア農村文学の例：「産業」と「自然」 49
2.3.5　シベリア文学における「エコロジー文学」という文学的潮流の実態及びその特徴 51
2.3.6　シベリアを故郷とするシベリアエコロジー文学の例：「産業」と「自然」 54
2.3.7　20 世紀後半の「シベリア文学」の「農村文学」と「エコロジー文学」における「故郷」の概念 55
2.4　小括 56
第 3 章　「シベリア文学」をテーマにしたシベリア文学観光：主催者及び観光者を対象とした調査
3.1　本章の目的 58
3.2　シベリア文学観光ツアーの主催者 60
3.2.1　文学観光が行われるシベリア地域の実体：4 つの地域を例に 60
3.2.2　シベリア地域における文学観光の主催者及びインタビュー調査の概要 64
3.2.3　シベリア地域における文学観光の主催者を対象としたインタビュー調査の結果 67
3.2.4　主催者側が「故郷」に着目した文学観光活動を行う理由 73
3.3　シベリア文学観光に参加する観光者を対象としたアンケート調査 74
3.3.1　ケメロヴォ州の「サライルスキー・クリャシュの物語」ツアー 74
3.3.2　シベリア文学観光ツアーにおける観光空間及び観光者の行動の分析 84
3.3.3　ケメロヴォ州の文学観光ツアーに参加する観光者を対象にしたアンケート調査の概要 86
3.3.4　シベリア文学観光者を対象にしたアンケート調査の諸結果―ケメロヴォ州― 88
3.3.5　ケメロヴォ州文学観光者を対象にしたアンケート調査のまとめ 98
3.4　小括 99
第 4 章　シベリア文学観光によるシベリア地域アイデンティティの強化に関するまとめ
4.1　本章の目的 102
4.2　シベリア地域アイデンティティを形成する拡散したシベリアの各地域における要素

の実体 103
4.3 シベリア地域アイデンティティの強化における身体化としてのシベリア文学観光 106
4.4 シベリア地域アイデンティティを強化しうるシベリア文学観光に関する結論 110
4.5 小括 112
終章
5.1 各章の概要 114
5.2 結論と今後の課題 116
参考文献 121
付録 A 127
ヴァレンティン・ラスプーチン『マティオラへの別れ』（1976）の分析 127
付録 B 130
ビクター・アスタフィエフ『魚の王様「ボイエ」』（1976）の分析 130
付録 C 133
ヴァシリー・シュクシン『村人—「スチョプカ」と「蛇毒」—』（1963）の分析 133
付録 D 135
ウラジーミル・チビリキン 『騒げ、タイガ、騒げ！』（1962）の分析 135
付録 E 138
ヴァシリー・フェドロフ『マーリエフカ・クロニクル』（2016）の分析 138
謝辞 141

序章

0.1　研究背景と問題の所在

本論文は、いわゆる「シベリア文学観光」を包括的に分析することを目的とする多面的な研究である。シベリア文学観光とは、シベリアにゆかりのある作家及びその文学作品に関する情報を基に、シベリアと呼ばれる地域で行われる旅行をいう。本論文における多面性とは、シベリア文化空間及びシベリア地域との精神的なつながりといった概念に関連するいくつかの側面をカバーすることを意味する。まず、シベリア文学観光を分析する一つ目の側面は、「シベリア地域アイデンティティ」の本質を明らかにすることである。なぜならば、シベリア地域アイデンティティはシベリア文学観光ツアーで使用される文学作品と、観光者が地元民である場合は観光者のシベリアとの心理的なつながりとの両方を根底で支えているからである。ここでのシベリア地域アイデンティティとは、シベリア地域に対する人の自己認識であると定義づけることができる。シベリア文学観光ツアーでは、シベリア文学というジャンルの作家及びその作品に関する情報が使用されるため、シベリア地域アイデンティティに加えて「シベリア文学」という現象の本質を明らかにすることも目的とする。シベリア文学の分析は、ツアーに関わる情報の特徴を理解するのに役立つだろう。このようにシベリア地域アイデンティティとシベリアの文学に関するデータを考慮しながら、論文の後半では「シベリア文学観光」に焦点を移し、ツアーに参加する観光者の地域的アイデンティティを強化する可能性について考察する。そのために、シベリア文学観光ツアーにおける観光ルート上の観光空間の特徴を明らかにする。こうすることで、一方ではツアーの主催者の視点から「シベリア文学観光」を分析することになる。観光空間の構造における特徴を明らかにしながら、ツアーの身体化という要因を分析に取り入れる。すなわち、身体化によって観光者の過去に関連した感情的経験を得る可能性について議論する。ここでは観光者の本質を明らかにする。観光者がツアーの企画されるシベリア地域の地元民である場合、地域アイデンティティが強化される効果の出現が考えられる。このように本論文では、シベリア地域アイデンティティ、シベリア文学、シベリアの文学ツアーの構造、観光者の本質、主催者の目的、ツアーで使用される文学作品の特徴などの側面を明らかにしながら、シベリア文学観光を総合的に分析することを目指す。以降では本論文の課題を選んだ背景及び論文における諸側面をより具体的に説明する。

近年、シベリアの各地域では文学をテーマにした文学観光ツアーが行われている。シベリ

ア文学観光の主催者は、シベリアの各地域の作家及びその文学作品に関する情報を使い、ツアーの主な目的に「地域のアイデンティティの強化」を掲げている。シベリアに位置するアルタイ共和国、ケメロヴォ州、クラスノヤルスク地方、イルクーツク州でツアーを行う主催者は、ワシーリー・シュクシン、ウラジーミル・チビリキン、ワシーリー・フェドロフ、ミハイル・ネボガトフ、ビクター・アスタフィエフといった作家の情報を使って文学観光ツアーを企画し実施する。これらの作家はそれぞれ、自分の生まれ故郷であるシベリア地域の特徴や問題を作品に描きながら、シベリアの文化的伝統の保護、自然管理、シベリア村の保護などの問題に読者の関心を向けさせようとしている（付録 A-E.）。つまり、シベリア文学ツアーで使用される作家とその文学作品には、シベリアの一般化されたイメージが含まれていると言える。単に作家の故郷である地域に関する描写だけではなく、シベリア全体を内包するような文学的要素が存在するのである。言い換えれば、シベリアの各地域で生まれ育った作家は、文学作品を通してシベリア全体の特徴及び注目すべき問題を描く。このように、シベリア文学観光ツアーで扱われる作家による作品はいわゆるシベリア文学に該当し、作家自身もシベリア作家と呼ばれている。ロシア文学の伝統における「シベリア文学」とは、シベリア（シベリアの自然、シベリア人、シベリア村、シベリアの文化など）を主な課題とし、歴史的過程の枠組みの中で形成されたシベリア全体の文化空間の一部をなす、ロシア文学におけるジャンルの 1 つを指すものである。これに基づけば、上記に挙げたシベリア作家はシベリアという文学的文化空間の枠組みに含まれていると言える。

文学観光ツアーの主催者は、シベリアのさまざまな地域でツアーを行い、それぞれの地域が誇る地元のシベリア作家を利用する。しかし同時に、前述したように、シベリア文学観光で扱われる作家はシベリアという統一された文化空間の一部である。そのため、主催者が「地域アイデンティティの強化」という目的を定める際、ツアーにおける強化という潜在的な影響は観光者と地元の個別の地域だけではなく、観光者とシベリア全体の関係性にも与えられる可能性がある。つまり、「シベリア地域アイデンティティ」の強化が考えられる。

「シベリア地域アイデンティティ」とは、シベリアと呼ばれる地域との精神的なつながりに基づく、人が自分のことをシベリア人と自己認識するプロセスに関わる複雑な現象である。シベリアは地理的に西シベリアと東シベリアに位置し、ロシア連邦の 10 の構成体を含み、独自の文化的空間を持っている地域として理解される。この文化空間の一部がシベリア文学である。シベリアでは、シベリアの文化空間に組み込まれた要素である地元のシベリア作家に関する情報が関与する文学観光の実践が窺える。すなわちシベリア文学観光は、シベ

リア地域アイデンティティの形成に影響を与える自己認識プロセスに関連する要素を含みうるので、この文学観光実践は主催者の掲げた目的に基づき、特定の地域に関連する地域アイデンティティだけではなく、シベリア地域アイデンティティを強化しうると考えられる。シベリア地域アイデンティティを含め、地域アイデンティティという現象そのものが「感情的経験」と「記憶」に基づいて起こる人間の心理的プロセスと関連している。観光ツアーを通じてアイデンティティが強化される可能性のあるプロセスを理解するには、観光者による感情的反応が得られる内省の対象を選択する権利が厳しく制限され、行動が規制されたツアーの事例が存在するため、観光ツアー中に感情的反応の可能性及び内省の対象を選ぶ自由が存在すること、感情的反応を引き出すことが可能な記憶を構成する知識を理解する必要がある。例えば、Edensor（2000, p. 328）による孤立的(enclavic)空間では、どのような活動が行われ、誰が入ることができるかを定める明確な境界線が常に維持されており、これが感情的な幅の定型化に寄与している。しかし、シベリア地域観光の中で、過去の経験と結びついているはずの感情的反応を得る可能性と、その結果としての地域アイデンティティが強化される可能性について語るならば、シベリア地域アイデンティティの特徴を明確にすることに加えて「記憶」の対象、つまりシベリア地域アイデンティティを構成するシベリア文化空間の要素である「シベリア文学」、シベリア地域の地元作家及びその文学作品を理解する必要がある。また、豊かな感情の幅を得ることが可能かどうか、可能であればどのような条件下で可能なのかを理解する必要がある。

上記の問いに答えるために、本論文ではまずシベリア文学観光ツアーへの参加を決めた観光者が持ちうる「シベリア地域アイデンティティ」に注目し、「シベリア地域アイデンティティ」とは何なのかを、その形成プロセスの観点から明らかにする。どのような原理で、どのように「シベリア地域アイデンティティ」が形成されたかについてのイメージは、シベリア人とは何者かを理解することにつながると考えられる。つまり、「シベリア地域アイデンティティ」がどのように形成されたかを分析することによって、「シベリア人」を自認する人の精神的結びつきの根底にあるもの、「シベリア地域アイデンティティ」に埋め込まれているものを理解することができるだろう。その理由は、どんな文学にも、人に感情的な影響を与えるある種のイメージが含まれているからである。「シベリア文学」はシベリアに直接関係するものであるため、シベリアに関連するイメージを提供し、地元民の間でシベリアに関連するさまざまな概念を形成するように構成されており、地元民にとって「シベリア地域アイデンティティ」の形成に組み込まれているシベリア文学は独自の文化空間の一部で

あるからである。本論文において「アイデンティティ」とは、特定の地域とのつながりを持ち地域の特徴を取り入れた構造を意味するが、地域で起こっている歴史的プロセスを考慮に入れれば、意味は変容する可能性がある。つまり一方ではアイデンティティは不変の枠組みを持つが、他方ではさまざまな歴史的プロセスが、それぞれの時代の実勢に拍車をかけられ、アイデンティティのプロセスの中で過激化されたり、弱体化したり、問題のベクトルが変わったりしうると考える。ロシアの一部として存在するシベリアはさまざまな時代を経てきており、それはまた、さまざまな時代の文学作品の中で描かれてきた。そのため、シベリア人の自己認識過程の核心にあるものを理解するために、本論文ではまずシベリアの歴史過程を分析する。そうすることで、シベリア人のシベリア性を明らかにするとともに、異なる歴史時代におけるシベリア地域アイデンティティの特徴を抽出することが可能であると考える。これにより、シベリアにおける各地域の学校で教えられ、「シベリア文学観光」に利用されている 20 世紀後半のシベリア文学作品の特徴も明らかになると思われる。

シベリア文学観光における「シベリア地域アイデンティティ」を強化する効果について言えば、重要な要素は、観光者がシベリア人、つまり「シベリア地域アイデンティティ」の持ち主であると自認する人のグループに属することだけではない。シベリア文学観光ツアーの主催者はツアーを作る際、「地元」のシベリア作家の文学作品を使用する。この事実を考慮すれば、ツアーに参加する観光者はツアーに関わる情報を把握している必要がある。つまり、過去のベースがあって初めて強化が語れるため、シベリア文学ツアーの要素に関連する過去の感情的経験、記憶の有無も重要な要素なのである。過去の経験の有無は文学観光ツアーが企画された地域で生まれ育った人に窺える。シベリア文学観光ツアーが実施される地域で生まれ育った観光者は、地元のシベリア作家、その文学作品、地元の文化的伝統や名所、地元の自然の特徴を学ぶ機会が与えられているため、ツアーが開催されるシベリア地域の生活様式や文学文化空間を知っている観光者は、シベリア地域に関わる地元の要素に関連した感情的体験またはそれに関する記憶を有することが可能である。つまり、観光者が地元民であれば、文学観光ツアーが開催される地域に住むことに基づいて、過去の経験を思わせる要素との接触を体験できる。従って、シベリア文学観光ツアーに地元民あるいは非地元民の観光者が参加するのかも明らかにする必要がある。

シベリア文学観光ツアーのもう 1 つの重要な側面としては、文学観光ツアーの身体化と、観光者による内省の対象を選択できる自由度が挙げられる。Edensor（2000, p. 340）によれば、厳しく規制されたツアーでは感覚的な刺激が最小限に抑えられ、観光者の身体をなだめ、

順応を促し、特異なパフォーマンスの機会を減らす。それに伴い、感情の幅や主体性の可能性が制限される。文学観光ツアーが、観光者が管理され、何をすべきか、どこへ行くべきかを指示される、厳しく規制された構造であるとすれば、地域アイデンティティの強化を伴うような、感情的反応を受ける可能性及び観光者を惹きつけ、感情的な反応を引き起こしうる内省の対象を選択できる可能性のレベルは低下しうる。豊かな感情を受け取る可能性は、観光者による行動や内省のための対象を選択できる相対的な自由とともに、文学観光ツアー中に過去の感情的経験及び過去の記憶に関わる感情の幅と経験を受けることに貢献できると考えられる。つまり、観光者が自由に行動できる観光空間があれば、地域アイデンティティが強化される効果の質を高められると推測できる。

そこで本論文では、いくつかの副次的な目的を通して、「シベリア文学観光」について考察することを主な目的とする。すなわち、「シベリア地域アイデンティティ」がどのような原理で形成されたか、何が観光者の過去のシベリア地域における体験に関わる記憶を構成するのか、地元のシベリア文学に関連する観光者の過去の感情的経験とは何か、シベリア文学観光における身体化のプロセスとは何かを明らかにすることによって、「シベリア文学観光」の本質を総合的に分析する。

0.2　研究方法・目的

第 1 章では「シベリア地域アイデンティティ」に着目しながら、シベリア地域アイデンティティがどのような原理で、どのような要素に基づいて形成されてきたのかを目的に分析を行う。シベリア地域アイデンティティは複雑な現象であるため、包括的に明らかにするために、まずいわゆる「シベリア」という地域は何であるかを説明する。また、ロシアの歴史を通じてシベリア地域で起こったさまざまな歴史的プロセスに関連する文献資料に基づいて、シベリア地域アイデンティティという現象の本質を明らかにし、それが示唆するものとは何であるのかを述べる。

第 2 章では、シベリアで起こった歴史的プロセスの特徴を考慮に入れながら、シベリア独自の文学文化空間が形成された歴史に関する文献資料を分析することによって、ロシア文学の一種である「シベリア文学」を明らかにする。また、シベリア文学観光ツアーで使用されるのは 20 世紀後半のシベリア文学作品であるため、ヴァレンティン・ラスプーチン、ワシーリー・シュクシン、ウラジーミル・チビリキン、ワシーリー・フェドロフ、ビクター・アスタフィエフという 5 つのシベリア作家の代表的な作品を A-E 付録で分析し、抽出できた

文学作品の特徴を 20 世紀後半にシベリアで起きていた歴史的プロセスとの平行性の有無という観点から検討してみる。

第 3 章では「シベリア文学観光」に焦点を移す。まずシベリアの 4 地域、アルタイ共和国、イルクーツク州、ケメロヴォ州、クラスノヤルスク地方における文学観光ツアーの主催者を対象に行ったインタビュー調査により獲得できたデータの分析を通して、シベリア文学観光の実施を通じて主催者が追求する目的及びシベリア文学観光ツアーの構成要素を明らかにすることを目指す。さらに、シベリア文学観光ツアーにおける主催者による規制レベル、観光者に与えられる行動の自由度、身体化要因の存在などの観点からもツアーを分析し、シベリア文学観光ツアーにより形成される観光空間の特徴を明らかにしてみる。ここでは、Tim Edensor（2000）、Judith Adler（1989）、David Chaney（1993）、Britta Timm Knudsen and Marit Risum Waade（2010）による議論を利用し分析を行う。また、ケメロヴォ州のシベリア文学観光を例に、6 つのシベリア文学観光ツアーに参加した観光者を対象に行ったアンケート調査結果の分析を通じて、シベリア文学観光ツアーが実施されているシベリア地域とのつながりという観点から、ツアーに参加する観光者の本質を示すことを目的とする。

第 4 章では、第 1 章から第 3 章で得られたデータをまとめ総合的に分析することで、シベリア各地で行われる文学観光ツアーを通して、シベリア全体に向けた「シベリア地域アイデンティティ」の強化の可能性を検証することを目指す。ここでは文学観光ツアーに参加する観光者が、そのツアーが実施されるシベリア地域の地元文学を理解している地元民であった場合に、さまざまなシベリア地域の作家による文学作品に描かれた一般化されたシベリアのイメージを知っているかどうかを分析することが重要なポイントとなる。さらに最終章では、シベリア全体に向けたシベリア地域アイデンティティの強化を分析することに加え、第 3 章で得られたデータを基に、感情の幅を得る可能性の有無を明らかにすることを目的とする。ここでは、観光者が地元民であり観光空間が内省の対象を自由に選択できる場合、シベリア文学観光ツアーという枠組みの中で観光者はシベリア地域の文化や生活様式を吸収し、学校でシベリア文学を学んだときの過去の感情的経験や集団的記憶と結びついた―豊かな感情の幅を受け取ることができるという観点から分析を行う。上記に述べた点に基づいて、過去に遡る潜在的な感情的経験は、地元民の観光者が行動の自由を与えられた空間でより多様な内省の対象を選択し、地域アイデンティティをより持続的に強化することに貢献できるという点について考察する。

0.3　論文の構成

第 1 章では、「シベリア地域アイデンティティ」という現象そのものが何であるかを明らかにすることを目的とする。「シベリア地域アイデンティティ」はシベリア文学の根底にある基盤として認識され、シベリアの文化空間全体の文学的側面をその傘下に統合し、シベリア文学観光の枠組みの中で注目されるからである。シベリア地域アイデンティティについては、シベリアと中央ロシアの対照的な歴史的関係という観点から分析を行う。いわゆるシベリア地域アイデンティティの現代的な形態は、ロシア中央部とシベリアの相互作用の枠組みの中で起こっている歴史的な過程に直接関係しているため、上記にも述べたように研究の方法として、シベリア文学の形成を示す文献の分析を用いる。

第 2 章では、シベリア地域アイデンティティに直結するシベリア文学を取り上げる。ここでは、歴史的形成のあらゆる具体的な段階におけるシベリア文学を明らかにするための文献分析と、シベリア文学作品そのものの分析という 2 つの主要な方法を用いる。シベリア地域の歴史的、自然的、文化的、その他の特徴を含む「シベリア文学」はシベリア地域アイデンティティに直接関係している。シベリア地域アイデンティティの形成に影響を与える自己認識プロセスがシベリア文学の創造に寄与しているからである。そのため「シベリア文学」についても、シベリア地域アイデンティティの歴史的プロセスに重なる、シベリア人と自己認識する作家により作られる文学の歴史的なプロセスに着目し、各時代の特徴を明らかにする。さらに第 2 章では、20 世紀後半のシベリア文学作品の分析も行う。具体的には 20 世紀後半のシベリア作家ヴァレンティン・ラスプーチン『マティオラへの別れ』(1976)、ビクター・アスタフィエフ『魚の王様「ボイエ」』(1976)、ヴァシリー・シュクシン『村人—「スチョプカ」と「蛇毒」—』(1963)、ウラジーミル・チビリキン 『騒げ、タイガ、騒げ！』（1962），ヴァシリー・フェドロフ『マーリエフカ・クロニクル』(2016)に着目しながら、付録 A-E でその分析の内容を述べる。文学作品の分析において注目するポイントは、シベリアの各地域の作家が一般化されたシベリアのイメージを描いた要素である。シベリアのさまざまな地域の作家による文学作品に、シベリア全体の特徴や問題が描かれた、一般化されたシベリアのイメージが見られる要素の有無を明らかにすることは、観光者が地元民である場合、観光者の文学に関連する過去の経験が「シベリア地域アイデンティティ」とのつながりがあるかどうかを理解するために行われる。つまり、シベリア全体の文化空間を構成する要素である、シベリアの各地域に属する地元のシベリア作家による一般化されたシベリアのイメージを、地元民である観光者が理解する可能性の有無を追跡するためである。20

世紀後半のシベリア文学作品を選んだのは、この特定の時代の文学作品がシベリア文学観光ツアーの情報資料として利用されているからである。

第 3 章では、各シベリア地域出身の作家による文学作品を扱った「シベリア文学観光」の分析を行う。具体的にはシベリア文学観光の 3 つの側面に着目する。第一の側面は、シベリアの各地域で地元の主催者が文学観光ツアーを企画・実施する背景と、文学観光ツアーの主催者が追求する目的である。第一の側面は、2021〜2023 年に実施した、4 つのシベリア地域での文学観光の主催者を対象にしたインタビュー調査により得られたデータを使い分析する。第二の側面は、文学観光ツアーに参加した観光者である。この側面は、ケメロヴォ州で行われた 6 つのツアーに参加した 86 人を対象にしたインタビュー調査で得られたデータを使い考察を行う。第三の側面として、観光空間そのものを分析する。一方では、ツアーの主催者によって企画されるが、他方では、観光者が自由に行動できる空間が提供される。その中で、主催者が文学観光ツアーで扱う地元のシベリア作家の作品を読んだことがある、という過去の経験に関連した感情的反応が起こりうる。このように、観光空間とは何であるかを、ツアーが行われるシベリア地域にとって地元のシベリア作家及びその文学作品に関わる過去の感情的経験をもう一度体験する、という感情的反応の可能性とその発生条件という観点から分析する。シベリア文学観光の観光空間という第三の側面を分析する際には、Tim Edensor（2000）、Judith Adler（1989）、David Chaney（1993）、Britta Timm Knudsen、Marit Risum Waade（2010）を用いる。

第 4 章ではまず、シベリア文学観光ツアーを通じて地域アイデンティティを強化する可能性について分析する。ここでの基本的なポイントの 1 つは、シベリアの各地域の地元作家によるシベリア文学作品の特徴である。シベリア文学作品においては、歴史的な時代に対応した地域の特徴や問題の記述を通じて描かれた、シベリア全体を内包する一般化されたシベリアのイメージが含まれている点である。また、文学観光ツアーに参加する観光者の本質も重要な要素であろう。つまり、文学観光ツアーに参加した観光者が地元民であり、シベリア文学観光ツアーが実施される地域の地元のシベリア作家に対する考えを持っているかどうかである。シベリア文学観光者が地元民であれば、観光者にとって郷土である実施地域とのつながり、そしてシベリア全体とのつながりが強化される可能性について語ることができるだろう。このように第 4 章では、シベリアの各地域でシベリア文学観光ツアーの実施を通じて、シベリア地域アイデンティティが強化される効果があるかどうかを 1 つ目の側面として考察する。一方、同章では、シベリア文学観光の身体化を通じた感情的体験という側面

にも注目する。Tim Edensor (2000)、Tony Bennett (1995)、David Seamon (1979)を用いる。第 3 章で行った観光空間の分析、すなわち行動の自由度のレベルと身体化要因に関する考察に基づき、シベリア文学観光ツアー中に観光者が持ちうる感情体験がどれほど多様であるかを考える試みを行う。観光者が身体化を通じて豊かな感情体験を持つ可能性を分析することで、観光者が比較的自由に動ける観光空間にいる場合、どれだけ幅広い感情を体験できるかを解明できると考えられる。自由な空間では内省する対象の選択肢が広がるため、豊かな感情の幅は地域アイデンティティの強化効果の可能性に寄与しうると考えるからである。

このように第 4 章では、地域アイデンティティの分析、観光者にとっての過去の経験となりうる地元のシベリア作家及びその文学作品にまつわる記憶、観光者に内省の対象を選択する機会を与えるシベリア文学観光ツアーにおける身体化といった側面から「シベリア文学観光」に関する考察をまとめる。

0.4　研究意義

本論文では、シベリア文学観光を、シベリア文学観光ツアーにおける観光空間の特徴、文学観光ツアーの構造、主催者の役割、観光者の本質、身体化による感情的経験を得る要素といういくつかの側面から包括的に検討することを示した。しかし、「シベリア文学観光」そのものを包括的に研究することと、その個別的な側面を分析することが、どのように役立つことができるかを示しておく必要もあると考えられる。

そこでまず第 1 章では、「シベリア地域アイデンティティ」とはどのような現象なのかを見ていく。「シベリア」という地域の概念そのものを説明し、ロシア歴史の枠組みの中で、シベリア地域で起こった歴史的プロセスを明らかにすることによって、「シベリア地域アイデンティティ」を分析する。「シベリア」という言葉は一般的で知られているが、複雑な構造を持っている。そのため、それがいわゆる「シベリア地域アイデンティティ」についての議論の方向性を左右することがある。地理的には、シベリアは古典的にウラル山脈から太平洋分水嶺までの地域であると理解されている。このような地理的要因に基づけば、シベリア人と自認する人の地域的アイデンティティを、ある特定の地域に結びついた基本的な構造を維持する現象として考えても不思議はないだろう。しかし、シベリア地域では、ロシアの一部としての歴史の各世紀において、シベリアに住む人とシベリアの結びつきを強めたり、あるいは弱めたりといった、さまざまな歴史的プロセスがあった。例えばロシア帝国時の

「先住民族の管理に関する法令」(1822)[1]は、中央部のロシア人以外にもロシア帝国臣民としてのシベリア先住民族のステータスを規定し、ロシア中部からの移住者と共にシベリア経済の発展を通じてシベリア人の生活様式の改善に弾みをつけ、シベリア人の自己認識プロセスの強化に貢献することになった。ロシア内戦時(1917-1922)には、政治的分断がシベリアにおける中央集権的なプロセスの存在、またシベリア人とシベリア地域のつながりを弱める一因となった。さまざまな政治運動が台頭し、その中には政治的見解の過激化という道を歩み、シベリア人とシベリア地域とのつながりを修正し、政治化するものもあった。大祖国戦争時(1941-1945)には政治的な要素は消え去り、愛国主義の台頭を背景にシベリア地域アイデンティティは強化され、非政治的な形態を獲得する。このようにシベリア地域アイデンティティは、地理的・自然的な特徴による固定した枠組みを持つが、ロシアの地域としてのシベリアで起こった歴史的プロセスの影響を受けて変容を繰り返す。このようにして第 1 章では、16 世紀末以降のさまざまな時代における「シベリア地域アイデンティティ」の形態の特徴を明らかにする。このような分析を行うことで、シベリア文学観光ツアーで扱われる 20 世紀後半のシベリア文学作品の特徴を明らかにするだけではなく、「シベリア地域アイデンティティ」という複雑な現象の本質を包括的に説明できると考えている。「シベリア地域アイデンティティ」に対するロシアの歴史的プロセスの重要性を証明し、中心と周縁という基本的な構造は維持しながらも、時代に応じて変化するという矛盾を孕んだ現象の本質を明らかにしてみる。

第 2 章では「シベリア文学」について考察する。「シベリア文学」は基本的に特殊な文学ジャンルとして区別されないことが多くある。しかしロシア文学の伝統では、ロシア文学の中にもさまざまなジャンルの文学が存在しており、その中に「シベリア文学」があるという主張が一般的である。そこで、さまざまな文学研究者が提唱する「シベリア文学」の定義を総合した上で「シベリア文学」を定義づけてみる。これにより、「シベリア文学」が一方ではロシア文学の一部でありながら、他方では独自の特徴を持つ文学ジャンルであることを理解する一助になると考える。さらに、「シベリア文学」はシベリアで起きてきた歴史的過程と直接関係しており、「シベリア人」と自認する人の「シベリア地域アイデンティティ」の変容にも影響されている。「シベリア文学」の作家は、いわゆるシベリア作家である。「シベリア文学」が知識階級によって誕生した 19 世紀後半から「シベリア地域アイデンティテ

[1] ロシア語で “Устав об управлении инородцев”(1822 年)。

ィ」の変容と同様、さまざまな歴史的時代において、シベリア作家はその文学作品の中でシベリアの特徴や問題などを描いている。シベリア文学作品は時代の影響を大いに受けて書かれていた作品である。第 2 章では各時代の「シベリア文学」の特徴を述べる。これは「シベリア地域アイデンティティ」と「シベリア文学」の関係をたどる上で有益であると考える。すなわち、「シベリア文学」はシベリアの文化空間を理解する人、すなわち「シベリア地域アイデンティティ」を持ちシベリア地域とのつながりを持つ人によって作られることを示すための分析である。また「シベリア文学」の独自性を理解し、「シベリア文学」がロシア文学の特殊なジャンルとして特別視される理由も理解することにつながると考えられる。

第 3 章と第 4 章では「シベリア文学観光」そのものに目を向け、シベリア各地で行われるシベリア文学観光ツアーの主催者側、ツアーに参加する観光者側、シベリア文学観光の観光空間の特徴といった側面から分析を行う。分析の中では、シベリア文学観光ツアーにおける身体化の要因、観光者が持ちうるツアーが実施される地域出身のシベリア作家とその文学作品に関連する過去の経験の存在、観光者が持ちうるツアーが開催されるシベリア地域との個人的なつながりの有無、観光者による内省のための対象の自主的に選択できある可能性などを考慮する。つまり、「シベリア文学観光」について包括的な研究を行う「シベリア文学観光」とはシベリアという文化空間の地域的要素を対象とした実践である。シベリアの地域的アイデンティティは、上記にも述べたように、超政治行政的な現象ではあるが、シベリアの中に異なる行政的地域が含まれていることが特徴的である。このように、シベリア文学観光ツアーはシベリアの各地域で開催される。それにもかかわらず、シベリア文学観光ツアーで使用されるシベリア文学作品の特徴からすれば、作品には特定の時代においてシベリア全体に見られる要素が描かれる。例えば 20 世紀初頭の政治的混乱期は、スローガンや政治プログラムなどを含む一連の文学作品の執筆に弾みをつけた。大祖国戦争時に、シベリアのさまざまな地域の作家がほとんど前線にいたため、ノスタルジーや故郷といったテーマで書かれた作品が主流であった。シベリア文学観光の枠組みでは 20 世紀後半の作品が使用されるが、その時代には、文学作品のテーマに影響を与える基本的な要因の一つが、産業拡大とそれがシベリアの自然や生活様式などに与える影響であった。このように、ツアーで使用される特定の歴史的なシベリア文学作品はシベリアの一般的なイメージを有する。つまり、文学作品は個別のシベリア地域を中心に書かれたものでありながらも、その内容はシベリア全体を特徴づけているのである。このように、特定のシベリア地域の住民が、地元のシベリア作家による文学作品を学ぶことで、自分の郷土だけではなく、一般化されたシベリ

アのイメージ、またはシベリア全体ともつながることが可能だと考える。各シベリア地域のシベリア文学観光ツアーには、その地域のシベリア作家及びその文学作品に関する情報が含まれている。ところが、特定のシベリア地域で行われる文学観光ツアーへの参加を通じて地域アイデンティティが強化する効果が発生すれば、シベリア全体を内包する地域アイデンティティの強化が可能である。このような観点から、本論文で行う分析は地域レベルのプロセス、すなわちシベリア地域アイデンティティに影響を与えうるローカルな実践としてのシベリア文学観光を考える上で有用であるのではないかと考える。

第 1 章　シベリア地域及びシベリア人の地域アイデンティティの実態とその特徴

1.1　本章の目的

本論文の主な対象はシベリアで行われている「文学観光」である。「シベリア文学」を題材にして企画される観光ツアーである。「シベリア文学」とは、長いロシア文学の伝統の中でシベリアの地域アイデンティティを強調するユニークな現象として 20 世紀に形成されたものである。シベリア文学が「シベリア」を中心とした文学である以上、作品が作られるのに先立つものは、自分とシベリアという地域との関係性及びその関係性を意識するスタンス、言い換えれば、自分がシベリア地域との関係性を持つシベリア人であるという自己認識（「シベリア地域アイデンティティ」）の存在である。ところが「シベリア」は特定の精神的・社会的なフレームワークがなく、複雑な歴史的プロセスの中で形成されていった複合的な現象であるため、「シベリア地域アイデンティティ」も複雑な構造を持つ現象であると言える。そのため第 1 章では、「シベリア」と「シベリア地域アイデンティティ」の実態及びその特徴を明らかにする。この 2 つの概念は不可分に結びついており、「シベリア」という地域の枠組みを理解することなしに、「シベリア地域アイデンティティ」の基礎と本質を理解することは不可能である。

1.2　本論文で扱う地理的な観点からみた「シベリア」の本質

各種の百科事典、地理・地形辞典では「シベリア」という言葉がいくつかの方法で説明されているが、示す範囲は概ね同じである。表 1-1.では、各事典における「シベリア」の定義をまとめてみた。

表 1-1. 各辞典における「シベリア」の定義

辞典	シベリアの定義
『世界の地名・トポニム辞書』 ポスペロフ E.M.（2001）	西はウラル山脈から東は太平洋の稜線まで、北は北極海沿岸から南は中央アジアとの国境まで広がるロシアの領土である。
『現代地名辞典』 コトリャコフ V.M.編（2006）	シベリアは北アジアに位置するロシアの領土である。西はウラル山脈から西は太平洋分水嶺の稜線まで 7000km 以上、北は北極海の海岸から南は中央アジアの国境まで

	3500km に及ぶ。面積は約 1000 万 km²。伝統的に西シベリアは西シベリア平原、アルタイ山脈、クズネツク・アラタウ山脈を含む。東シベリアは中央シベリア高原、その東と南の山地縁辺部、タイミル、イェニセイ川の東の北極海沿岸の低地からなる。
『現代詳解辞典』（2003）	西はウラル山脈から東は太平洋分水嶺の稜線まで、北は北極海沿岸から南はカザフスタンの丘陵草原とモンゴル国境まで、ロシア連邦のアジア領土の大部分を占める。

表 1-1.によると、地理的に「シベリア」はウラル山脈から太平洋分水嶺の尾根まで及び、気候で多少異なる西シベリアと東シベリアを含む地域を指す言葉である（図 1-1.）[2]。「分水嶺」とは、山に降った雨水が異なる方向に流れてそれぞれの水系を作る、その境界線となる峰を意味する表現である（デジタル大辞泉, 2023)。シベリア地域の東の地理的・気候的境界を成す太平洋分水嶺は、太平洋に注ぐ河川の流域と北極海に注ぐ河川の流域を分けている。従って、地理的な観点から「シベリア」という地域があり、気候的には「西シベリア」と「東シベリア」に分けられ、極東（チュクチ半島、海岸東部、カムチャッカ半島、サハリン島、クリル列島などを含む）とは異なる。寒暖差の激しい大陸性気候で特徴づけられ、冬季は低温、夏季は高温という気温差の激しい地域となっている。

[2] 地図の出典はロシア連邦議会の公式サイト。

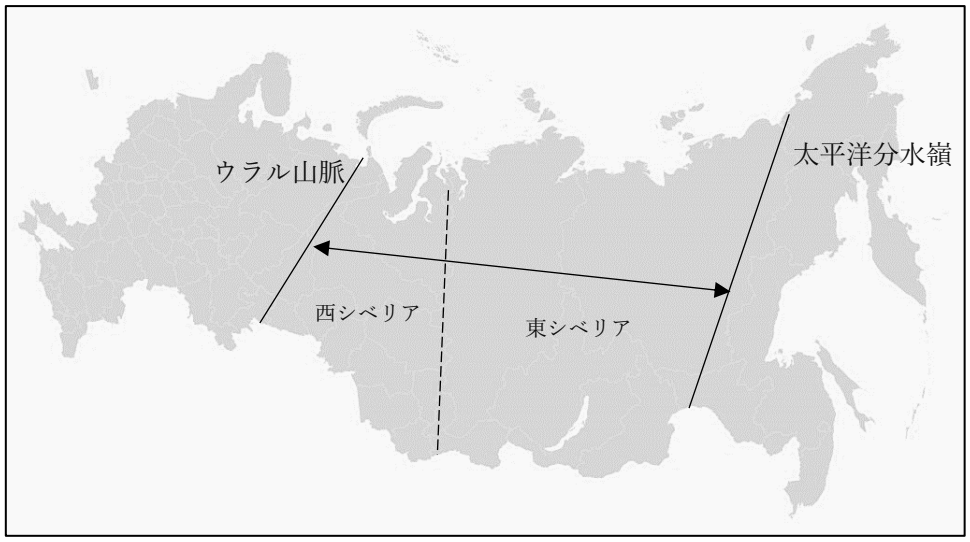


図 1-1. シベリア地域（西シベリアと東シベリア）

このように「シベリア」は独自の地理的・気候的特徴を持つ空間である。しかし行政的な領土区分という点では、「シベリア」という連邦の構成体は存在しない。ロシアの憲法第 3 章「連邦制度」65 条 1 項を見ても「シベリア」という名前の行政主体は明示されていない。行政区画ではシベリア地域は 10 の構成体、アルタイ共和国、ティヴァ共和国、ハカシア共和国、アルタイ地方、クラスノヤルスク地方、イルクーツク州、ケメロヴォ州、ノボシビルスク州、オムスク州、トムスク州で構成されている。従って、物理的な観点から見れば「シベリア」とはロシア連邦の中に含まれる行政主体ではなく、地理的・気候的特徴を持つ地域であると言える。

しかし、シベリア（西シベリア及び東シベリア）に多くの異なる構成体が含まれているにもかかわらず、地理的に西シベリアに生まれた人と東シベリアに生まれた人には「私はシベリア人である」という自己認識に関する主張が見られる。シベリア地域に住む人は、地理的なシベリア地域に位置する、それぞれの民族文化的・気候的（例えば、北と南、西と東）な特徴などを持つロシア連邦のさまざまな構成体に住んでいるにもかかわらず、自分自身を「シベリア地域アイデンティティ」を持つシベリア人として自己認識しているのである。つまり、シベリアに住む人の自己認識は行政区画によって定められる「地域」とは関係なく、より複雑な形の「地域」、地理的枠組みと重なるマクロ地域としてのシベリアと関係していると言える。このように、「シベリア地域アイデンティティ」の基盤を成す「シベリア」という地域は複雑で、多重的な空間として見えてくる。現代において地理的に考えられる「シベリア」はロシアの歴史の中で形成されてきた。さまざまな歴史的プロセスに依存しながら、

現代における顔及び住民による認識が現れるようになったのである。このように、「シベリア地域」は現代において何を指しており、どのような形で住民により認識され住民（シベリア人）の「シベリア地域アイデンティティ」の基盤を成しているのか、また「シベリア地域アイデンティティ」自体とは何かといったことを理解するためには、シベリアの住民、シベリア人の視点からロシア史の枠組みの中におけるシベリアという地域の歴史的な形成過程を見ていく必要があると考える。

1.3　歴史における「シベリア地域アイデンティティ」の形成

1.3.1　シベリア人の視点からみた「シベリア地域アイデンティティ」の歴史的形成：16 世紀から 19 世紀まで

本来、いわゆる「シベリア地域アイデンティティ」という自己同一性の持ち主は、ロシアのヨーロッパ地域から 16 世紀後半を皮切りにシベリアへの移住を決めたロシア人であると考えられていた。その中で、シベリアへ移住したロシア人はロシアの中央部との関係性（親戚関係、出身地など）を持っていたにもかかわらず、時間の経過と共に中央部との対照に基づきシベリアの一部であるという自己認識を持つようになっていく。このような「シベリア地域アイデンティティ」がシベリア地域に住む人により意識・形成され始める前の前提として、16 世紀半ばの 1552 年にイヴァン 4 世のカザン・ハン国を征服し、ロシアが拡大し始めるロシア帝国形成過程に伴い繰り広げられたさまざまな歴史的プロセスが見られる。

1581 年から 1585 年にかけてイェルマークによりいわゆるシベリア・ハン国の征服が行われ（図 1-2. ）、ロシアの中に含まれるシベリアの特別な地域的空間が形成されはじめる。遠征が成功した後、シベリア・ハン国とその東にある領土の積極的な開拓が始まり、ロシアのヨーロッパ地域に住む人が東に移住し始める。

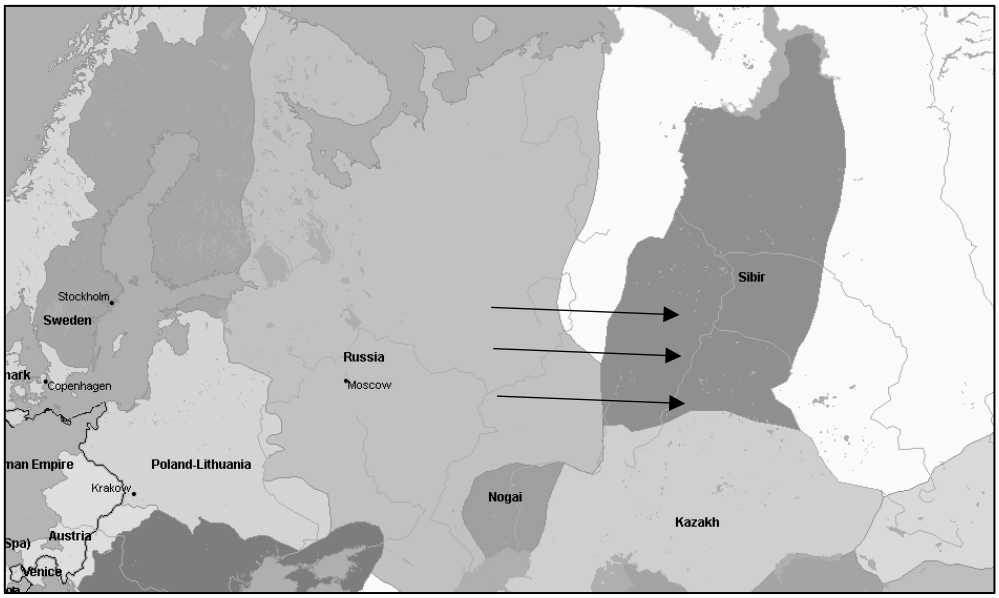


図 1-2. シベリア・ハン国の征服（1581 年の地図）

1580 年代半ばから徐々にロシア農民によるシベリア地域の大規模な開拓が行われはじめる[3]。その中で、シベリアの人口形成は自由移民（コサック、北部地域の農民などによる移住）と国家の政策に基づく移住という 2 つの道をたどる。例えば、1816 年（第 7 回人口センサス）[4]から 1897 年（第 1 回国勢調査）の間にシベリアの人口は 355%増加し、2,310,000 人に達する。同期間、先住民族の人口は 220,000 人から 413,000 人へと 87%増加する（ダメシェク, 2009）。シベリアの人口が特に増加するのは工業の発展、シベリア鉄道の建設などが見られる 20 世紀初頭である。人口及びその構成は 16 世紀を起点として絶えず変容し、先住民と新住民の比率も大きく新住民の方へ偏っていく。

このように、1580 年代にロシアに編入されてから 4 世紀にわたり、シベリア地域との関係性を基盤とする「シベリア人」という地域アイデンティティを持つ人のグループが占める範囲、すなわち「シベリア地域アイデンティティ」の枠組みが見えてくるようになる。「シベリア地域アイデンティティ」が形成される背景には、独自の景観を持つ広大な空間、気候、経済活動の種類、異なる文化や信仰の相互作用などがあるが、「シベリア地域アイデンティティ」の出現に大きな役割を果たした要因として重要な位置を占めているのが、現代的なコミュニケーションが成立する前のロシアの中央部とシベリアの遠隔性である。シベリア住民にとってロシアのヨーロッパ地域はどこか遠く感じられ日常的なつながりはなかったた

[3] ロシア連邦軍参謀本部軍事アカデミー戦史科学研究所の公式サイトを参照した。

[4] 14-16 世紀に男性人口を単位として行われていた国勢調査。

め、距離により隔離された空間の中で、意識的にあるいは無意識的に自分の土地（シベリア）、生活様式、シンボルなどとの独自の関係性、「地域アイデンティティ」が構築されるようになっていく。

歴史的な観点から見れば、16 世紀後半からいくつかの歴史的段階を通じて「シベリア地域アイデンティティ」を持つようになるシベリアに住む人が形作るグループのフレームワークが形成されはじめるのである。まず、いわゆる「シベリア人」という概念が形成される 17 世紀前半に、シベリアに移住してくるロシア人に対し「シベリア人」が初めて使われ、その後先住民族に対しても使われることになる。17-18 世紀のシベリアを描写するセミョン・レメゾフの『簡潔なシベリア年代記』[5]（1880）には、「シビルストヴォ」（シベリア性）が特定の社会民族学的類型として語られ、「われわれのシビルストヴォはずっと存在していた」という主張が窺える。これは「シベリア地域アイデンティティ」の形成と「われわれはシベリア人である」という自己認識を基礎とするシベリア地域への精神的な帰属性の意識の存在を示唆するものである。これは、ロシア帝国中央部の政治的・経済的・文化的構造の強い影響から排除された、シベリア地域の気候的・社会的条件などに適した生活を行うことによる結果だった。17-18 世紀から、シベリア生まれのロシアの旧入植者（17 世紀前半から移住してきたロシア人）に属する人口の一部により、「中央部」と対照的に「周縁」の利害を考慮したある種の境界線フロンティアが形成され、シベリア地域の利害が顕在化する。これは、やがてシベリア地域を中心とした地域主義というイデオロギー及びシベリア地域における特定の空間的・気候的・文化的・経済的条件の環境により影響されたシベリア住民の独自の生活様式や伝統などの出現につながる。17-18 世紀からは、「ロシア」と「シベリア」の相互作用の中で「ロシアに行く」、「ロシアからシベリアに来た」といった発言が頻繁に見られるようになる。つまり、シベリア地域に土着したロシア人は、年月が経つにつれ中央から離れていき、地域主義に基づく独自のシベリアとの関係性が形作られるようになるのである。

「シベリア地域アイデンティティ」の形成過程における 2 つ目の段階は、18 世紀後半と関連している。18 世紀後半までにシベリア地域におけるロシア人人口が大幅に増加し、新聞やその他の出版物などといったさまざまな形態の地域文化機関が出現し、チュメン、トボリスク、トムスク、クラスノヤルスク、イルクーツク、ヤクーツク、チタ、ヴェルフヌーディンスク（ウランウデ）など、シベリア地域に大きな都市が発展する。これらの地域的・文化

[5] ロシア語で *Кратская Сибирская летопись* (1880) 。

的生活の各中心（都市）は 16 世紀後半から 17 世紀初頭にかけて現れ、18 世紀後半までにシベリアにおいて社会文化的・経済的に重要な位置を占めるようになってから、さまざまな階級が形成される。その中には、住民の活動的な部分の領土的・文化的自己認識の形成に影響を与えていく知的階級も含まれていた。このプロセスは、厳格な階級や農奴制が存在しないシベリアの生活様式の民主主義により促進される。このように、徐々に 19 世紀までに「シベリア地域アイデンティティ」の形成過程は安定し、シベリアに住む人により意識されるようになる。つまり、シベリア地域はロシア帝国の地域でありながらも、独自の特徴を持ち中央部とは異なる特別な地域であるという、中央部との対照に基づく自己認識が形成されたのである。

1.3.2 シベリア人の視点からみた「シベリア地域アイデンティティ」の歴史的形成：19 世紀

「シベリア地域アイデンティティ」の最終的な形成段階は 19 世紀である。この時代のシベリア人のアイデンティティの現実化は多くの要因によって決定される。その中で、シベリア地域の発展に関心を示していたシベリア住民――特に旧入植者[6]――の増加が一つの要因であった。特に法律が制定される際、シベリア住民は地域の特徴、確立された経済的・経営的・人間的関係・先住民族の状況を考慮する必要があると主張した。つまり、彼らは自分たちが帰属すると自己認識するシベリア地域の発展に積極的な立場をとった。1822 年に、皇帝アレクサンドル 1 世が承認したいわゆる「シベリア改革」の基礎となる一連の法律を作成した改革者ミハイル・スペランスキー[7]は、シベリア地域の発展を願うシベリア住民による意見を考慮し、シベリア地域の全面的な発展計画を支持した。スペランスキーは、中央（最高権力者）の利益と地方の利益との間の妥協案を作成し、シベリアを全帝国の立法と行政の作用に完全に従属させることは不可能であると考えた（ダメシェク, 2009, p. 99)。これに伴い、先住民族の運命に十分な注意を払い、1822 年「先住民族の管理に関する法令」[8]が採択される。この法令は先住民族をロシア社会の階級の一つとして認め、シベリア地域に住む先住民族を国の機構とさまざまなプロセスに積極的に導入することを示しており、シベリア地域に住む先住民族がロシアの社会政治的・社会文化的生活の主体となることを許可した（ロ

[6] ロシア語で “старожилы” 。

[7] ロシア皇帝アレクサンドル 1 世の政治顧問。

[8] ロシア語で “Устав об управлении инородцев”（1822 年)。

シア文化省による大ロシア百科事典 2004-2017)。法令の制定を機に、シベリアに移住してきたロシア人と共に先住民族にも教育（先住民族によるロシア文字の利用)、キリスト教の普及、新しいタイプの経済活動への適応といった要素が窺えるようになり、19 世紀前半に先住民族によるさまざまな生活領域への参加は大幅に拡大し、先住民族の間にもいわゆる「シベリア愛国主義」が出現する。

スペランスキーによる「シベリア改革」は、帝国の利益と地域の利益の矛盾の問題を完全に取り除いたわけではなかった。シベリア地域の管理において「シベリアの事情」、地域の特徴、先住民族の利益を考慮に入れることに対し、サンクトペテルブルク官僚は反対の立場だった。このような状況で、シベリア出身でシベリアの事情をよく理解している人の間で政府の革新に対する拒否の考えが生まれはじめ、19 世紀後半にサンクトペテルブルク大学でいわゆる「シベリア地域主義者」と呼ばれるシベリア出身の市民の抗議運動が出現する。積極的な参加者にはN.M.ヤドリンツェフ、G.N.ポタニン、S.S.シャシュコフ、I.V.フェドロフ・オムレフスキーなどが挙げられる。グリゴリー・ポタニンによれば、シベリア地域主義者の主な任務はシベリア人の心の革命と頭の空虚さをなくすことであった。ポタニンは「シベリア地域主義者」の運動のイデオロギーについて以下のように綴っている。

「*私たちは、独立して生活し、発展し、自分たちの道徳と法律を持ち、ロシアに言われたことではなく、自分たちの望む読み書きをし、自分たちの望むように子供を育て、自分たちのやり方で税金を徴収し、自分たちのためだけに使うことを望んでいます*」

ポタニンによれば、シベリア地域主義者のプログラムには文化の分野や内部政策などでの分離主義が含まれていたが、国の完全性の破壊、すなわち政治的分離主義は除外されていた（グルム＝グルジマイエロ, 1987, p. 59)。シベリア地域主義の運動は、1840 年代にスロフツォフ、エルショフ、モルドヴィノフといったシベリア出身地元の知識人の著作で部分的に紹介され、確立された考えに基づいていた。一部の学者、例えばL.M.ダメシェクによれば、シベリア地域主義に大きな影響を与えたのが亡命ポーランド人とナロドニチェストヴォ（革命的人民主義）のイデオロギーである。シベリア地域主義のプログラムには、シベリア地域の文化的・経済的発展の問題・先住民族の問題などが積極的に盛り込まれた。シベリア地域主義者の多くはシベリア出身で自身をシベリア人であると自己認識していたため、シベリア地域における社会的・文化的発展、伝統の保護といった考えは彼らにとって理解しやすい

ものだった。シベリア地域主義運動は、シベリア地域アイデンティティの形成による結果だったのであり、さらに、シベリア地域における共同体のさらなる発展の重要な要因として機能していた。シベリア地域主義者はシベリアの知識人社会を団結させ、シベリア地域アイデンティティのさらなる構築に貢献し、「目覚めよ、シベリア人！」というスローガンを流行させた。このように、シベリアの地域主義者たちによれば、シベリア地域アイデンティティとメンタリティは 19 世紀後半に最終的に形成され、当時のロシア帝国の他の周辺地域と比較して、ある程度の独立性を持っていたのである。

シベリア地域アイデンティティは、ストリピンによる農地改革（1906-1911）[9]の時期にシベリア人にとって特に重要な意味を持つようになった。P.A.ストリピンの移住政策により、ロシアのヨーロッパ地域からシベリア地域へ大量の人が移住することになる。1861 年から 1891 年までのシベリア地域の人口は 45 万人だったが、1905 年から 1914 年までの間に 300 万人に達する。このことはシベリア地域を単一の帝国空間に統合する傾向を強め、土地問題を複雑化させていった。農民と先住民族の土地の減少につながったからである。ストリピンの移住政策は、中央の政策に対する農民と先住民族の強力な抗議運動の基礎となった（ボロノエフ, 2010, p. 83）。シベリア地域において国是を根付かせるというストリピンの目的は、シベリアにおける伝統の基盤を破壊することにつながりうるため抗議意識が発生する。これらを踏まえれば「われわれはシベリア人である」というシベリア地域アイデンティティの形成は、この地域が全ロシア空間に統合される過程や、中央から疎外された生活様式の特徴を理解することと大きく関係していると言える。

1.3.3 シベリア人の視点からみた「シベリア地域アイデンティティ」の歴史的形成：1917 年から 1922 年

1917 年 5 月から 10 月前半にかけて、シベリア地域主義は大きな変貌を遂げる。シベリアのすべての地方都市に存在していたわけではないが各地に散在していた小さな知識人のサークルから、初めて地域規模の社会的・政治的運動へと変化するのである。つまり、1917 年に「シベリア地域主義者」の思想は発展する社会的・政治的運動の基礎となったのである。「シベリア地域主義者」は、自然条件や気候条件の特徴、歴史的・民族学的に特殊なロシア人（ロシアの旧入植者）の形成、地政学的な位置づけなどといった基準に基づいて、シベリ

[9] ストリピンによって開始された農地改革（1906-1911）は、ロシアのヨーロッパ地域からシベリア、極東、北カザフスタンへの農民の集団移住を計画した。

アを独立すべき地域であるとした。「シベリア地域主義者」はシベリアの自治に関するアイデアを概説したのである。シベリア地域主義者グリゴリー・ポタニンが、地域主義者の観点から「シベリアの自治」は国家の完全性への侵害を意味しないと述べたにもかかわらず、1917-1922 年の内戦期に国家が弱体化した中で、地域主義者の思想は部分的に「分離主義者」の思想の基礎として取り上げられた。そのため、内戦の最中には、異なる民族グループに基づいて異なる国家を作ろうというアイデアが少なからず提起されていた。

1917 年のシベリアでは、シベリア地域主義者のアイデアを引用しながら、社会革命党、人民社会主義者、地域主義者、メンシェヴィキ（ロシア社会民主労働党の社会主義右派）、ナショナリストを含む組織やグループなどが集まり、社会的・政治的運動が生まれる。彼らは自分たちが支配する市議会、ゼムストヴォ委員会（ロシア帝国における地方自治の選挙機関が置いた委員会）、農民代議員ソビエト、協同組合などを通じてシベリア地域の自治的地位を獲得しようとした。この社会的・政治的運動の理論的基礎は、シベリア地域主義者の概念規定によって形成された。協同組合「セントロシベリア」委員総会の決議（1917 年 8 月）には「シベリアの自然の豊かさに溺れ、住民は平時でさえ、釘、砂糖、布、更紗の一つ一つを必要としていた。シベリアの富はほとんどただ同然で海外に持ち出され、そこで加工され、工場製品の形でシベリアに高値で売られる」と強調されていた[10]。1917 年のイルクーツク地域主義者の指導者だったセレブレンニコフは、この状況を打開する方法を「シベリア全土に共通の、適切な執行機関を持ち、国家財政からシベリアの財政を配分し、この地域議会に植民地の経済全体を管理する権利を与える」（セレブレンニコフ, 1917, p.129）シベリア地域議会の設立に見出した。このように、1917 年から「シベリア地域アイデンティティ」に対するアプローチが過激化・政治化するのである。

ところが、シベリア地域主義者の社会的・政治的運動レベルでの議論では、シベリアの自治についてのコンセンサスは得られなかった。1917 年 10 月 9 日から 12 日までの間、社会革命党に属するザハロフが「シベリアの地域構造」の報告の中で、シベリアを含む領土における行政の分権化を提案した。同時に、地域内生活の最優先課題は「土地の社会化と先住民族の生活の整理に関連する土地問題の解決である」とした。ザハロフは、ロシアの連邦制と、1905 年に採択された「シベリア地方議会の基本規定」によって規定された一連の権限を持つシベリア地方の代表機関であるシベリア地方議会の組織を擁護した[11]。

---

[10] オレル州アーカイブを参照した。

[11] ノボシビルスク州アーカイブを参照した。

しかし上で述べたように、討論の中で、シベリアの自治権の問題に関して個々の派閥の中でさえ代議員たちの意見が一致していないことが明らかになった。士官候補生は「ロシアの不可分の一つであるシベリア」に強く賛成した。士官候補生のトムスク組織の代表であるI.A.ネクラソフは、「我々は偉大で統一されたロシアを持っており、ロシアを構成する民族は我々とともにあり、我々とともに死ぬだろう」と述べた。彼を支持したシベリア・カザーク部隊の代表E.P.ベレゾフスキー大佐は、「すべての民族の中で最も寛容なロシア人民だけが、彼らに与えられたすべての才能を発展させ、顕在化させる機会を与えることができるだろう」と、ナショナリストに警告した。そして演説を「シベリア・カザークは十分に組織化され、十分に強く、したがって、われわれが国家の統一を破壊しないように努力するとき、彼らは友好的な家族の一員となることができることを忘れないでいただきたい」[12]と締めくくった。さらに、自治を支持する人は自治派と連邦派、すなわちシベリアを1つの地域として認める者といくつかの州に分割することを支持する者に分かれる。

前述した 1917 年の間に起こった出来事についてまとめると、「シベリア地域アイデンティティ」という考え方そのものが急激に過激化し、オピニオン・リーダーたちによって、シベリア地域の自治プロジェクトを作り出そうとする社会的・政治的な道具として利用された。しかし、「シベリア地域主義者」の思想に基づく運動の中でさえ意見の統一は見られなかった。二月革命後、1922 年に至るまでの内戦のアクティブな交戦中に、ナショナリストは白軍の勝利に賭け、1919年夏にA.S.ベレツキー＝ベロルソフ委員長の下、シベリアでA.V.コルチャークがボリシェヴィキに勝利した後に約束した国民議会選挙に関する規則を作成するための委員会を設置する。シベリアの自治の問題を提起する最後の試みは、この委員会の活動に関連している。しかし、赤軍の勝利によってシベリアの自治計画は破壊されると共に「シベリア地域アイデンティティ」の社会的・政治的道具としての考え方も破壊される。

1.3.4 シベリア人の視点からみた「シベリア地域アイデンティティ」の歴史的形成：大祖国戦争及びシベリアにおける戦後の経済復興活動

さらなる「シベリア地域アイデンティティ」の発展は、大祖国戦争中に見られる。戦時にドイツ軍の占領とロシアのヨーロッパ地域の大部分が破壊されたため、シベリアはウラル山脈と共に大きな役割を果たす。ウラル、シベリア、極東が戦線の後衛となり、軍事産業が

[12] トヴェリ州アーカイブを参照した。

活発に発展し、「シベリア人らしさ」、「シベリアの健康」、モスクワやスターリングラードなどを防衛した有名な「シベリア師団」が語られるようになる。大祖国戦争が勃発すると地域分離主義は衰退し始めると共に、敵から自分にとって聖なる場所である故郷を守るという強い意志を通じて愛国主義的な思想が強まる。その中で、戦時の国内外の移動により、シベリアを含め各地域に対する「故郷への愛」、「ノスタルジー」などといった感情的傾向が出現する。このように、大祖国戦争中、シベリア住民のシベリアとのつながり、言い換えれば「シベリア地域アイデンティティ」はシベリアの地域主義に基づいてではなく、愛国主義、すなわち祖国及び故郷を守るという意識に基づいて強化されるようになったと言える。また重要な点は、1941 年以降敵軍による攻勢のためソ連最高司令部が人、価値のあるもの、国にとって重要な産業などを国土の後方に疎開させることであった。疎開は中央部からウラル、シベリア、その他のソ連の共和国へ行われていた。疎開の主要地域の一つとしてシベリア地域が選ばれたのである。前線から離れていること、工業や農業が発展していることがその要因となった（サフォノワ, 2000, p. 122）。戦時中の疎開は、やがて 1950 年代以降のシベリア地域における戦後復興、産業、文化などの発展に大きな役割を果たした。つまり、戦後の復興と発展に必要な産業・文化基盤が準備できたのである。このように、戦時中は中央部との文化的及び産業的相互作用が盛んであったと言えるだろう。シベリア人がロシアの中央部の戦線に赴き、同時に中央部からシベリアへの人と文化的価値の疎開が行われた。一方、中央部から疎開されてきた産業は、戦後のシベリア産業のさらなる発展につながる。

戦争終焉後、「故郷」的な波は鎮まることなく同じ速度を保つ。その理由は戦後のシベリア地域の大規模な開発という経済的要因であると考えられる。1940 年代からソビエト連邦政府によるシベリア地域開発計画が立てられ、農業発展や工業化などが進行し（表 1-1.）、シベリア地域住民にとって生活環境改善への道が舗装される（ネクリロフ＆ルコフ, 2012, p. 14）。戦後は経済の再建、食糧及び原材料の供給など、多くの課題を解決しなければならなかったからである。

表 1-1.　20 世紀後半シベリア開発に関わる具体的な取り組みに関する年表

年	シベリアの発展に関わる 20 世紀後半のさまざまな取り組み
1945	アルタイ共和国のバルナウル合成繊維工場（着工）；ハカシア共和国のソルスク・モリブデン工場（着工）
1945	クラスノヤルスク地方のコバルト工場（運転開始）
1946	1946-1950 年代の五カ年計画が決定 （重工業と運輸の優先的復旧を定めたもの）
1946	南シベリア鉄道（着工）
1946	クラスノヤルスク地方の原子力産業（運転開始）
1950	クラスノヤルスク地方の精錬所（運転開始）
1950	クズバス（ケメロヴォ州）において約 7000 万トンの石炭を採掘
1951	1951-1955 年代の五カ年計画が決定 （アンガラ川のエネルギー資源を開発し、安価な電力と地元産の原材料をベースに、アルミニウム、化学、鉱業、その他の産業の発展を定めたもの）
1952	クラスノヤルスク地方の電気冶金工場（運転開始）
1952	クラスノヤルスク地方のノリリスク・ニケル非鉄金属生産企業（運転開始）
1953	クラスノヤルスク地方のプラスチック濃縮工場（運転開始）
1953	ノボシビルスク州の特殊錫精錬所（運転開始）
1954	サハ共和国で最初のダイヤモンド鉱床を発見
1954-1966	イルクーツク州のブラーツク水力発電所（建設・運転開始）
1956-1958	ノボシビルスク州のノボシビルスク水力発電所（建設・運転開始）及びイルクーツク州のイルクーツク水力発電所（建設・運転開始）

1953 年後半がソビエト連邦経済における急激な変化の嚆矢となる。この時期は大きな社会変革が始まり、国の指導部が東部地域、中でもシベリアに関心を向けるようになる。ソ連共産党第 20 回大会で方針転換が目指され、シベリア地域に注目を払うようにと述べられた（同上, 2012, p. 11）。このように、フルシチョフ雪解け期の 1950 年代から工場建設、水力発電所の建設など、シベリアの経済を積極的に発展させていく動きと共に、イデオロギー的緩和下ではシベリア地域における文化的活動の活発化が見られる。例えば数々の地方出版社が登場し、さまざまなシベリア的文芸雑誌が現れる。具体的にはサハ共和国の『北極星』[13]、ブリャート共和国の『バイカル』[14]、アルタイ共和国の『アルタイ』[15]などを挙げることができる。

ところが、1950 年代からシベリア地域で繰り広げられた社会経済的変革は、期待ほどは順調に進まなかった。それは、何代にもわたりシベリア地域内部で確立された生活様式に侵入し、伝統的な基盤を壊し、故郷であるシベリアが壊される危機に直面させられたからである。過去に存在していたシベリアのイメージが変容し、新たなイメージが形成されるように

[13] ロシア語で“Полярная Звезда”。

[14] ロシア語で“Байкал”。

[15] ロシア語で“Алтай”。

なる。このことは多くの社会的及び道徳的問題を引き起こした（ゴルシェニン, 2020, p. 184）。つまり、シベリアへの強い帰属意識、シベリア地域アイデンティティを持つ人による反対の意見が見られるようになったのである。シベリア人の生活様式及びその地域アイデンティティは、故郷であるシベリアの自然の特徴に大いに基づいている。水力発電所の建設により地元民は居住地の変更を余儀なくされたり、伐採により地元民が狩猟を行える森林地帯が破壊されたりした。シベリアの大地の活発な開発により、自然景観の破壊・変化と共に地域住民の生活様式も変容せざるをえなかった。従って、20 世紀後半に大規模に行われた産業企業や施設（水力発電所、バイカル・アムール幹線など）の建設は、シベリアの自然や生活様式などに対する心配を煽り、シベリア地域アイデンティティのさらなる発揮につながる。このような発揮は、前世紀に見られたように「シベリア地域」と「ロシア中央部」の対照に起因している。1950 年以降の経済拡大が引き起こした問題は、シベリア人が最もよく理解していたからである。そのため、シベリア人にとってこの地域の環境問題もまた、歴史を通じてロシア中央部との相互作用性の中で「シベリア地域アイデンティティ」を反映する要素の 1 つとなったのである。

1.3.5 シベリア人の視点からみた「シベリア地域アイデンティティ」の歴史的形成：1980-1990 年代から現代まで

1980-1990 年代、ペレストロイカと最初の改革の時代には「シベリア地域アイデンティティ」の衰退が見られる。これは産業・文化・社会関係の破壊と密接に結びついている。シベリアでの生活の「価値」（威信）が失われ、シベリアからロシア中央部への人口移動が拡大していく。そのためロシア中央部に移住したシベリア出身者はシベリアとのつながりを失うケースが増加する。

しかし、ロシア中央部への人口移動傾向が見られるにもかかわらず、「シベリア地域アイデンティティ」は忘却の彼方へ消えていくことはなかった。2002 年にナタリア・スヴェルクノワにより行われた調査によれば、例えば東シベリアでは回答者の約 80%が「シベリア人である」と自己認識している。このことは、シベリアの住民にとってこの地域に住んでいるという事実が特別な意味を持っており、シベリアに関わる遺伝的記憶やシベリアにおける生活様式などとの繋がりが存在することを示唆している。さらに調査によれば、シベリア住民の 77.7%が「自分にシベリア人らしさがある」と主張している。全回答者のうち（シベリア住民以外の人も含め）、58.6%が「シベリア人らしさ」を持っていると答えている（スヴェ

ルクノワ, 2002)。

1.3.6 歴史的観点からみた「シベリア地域アイデンティティ」に関するまとめ

シベリア人の視点から「シベリア地域アイデンティティ」形成の歴史的過程をまとめると、「シベリア地域アイデンティティ」は 16 世紀末から 4 世紀にわたって形成されてきたと言える。黄金ホルドが滅亡した後、現在の西シベリア地域に位置していたシベリア・ハン国がロシアによって征服され、いわゆるシベリア地域の認識領域は拡大し、ウラル山脈から太平洋分水嶺までの地域を 1 つの国の枠組みの中で認識するようになった。このように統一ロシア空間の中に「シベリア地域アイデンティティ」が形成され始め、いわゆる「シベリア人」とは、初めてロシア中央部からシベリアに移動したロシア人を指すようになった。つまり、既に中央部の住民ではないというシベリア地域との関係性に基づく人の認識が出現するのである。

その最大の特徴は「ロシア中央部との対照」である。シベリアという地理的な地域に移り住んだロシア人と以前から住んでいた先住民族は、16 世紀以降、ロシア帝国の中心部からかなり離れた地域で共同生活を始めた。ロシア人は、中央地域との行政・親族関係・文化などの結びつきは保たれたものの、シベリア地域は遠隔地であるがゆえに、時間の経過とともにシベリア住民レベルで地域アイデンティティとメンタリティが形成されるようになる。19 世紀後半に、知識階級のレベルでシベリア人であると自己認識するいわゆるシベリア地域主義者が現れ、中央の地域政策に反対してシベリア地域の問題に注意を向けようとしたのも「シベリア地域アイデンティティ」の現れである。

1917-1922 年の内戦時に「シベリア地域アイデンティティ」は、シベリアの自治権を獲得しようとするシベリアの地域主義者たちによって、イデオロギー的・政治的な道具として使われ始めた。これは、この地域をロシア中央部に「対照」させるという長い伝統の存在によるところが大きかった。しかし、大祖国戦争中の 1940 年には既に共通の敵の存在が、ロシア全土の社会における愛国心の高まりに大いに寄与することになる。このように、「シベリア地域アイデンティティ」の新たな歴史的段階は、シベリアを含むすべての地域（シベリアの地理的領土に位置するすべての州や共和国など）の結びつきの強化によって特徴づけることができる。

戦後の 20 世紀後半には、「対照」的傾向が新しい隆盛を迎える。戦後のシベリアの急速な経済拡大が、シベリアの自然保護や文化的生活の破壊などを考えさせるようになったので

ある。「シベリア地域アイデンティティ」の担い手として、地域の問題とその解決策を知るシベリア人は、エコロジーやシベリア民族の伝統的な生活様式などについて語り始める。エコロジーや農村などのテーマは地元文学作品の中で積極的に扱われ、シベリアの現代的イメージである文化的イメージの創造に大きく貢献している。1980 年から 1990 年にかけて、政治的・経済的な混乱にもかかわらず「シベリア地域アイデンティティ」は存続し、今日に至るまでシベリアのマクロ地域の住民の多くは（たとえ異なる州に住んでいても）自分をシベリアと結びつけ、「シベリア人」と自己認識している。

まとめると、「シベリアの地域的アイデンティティ」は現実に存在し機能している現象であり、独自の歴史、段階、実質的な内容を持っていると結論づけることができる。「シベリア地域アイデンティティ」及びシベリア住民による「シベリア人」という自己認識は、シベリア地域の特徴である中央部からの遠隔性、特殊な経済・民族構造、自然条件と関連しており、ロシアで 4 世紀にわたり繰り広げられていた歴史的プロセスの枠組みの中で形成されていったものである。このことは、歴史的に形成された複合的な社会文化的空間としてのシベリアの存在を物語っており、その社会的プロセスは、気候、地理、ロシア中央地域との関係の歴史、文化的・民族学的・言語学的特徴に関連した独特の特徴を持っている。この点を踏まえながら、次節では「シベリア地域アイデンティティ」の本質について学術的な側面から述べる。

1.4 「シベリア地域アイデンティティ」の実態に関する問い

1.4.1 現代における「地域アイデンティティ」のアプローチ

ここまで考察してきた「シベリア」という地域の地理的・気候的・歴史的な特徴から、「シベリア」は複合性を持つ概念であると言うことができる。第 1 に「シベリア」を物理的な「地域」という観点から分析することが可能である。つまり、独自の気候的特徴を持つマクロ地域としても、地理的にマクロ地域「シベリア」の領土に位置するロシア連邦の各構成体としてもとらえることができる。第 2 に「シベリア」は、シベリア人自身と外部の人による不安定で時間と共に変化しうるシベリア地域に対する認識が見られる、複雑な歴史的プロセスの枠組みの中で形成された独特な社会文化的「空間」としても受け止められる。このような複雑な構造を持つシベリア地域こそが「シベリア地域アイデンティティ」の基盤なのである。このことは、「シベリア地域アイデンティティ」そのものの「場所と空間のダイコトミー が存在し、場所の概念は領土の確実性、明確なスケーリングと関連づけられ、一方、

空間の概念は領土の不確実性、明確な領土境界の欠如へと向けられている」(ザミャーチン, 2020, p. 43)、というように複合的な構造の所在を示唆している。このように、「シベリア」はある種の心理地理的な枠組みとしてとらえることができる。つまり「シベリア」を、シベリア地域との精神的なつながりに基づく「シベリア地域アイデンティティ」の形成及び絶え間ない変容が窺える、一種の心理地理学的な枠組みとして見なすことができる。しかし「シベリア地域」や「シベリア地域アイデンティティ」に対して、領土的な確定性や固定性を超えて、このような複合的なアプローチを使うことができるのか。

古典的なモダニズムのアプローチでは、いわゆる「地域アイデンティティ」は「人」と「地域」の間に安定した結びつきを形成する固定された地理的空間に大きく依存する点が窺えた。言い換えれば、個人が明確な境界を持つ地域とのつながりの認識による、アイデンティティの安定した不変の形が注目されていた。しかし「地域アイデンティティ」に対する現代的なアプローチでは、「地域アイデンティティ」を動的な性質を持つ多要素の現象とみなす視点が見られる。Brenner によれば、「固定された、強固な、自明な、先験的に与えられたものとしての地理的空間に関する伝統的なユークリッド的、デカルト的概念は、少なくとも批判的地理学理論においては現在再考されている。進化の過程、力学、社会政治的内容に生産的な重点が置かれている」(Brenner, 2001, p.592)。さらにザミャーチンは、ポストモダニズム的解釈における「地域アイデンティティ」とは地理的イメージ、地域の神話、文化的景観の「ブリコラージュ」(レヴィ＝ストロースの用語)であり、特定の瞬間に特定の精神的モザイクとして形成されるものである(ザミャーチン, 2020, p. 44)と述べ、ダイナミックで変容に着目した考え方をしている。このように、現代的なアプローチに基づいていえば「地域のアイデンティティ」とはある地域に関する固有のイメージの集合であり、それは時間(歴史)の経過とともに形成と変容のダイナミックなプロセスを経て、時間軸上のある瞬間における物理的な場所や空間への精神的帰属を形成するものと考えられる。言い換えれば、特定の「地域」の行政的、精神的な境界などは歴史を通じて変化する。その変容に寄与するのは、歴史上のある瞬間における「地域」の物理的な場所の特殊性(地理的または行政的な境界線)及び空間の特殊性(政治的状況、民族構成、言語的特徴、地域の儀礼など)の両方である。

また、歴史のある時点では、不安定でダイナミックに変容する「地域アイデンティティ」が規模にかかわる複合性を持つこともある。特定の地域に住む個人は、同時に自分自身を都市、村、地域などの一部と認識することも可能であるし、より広い空間(ロシア、独立国家共同体(CIS)、ソ連、ロシア帝国)の一部としての認識をもつことも可能である。ロシアの

地理学者クリロフは「地域の形成は、それぞれの地域の住民の社会文化的な選択により説明される」と述べている（クリロフ, 2005, p. 286）。従って地域は大都市であったり、行政区画単位であったり、行政区画単位の集合であったり、歴史的・文化的空間であったりする可能性がある。すなわち「地域アイデンティティ」を理解するために重要なのは地理的な空間そのものではなく、空間の感覚、物理的な現実とそれが呼び起こす感情（精神的帰属性）との融合なのである。

上の「地域アイデンティティ」の問題に対する現代的アプローチに関する記述からすれば、「地域アイデンティティ」は地域の物理的な場所と空間の特徴に基づき、ダイナミックで複合的な構造を有し、歴史においてその時々に見られるさまざまな社会的プロセスを通じて形成される、個人による地域への帰属認識である。研究アプローチにおける現代的な傾向を考慮すれば、「地域アイデンティティ」を 2 つのレベルから分析することが可能である。1 つ目のレベルは、特定の地理的空間において明確に指定された場所を占める、自分の文化・言語・聖地・神話などといったオリジナルな文化的特徴を持つ地域集団を理解しようとする試みである。このレベルでは地域の複雑性、つまり特定の歴史的瞬間に形成された「自己同一化のためのイメージ」の骨格を構成する独自性に焦点を当てて「地域アイデンティティ」を分析する。また 2 つ目のレベルでは、地域を、常に変化する「枝分かれする」複合現象として理解することに注目する。これは地域の境界線、人口構造、イデオロギー的状況、移住プロセス、他の地域との関係性などの変容を考慮しながら、歴史的プロセスの中で変容（形成・強化・弱化など）を繰り返す「地域アイデンティティ」の実態を見ていくものである。

このように、シベリアのような、ロシア中央部との関係において数多くの歴史的プロセスと結びついた複合的な構造を持つ複雑な地域を研究する際、シベリア地域における諸特徴を含む「シベリア地域アイデンティティ」の歴史的かつ動的な性質に焦点を当てた現代なアプローチこそが、「シベリア地域アイデンティティ」の実態だけではなく「シベリア地域アイデンティティ」に関わる、現代におけるさまざまな社会的プロセスを理解するために有用であると考える。

1.4.2 「シベリア地域アイデンティティ」の特徴

本項では、上記に述べたシベリア地域の特徴的な地理、気候、歴史的プロセスなどの要素を考慮に入れながら、「シベリア地域アイデンティティ」の複雑で複合的な構造の「構成要素」を示してみる。

多様な要素を含むシベリアの複雑性に注目すると、「シベリア地域アイデンティティ」のさまざまな側面を形成するのに働きかける地理的、気候的、文化・民族的、言語的、社会的構造のような要素を抽出することができる。例えば自分を「シベリア地域」と関連付けている人は、西シベリアと東シベリアの両方を含む地理的なマクロ地域であるシベリアに属するという点で、自らを「シベリア人」と認識できる。また、シベリアは気候的に厳しい地域であるという点に基づく「シベリア」への帰属性の可能性も抽出できる。民族文化学的には、シベリアに住む民族（エヴェンク人、ブリヤート人、タファラール人など）とその言語への帰属意識が存在しうる。社会構造の観点からは、シベリアのコサック、先住民、シベリアの各種組織などへの帰属意識が存在するだろう。

「シベリア地域アイデンティティ」の存在のもう 1 つの重要な要素は、シベリア地域の領土で起こったさまざまな歴史的プロセスである。一方では「シベリア地域アイデンティティ」のさまざまな特徴的側面が、4 世紀以上にわたり歴史の各時代に形成されてきた。例えば 17 世紀初頭、シベリアとロシア中央部が合併した段階では、シベリアへの帰属意識は主に「中央部からの移動」、言い換えれば中央部の空間からの距離に基づいていた。17 世紀末から 19 世紀にかけてのシベリアへの帰属意識は、シベリアの先住民族と共に共通の文化空間が形成される「シベリア地域アイデンティティ」の形成と、シベリア地域のニーズや複雑性などに基づき中央地域との対照により強化される「シベリア地域アイデンティティ」の定着がみられる。20 世紀初頭には「シベリア地域アイデンティティ」の政治化と過激化が進むことで、この時代の帰属意識は大いに政治的道具としての帰属を内包していた。大祖国戦争時には共通の敵の存在を背景に、国民的アイデンティティの一部としての「シベリア地域アイデンティティ」形成を見ることができる。1950 年代半ばから 1970 年代末にかけては、大規模な産業プロジェクトにより破壊されかねないシベリアの自然と文化を「守らなければならない」というシベリア人の自覚による、アイデンティティの新たな強化の波が窺える。また 1980 年から現在に至る時代は、1980 年後半から 1990 年にかけてのロシアの複雑な政治的過程により、消滅してはいないものの「シベリア地域アイデンティティ」が弱化しているためシベリアへの帰属意識も弱まっており、国民的アイデンティティとの同化の傾向が強い。このように、さまざまな歴史的瞬間において帰属意識すなわち「シベリア地域アイデンティティ」は変容し、多様な形をとっていた。一方、ある特定の段階への帰属意識ではなく、歴史的プロセス全体への帰属意識という観点からも「シベリア地域アイデンティティ」を考えることができる。つまり「私はこのような歴史を持つシベリアに属している」という「シベ

リア人」としての自認である。

付け加えると、「シベリア地域アイデンティティ」の構成要素は固定されたものではない。これらの側面は、自分のことを「シベリア人」と自認する個人においても集団においても重なり合い、重層しうるものである。例えば、シベリア人と自認する個人はその地域の歴史や地理に焦点を置く可能性がある。また「シベリア人」と自認する集団は、気候や先住民族への帰属を強調する可能性がある。

1.5 小括

第 1 章では「シベリア」と「シベリア地域アイデンティティ」という 2 つの概念を分析した。その結果、地理的に「シベリア」とはウラル山脈から太平洋流域までを指し、極東は含まれないことが明らかになった。また、この地域に住む人々はしばしば自らを「シベリア人」と自己認識する。いわば自分を「シベリア地域アイデンティティ」の持ち主として自認すると言える。

「シベリアの地域アイデンティティ」は、明確な枠組みを持たない複雑で複合的な現象である。このような「地域のアイデンティティ」を分析するためのアプローチとして、地域の場所と空間の特徴と、歴史を通じて起こったダイナミックな社会的プロセスの両方を考慮に入れる現代的なアプローチが「シベリアの地域のアイデンティティ」の性質を説明するのに最も適していることがわかった。

さまざまな要素を含むシベリアの複雑性に注目すると、シベリアには、個人や集団が自らを「シベリア人」と自認する根底にある地理的、気候的、民族文化的、言語的、その他の特徴が重なり合いながら存在している。また、シベリアにおけるさまざまな歴史的プロセスの分析を行うと「シベリア地域アイデンティティ」という現象自体がロシア中央部との「対照」に基づいているところが大きいことがわかった。ロシア中央部からの移住者（その後の先住民族も含めて）は、遠隔地であるシベリア地域との関係の中で、経済・行政・その他の政策を構築し、考慮すべき自分たちの特徴を自覚するようになり、「ヨーロッパ系ロシア人」ではなく「シベリア系ロシア人」という「地域アイデンティティ」を意識する社会的グループを構築する。

まとめると、「シベリア地域アイデンティティ」の形成プロセスにおいて次の 6 つの時期が抽出できる。1. 形成（17 世紀から 19 世紀末まで）、2. 過激化（1917-1922 年）、3. 1941-1945 年の大祖国戦争を背景とした国民的アイデンティティとの統一（1941-19145：シベリア

に関する「故郷」概念が出現)、4. 再発揮（1950-1970 年代：シベリアにおける産業拡大)、5. 劣化（1980-1990 年代)、6. 安定化（2000 年代から現在まで)。これらの期間を通じてさまざまな変容を遂げながらも「シベリア地域アイデンティティ」の根底には以下のものがあった。すなわち、1. 心理的に「自分自身」、シベリアの独自性を抽出することを可能にするロシア中央部との対照、2. シベリアの地域性の形成及びシベリア人にとって必要な中央部との相互作用(ロシア帝国臣民としての権利の獲得､経済発展､地域の環境問題の解決など)の両方に大いに貢献してきたさまざまな社会文化的プロセス（社会的運動、文学作品やエッセイの執筆など）である。

ここまで見てきたように､「シベリア地域アイデンティティ」とはロシア国内におけるシベリアという地理的地域の歴史的過程と、シベリアとロシア中央部の対照に基づく特殊で複合的な社会文化現象である。また弱化されたとはいえ、現在においても「シベリア地域アイデンティティ」は存在し、多くのシベリア人によって自覚的に認識されており､「シベリア地域アイデンティティ」を強化することを目的とした多種多様な社会文化的実践の機会を与えている。

第 2 章　近年のシベリア文学観光実践における「シベリア文学」の実態及びその特徴

2.1　本章の目的

第 1 章で述べたように、現代的なアプローチに基づく「シベリア地域アイデンティティ」は独自の特徴を備え、ダイナミックで複合的な構造を持っている。16 世紀末からシベリア地域で見られたさまざまな歴史的プロセスの枠組みの中で、シベリア地域は変化し、シベリアに対する態度も変容を遂げる。1980 年から現在に至るまで「シベリア地域アイデンティティ」は完全には消滅しないものの、弱まってきているのである。このような背景のもと、近年シベリアでは「地域アイデンティティの強化」を目的としたさまざまな社会文化的実践が行われている。例えば統一ロシア党によるロシア各地域に向けられた文化的地域プロジェクト「故郷の文化」、学校における文化・教育プロジェクト「私の故郷であるイルクーツク州」、イルクーツク国立フィルハーモニー管弦楽団による音楽・教育プログラム「静かなる故郷」などが挙げられる。これらの実践には、「地域アイデンティティ」形成の側面の 1 つであり、地域との特別な感覚的つながりである「故郷」というテーマが強調されていることが窺える。つまり社会文化プログラムの主催者は「故郷」というテーマが「シベリア地域アイデンティティ」の強化を促すことができると考えているのであると考えられる。同様の傾向は、部分的にシベリア観光の分野にも見られる。「地域アイデンティティの強化」を目的としながら、故郷のテーマが強調される 20 世紀後半シベリア文学を中心とした「シベリア文学観光」がその特徴を備えているのである。本章では、「故郷」という概念を通じて「シベリア文学観光」が実際に「シベリア地域アイデンティティ」の強化に繋がっているのかどうかを検証する。そのためにも議論の前提として「シベリア文学」とは何か、それはどのような「故郷」に関連した特徴を持っているのかを理解する必要がある。従って、第 2 章の中心テーマは「シベリア文学」に設定する。「シベリア文学」の概念とその歴史的形成過程を分析すると共に、シベリア文学観光の枠組みの中で使用されるシベリア作家のいくつかの作品を分析し、その時代のシベリア作家により作られた文学作品の特徴及びその故郷というテーマとの繋がりを明らかにしてみる。この分析により、「シベリア文学」とされる作品が生まれた歴史的背景だけでなく、「シベリア地域アイデンティティ」を形成した歴史的プロセスの複雑性や、近年のシベリア文学観光に利用されている 20 世紀後半のシベリア文学の特徴を見出すことができる。

2.2 「シベリア文学」の定義

現代文化史家のムスリム・アブスリャモブはシベリアの文化史に関する論考の中で、シベリアが諸民族の対話としての特別な文化的空間であると指摘している。「シベリアにおける生活の具体的な様子は、民族問題の平和的解決の明瞭な例、民族の会話である。無論、これはシベリアに到着した移民プロセスの参加者が、シベリアならではの文化生活の形態に同化しなければならなかったという事実により決定されたものである。彼らは完全に孤立することはできず、厳しい自然の条件下でその地域の生活の法則を素早く理解し、最適な在り方を原住民から学ばなければならなかったからである」(アブスリャモブ, 1995, p. 22)。アブスリャモブの主張からすれば、シベリアにおける生活様式、先住民族の文化、その諸民族の対話、言語の多様性、自然などといった地域の特徴こそが「シベリア文学」の根底を成していると言える。

いわゆる「シベリア文学」は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、シベリア出身で自身をシベリア人と自認する知識人により形成されたものである。シベリアの問題、生活様式の特徴、自然の独自性などを描写することで、シベリアの知識人たちは「シベリア地域アイデンティティ」のさまざまな側面を描写する道具としての文学の形成に大きく貢献することになる。しかし「シベリア文学」には 100 年以上の歴史があるにもかかわらず、確定した定義はいまだに存在していない。ところが「シベリア文学」の実態に関する言及は各時代に見られる。表 2-1.では「シベリア文学」に関する各議論をまとめた。

表 2-1.「シベリア文学」に関連する考察のまとめ

著者	年	頁	「シベリア文学」に関する諸言及
Koenig, H., Milgunov, N.	1837	300	ロシア文学の構成要素の 1 つで、シベリア人[16]により創作された文学である。
ゼレブツォフ, B.	1926	244	シベリア文学の特徴の 1 つが、作品におけるシベリア独自の「内面的な視点」が存在することである。このように、アイザック・ゴールドバーグ[17]は、ツングース[18]から、自然の力が人間の生命に及ぼす厳しい影響と、それに直面した人間の弱さ、そして雄大なタイガの単純で賢明な掟を感じ取った。
ザズブリン,V.	1927	187	特殊な文学の塊、シベリア文学には、ロシア文化と

[16] 先住民族及びシベリア地域に住む人を包括した名称。
[17] アイザック・ゴールドバーグの作品に着目し、分析した文。
[18] シベリア先住民族の 1 つ。

			原住民文化の相互作用が見られる。私たちはシベリア人という言葉を使う権利があり、作家に対してもこの言葉を要求する権利がある。シベリア文学という言葉の存在を証明するためには、作家は少なからず、生物学的、経済的、地理的要因などに言及する。
ベグマン, V., ゴールドバーグ, Z., ザズブリン, V., イティン, V., ポスペロフ, A., プシュカレフ, G.	1927	11	シベリア作家や詩人たちは、シベリアの生活とその特殊性に与えられた条件に基づき、プロパガンダや教義によらず、完全にシベリアの要素に包含されることにより、それに従属したシベリアの方法で書き始める。
アザドフスキー, M. K.	1932	163	シベリア文学は全ロシア文学の一部である。地域に着目した内容が、その一般的な発展と、そこで起こる階級闘争の過程を反映している。そこで見られる特徴は、階級闘争の一般的な過程が繰り広げられていた土地における状況や条件などの結果にすぎない。
クングロフ, G. F.	1975	20	特定のシベリア文学の存在はなく、ロシア文学におけるシベリアをテーマの 1 つとして見るべき。
ポストノフ, Y. S.	1982	5	シベリア文学に関する一般的な著作を作るというアイデアは、シベリアのテーマが、全ロシアとソビエトの文学史上、膨大な量の文学資料が説明されておらず、概説書でさえ考慮されていなかったからである。
アブスリャモブ, M. B.	1995	218	シベリアの文化は、全てのロシア文化と同様に矛盾に満ちており、シベリアでは、自然気候の特徴や地域生活のシステム編成の形態などにより、全ロシア文学ならではの特徴が現れる。

表 2-1.を基に「シベリア文学」に関する各主張を整理してみると、5 つのポイントを見出すことができる。すなわち、1.「シベリア文学」はロシア文学の一部である、2. 自然、先住民族、生活様式などシベリアの特徴的な環境に関する描写の要素を含む、3.「シベリア」と「ロシア」の相互作用の枠組みの中で捉えられている、4. 先住民族の生活様式に関する説明の要素が見られる、5. シベリア地域の問題やニーズなどに関心が向けられる、の 5 つである。これらのポイントを参考にしつつ、本章では「シベリア文学」を次のように定義する。「シベリア文学」とはロシア文学の一部でありながら、「中心」としてのロシアと「周縁」としてのシベリアとの相互作用のもと、「シベリア人」であると自己認識した作家によって描かれる文学である。自然、先住民族、生活様式などのシベリアの特徴的な環境や人々を主

な題材とするところに特徴がある」。すなわち「シベリア文学」とは、シベリアのさまざまな特徴に言及しながら自分を「シベリア人」と自己認識する作家により作られる文学であり、シベリアについての理解を与えることを目的とするシベリアの芸術的形態の 1 つである。本節で示した定義は、「シベリア文学」という概念の統一化された定義を抽出・設定する試みである。

しかし「シベリア地域アイデンティティ」と同様に、「シベリア文学」であるとされる各作品の内容は歴史的プロセスにおいて時代ごとに異なり、それぞれの時代におけるシベリア地域の特徴や、シベリア地域の特定の問題や特殊性などに注意を向けようとしている。上記に述べたように、近年シベリアで見られる文学観光実践で扱われる「シベリア文学」の実態を明らかにするために、次節では歴史的な観点から「シベリア文学」の変遷を見ていき、各時代の特徴を見出してみる。

2.3 歴史的な観点から見た「シベリア文学」の変遷

2.3.1 ロシア革命を境にした 20 世紀前半におけるシベリア文学の実態

前節で述べたようにシベリア地域アイデンティティの形成は、シベリア地域の諸特徴と、シベリアとロシアの中央地域との対照に基づき、数世紀にわたって行われた。それは 17 世紀以降、地域住民のレベルで起こった。しかし 17 世紀から 19 世紀半ばまではシベリア地域アイデンティティが文学のような文化現象に反映されることはなかった。「シベリア文学」という概念が生まれたのは、論理的に考えても 19 世紀末の知識階級の間からであろう。その始まりは 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての「シベリア地域主義者」によるものである。「シベリア文学」の形成及び各時代における特徴について、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての「シベリア地域主義」の運動による活動から見ていくことにする。

20 世紀前半の「シベリア文学」の形成過程における重要な節目として考えられるのがロシア革命である。そのため、「シベリア文学」の歴史的背景を第 1 期「ロシア革命前」と第 2 期「ロシア革命後」の二つの期間に分けることが可能であろう。まず、第 1 期の「ロシア革命前」における「シベリア文学」の状況を見ていく。

前述のように、19 世紀後半からロシア帝国では中央（メトロポリス）への反対ムードが広まり、シベリア地域において地域主義寄りの傾向が主権を握るようになる。いわゆる「シベリア地域主義」が発生する（アザドフスキー, 1932, p. 161）。ここから全ロシア文学と対立的な立場に置かれた思想が生み出されていく。当時、文化的分離主義による傾向の影響下で

兆しを見せはじめたのが「シベリア文学」である。シベリアにおいて知識層をはじめ社会全体が目覚めるにつれ、処女地の自然、そこに住む人の生活様式、民族学的特徴、雄大なタイガや山の自然の独特な美しさ、シベリア地域における諸問題などを描写する作家が現れ始める。何らかの形で全ロシア文学との対照に基づく独自の方法及び形式、シベリア地域の特徴を考慮した独自の文学を開発しなければならなかった（同上, 1932, p. 162）からである。20 世紀初頭の「シベリア文学」そのものは、主にロシア文学の批評的リアリズム[19]と革命的民主主義の伝統の流れの中で発展し、象徴主義、未来主義などの退廃的な運動に支配されていた当時のロシア文学の流れとは大きく異なる形を取る。シベリア文学であるとされる作品を作る、いわゆるシベリア作家による 20 世紀前半の文学作品には、市民意識が際立っている。どうやら作家たちは、シベリアの現実の矛盾や問題などに目を向けずにはいられなかったようである（ゴルシェニン, 2020, p. 39）。ここでいう「シベリア作家」とは、自身をシベリア人と自己認識し、文学活動に取り組んでいる作家を指す。

20 世紀前半のシベリア作家は主に地域主義者であり、生活の陰鬱な面を冷酷に暴露しながらも楽観主義者であり続け、シベリアにおける変革と更新された未来を信じていた。シベリア地域アイデンティティを持っていた彼らはシベリアの発展につながるありとあらゆるシベリアの長所を積極的にアピールし、文学を通じて読者にシベリアへの関心を向けさせようとした。このことは、労働と追放の「呪われた国」という伝統的なシベリアのイメージを芸術的に見直すことにつながる。「シベリア文学」は、雪と霜と足かせが鳴り響く陰鬱な土地である、という流刑のイメージを決定的に克服し、シベリアの自然やシベリアの社会などの特徴及びそれに関する問題に着目したものとして現れる。

代表的なシベリア地域主義者の一人であるグリゴリー・ポタニンによれば、19 世紀後半から 20 世紀初頭の「シベリア文学」は、文化分離主義[20]の枠組みの中で全ロシア文学と対立しながら独自の文学の形式の 1 つとして形成される（ポタニン, 2014, p. 112）。その中で、シベリアに住む才能ある作家が大集合する「若きシベリア」[21]運動が誕生する。1907 年から「若きシベリア」に入っていた作家は「シベリア国粋主義」を標榜し、1. シベリア流刑制度、2. 工場制手工業のくびき、3. シベリア知識階級、という 3 つの地域の課題を掲げ、言

---

[19] 主にソ連で用いられた，マルクス主義的文学理論の概念の一つである。

[20] グリゴリー・ポタニン（2014）が、ある人の集団が自分の特徴的な文化的要素を形作り、文化的に独立しようとするというセパラティズムの一種として扱う概念である。20 世紀前半にシベリア地域主義者により作られる文学作品に多く見られるコンセプトである。

[21] ロシア語で“Молодая Сибирь”。

葉を武器にシベリア地域について論じていく（同上, 1907, p. 17）。

ロシア革命後の第 2 期にもロシア革命までの第 1 期の文化分離主義的な傾向は続くが、ロシア革命後ソビエト連邦が形成される 1920-1930 年代の文学においては、すでに内政的な議題からシベリア住民の生活と運命の主題へと重心が移ることが窺える。このような転換の契機は 1922 年の文芸雑誌『シベリアの灯』[22]の誕生であるとされる。その発刊は、当時シベリアを拠点としていた文学勢力における諸プロセスの開始につながる。『シベリアの灯』の出現から 4 年後にシベリア作家同盟[23]が結成され、「シベリア文学」における世代交代が本格化する（ゴルシェニン, 2020, p. 88）。新しい才能ある若い詩人や作家、その他のジャンルの代表者などが現れ、「シベリア分離主義」の時代とは異なる現実の中で育ち、「シベリア文学」の新たな芸術的イメージを積極的に創造するようになる。つまり 20 世紀前半における革命後の「シベリア文学」の第 2 期の特徴は、全ロシア文学の中に含まれる「確立したシベリア文学」の出現であると言える。

2.3.2 大祖国戦争を機に出現するシベリア文学の実態：「故郷」及び「ノスタルジー」の登場

第 1 章 3 節 4 項でも述べたように、大祖国戦争（1941-1945）が勃発すると共に政治面だけではなく文化空間においても分離主義的傾向は衰退し始める。一方で愛国主義的な思想が強まる中、戦時中の国内外の移動により「故郷」への愛、ノスタルジーなどといったテーマが頻出するようになる。「敵から愛する故郷を守る」という強い意志を通じて、自分にとって聖なる場所である「故郷」を紙面上で創造する傾向が見られるようになるのである。ゴルシェニンによれば、戦争時にシベリア地域の美しさや温かさ、シベリアならではの表情を見事に描き出したのが戦線に立ったシベリア出身の作家である（ゴルシェニン, 2020, p. 127）。大祖国戦争中、シベリア文学における「故郷」傾向の出現は、主に「故郷」からの物理的な距離、つまり前線に送られたことに起因していた。シベリア人であることを自認する人々、すなわち「シベリア地域アイデンティティ」を持つ人々により、故郷への言及（家族、シベリアの自然など）や過去へのノスタルジーが窺える文学作品が書かれるようになる。

ここでいう「故郷」とは、人の起源（祖先の出身地、出生地、両親の出生地、同胞の出生地など）に関連し、物理的・感情的な離郷の両面でノスタルジーの顕在化に寄与しうる、そ

[22] ロシア語で“Сибирские огни”。

[23] ロシア語で Сибирский союз писателей（ССП）作家同盟。

の地域との感情的なつながりを形成する地域（国、村、都市など）の場所・空間として理解されうる。また、この「故郷」は政治的な側面に直結する「祖国」との対照である。このような「故郷」に関する考え方は、「故郷」という概念の解釈に対する近代的なアプローチに基づいている。近代的なアプローチからすれば、「故郷」は個人の起源に関わるある場所との物理的なつながり（例えば、個人が生まれた村や町）として理解されるだけではなく、感情的なつながりも含む、ある空間のイメージとしての「故郷」が存在する可能性もある。重岡徹（2012）は日本及び日本における農村に対する故郷的な考え方の歴史的な変遷を分析しながら、その時の故郷との関係性の形により 4 つの「故郷」の存在を指摘している。すなわち、憧憬やノスタルジーなどの感情が経験できる物理的な離郷を通じて出現しうる「発見される故郷」、物理的な離郷が行われてから年月が経つにつれある観念として出現しうる「観念化される故郷」、個人により、起源に関わる場所との精神的なつながりに基づき出現しうる「潜在化する故郷」と「希望される故郷」の 4 つである（重岡, 2012, p. 459）。このように、ある地域への「故郷」という思いは、現存する場所へのノスタルジーにつながりうる物理的なつながりを持つ場所の喪失と、望ましい、あるいは失われた「故郷」の理想的なイメージを作り出そうとする試みにつながりうる空間の精神的な喪失（例えば、故郷の変化や不在）により発生する可能性がある。

シベリアについて言えば、大祖国戦争中のシベリア文学における「故郷」という概念は、主にシベリア地域からの物理的な離郷、すなわちドイツを中心とする諸国連合と戦うために前線に送られることにより形成される。このように歴史の新たな段階において形成される「シベリア地域アイデンティティ」は、3 世紀以上にわたり基盤とされていた「中央」と「シベリア」の相互作用の枠組みの中ではなく「外部」（例えば、敵）と対照的に存在する「祖国」の一部である「故郷」としてのシベリアへの帰属性を意味するようになる。16 世紀末から大祖国戦争が始まるまでの間、「シベリア地域アイデンティティ」の基礎となるシベリア地域のユニークな要素を模索しアピールする試みは、ロシアの中央部との関係の中で生じるさまざまな危機的状況、例えば市民権の問題や土地の問題などを背景に行われていた。このような国の枠を超えない内的危機的状況こそが、19 世紀末から 20 世紀初頭の間に活躍したシベリア知識人（シベリア地域主義者）により書かれる文学作品に反映されているのである。しかし大祖国戦争中の危機的状況は、国を超えて「中央」と「地域」（シベリア）の精神的な統一を推し進めることになる。このような古典的で精神的な統一の一例が、シベリア師団が参加した 1941 年 9 月 30 日から 1942 年 4 月 20 日までのモスクワの戦い、いわ

ゆるタイフーン作戦である。最前線に立ち中央であるモスクワを守ることで、シベリア人は他の地域から来たロシア人と共に自らを市民社会の一員、政治的な意味での「祖国」の一員であることを意識するようになる。歴史上シベリア人と自己認識する人により形成されたシベリア人という想像の共同体が戦争中にシベリア人により実感されると言えるのである。このように、大祖国戦争中に戦線に赴いたシベリア人にとってシベリア地域は「祖国」に含まれる「故郷」、感情的なつながりを持つ場所と化し、戦時中のシベリア作家の文学的傾向にも反映されることになる。要するに、物理的・感情的な離郷という危機的な状況において、シベリア人と自己認識する人々にとっての「故郷」は、生まれ育ったシベリアとのつながりを基盤とする「シベリア地域アイデンティティ」の文学における表出の 1 つとなる。

戦争終焉後、第 1 章にも述べたように、シベリア文学において「故郷」的な波は鎮まることはなく、むしろ同じ速度を保つ。その理由は経済的な要因、すなわち戦後のシベリア地域の大規模な開発であると考える。1940 年代以降の戦後は、経済の再建や食糧及び原材料の供給など多くの課題を解決しなければならなかったため、ソビエト連邦政府によるシベリア地域開発計画が立てられ、農業発展、工業化などが積極的に進められるようになる。その中で、大祖国戦争の時代、文学（シベリア文学も含め）におけるノスタルジーを含む「故郷」の傾向が積極的な物理的な移動により条件づけられていたとすれば、戦後、シベリアの作家たちが「故郷」のテーマにさらに傾倒した要因は、かつての時代からの精神的な離郷にある。戦後のシベリアの活発な産業拡大を背景に、「シベリア人」と自認する作家たちは文学作品を通じて生まれ故郷のシベリアに存在するさまざまな問題を示そうとしている。例えば、シベリアの自然破壊や水力発電所の建設による領土の水没によるシベリア住民の移動、森林伐採やタイガ奥地への動物の撤退による先住民の伝統的な生活様式の破壊、都市化などである。シベリアの作家たちはこれらの問題に触れながら、戦時と比べると、シベリアから何十万キロも離れた前線に出ることはなかった。しかし彼らは物理的に、例えば勉強のために首都に行くか、あるいは故郷にいながらシベリアの作家にとって理想像である故郷の「過去のイメージ」からの離脱を助長するような物理的な変化を目の当たりにして、故郷を憂い始めるのである。

このように、戦時中から 20 世紀後半にかけて「故郷」をテーマとする「シベリア文学」が形成され、シベリアの作家たちは自分たちの生まれ育った土地の問題や特徴などに注意を払いながら、個人が地域との精神的なつながりを形成するための基本的な要素の 1 つである「故郷」としてのシベリアを示そうとしたのである。つまり、20 世紀後半の「シベリア

地域アイデンティティ」形成過程における「故郷的な流れ」が成立するのである。以上を踏まえれば、20 世紀後半のシベリア文学における「故郷」は、物理的（出兵）・感情的（時間の経過に伴う地域の変容）離郷を背景にした、地域の物理的な場所及び空間における個人の経験や地域への愛着に基づく、地域との関係性のイメージとして現れる。その後、20 世紀後半のシベリア文学には 2 つの文学的流れが出現し、故郷としてのシベリアの農村生活及びシベリアのエコロジーという 2 つの側面が注目されるようになる。

2.3.3　シベリア文学における「農村文学」という文学的流れの実態及びその特徴

「農村文学」というジャンルは、シベリア地域において 1950 年代に形成されたが、それよりずっと前の 1920 年代からロシア文学の伝統の中に存在していた。シベリアが大規模な経済変革の対象となったのは 20 世紀半ばからである。従って、既に存在していた「農村文学」というジャンルで提起された問題がシベリア作家によって言及されたのは 20 世紀半ばからとなる。すなわち、全ロシア文学の「農村文学」とシベリアの「農村文学」は、同じルーツと特徴を持っていると言える。違いは地域的なものだけであろう。そのため本項では、歴史的観点から全ロシア文学の「農村文学」の実態を考察し、その特徴を明らかにする。そうすることでシベリア地域における「農村文学」の特徴も理解できるようになるだろう。

「農村文学」は全ロシア文学の発展における流れの一つで、伝統的な価値観への訴えや現実の農村生活などを描写しながら、農民生活の維持、神とのコミュニケーション、工業化において農村が直面する問題など道徳哲学的・社会的問題をテーマとしており、農村の広義での「保存」又は「地域の諸問題」について記述する枠組みの中に置かれた文学的潮流である。

20 世紀の 1920-1980 年代[24]、60 年間にわたりロシア村において見られるさまざまな問題を扱った「農村文学」の形成過程では、3 つの段階を抽出できる（表 2-2.）。表 2-2.からわかるように、「農村文学」の枠組みが完全に形成され全ロシア文学における新たなジャンルとして成立する時期はおおよそ第 2 段階（30-50 年代）の終焉を迎えた頃から 80 年代までの間であると言える。60-80 年代に集中する「農村文学」の繁栄の歴史的背景には「統制」があると考えられる。芸術的創造に対する厳しい統制下では、ロシアの村や農民や先住民族などの「現実」を明らかにしようという願望が強まる中、「農村」の素顔を描写するアイデアが生まれたのではないかと推測することができる。言い換えれば、創造への衝動が起きる状

[24] ロシア革命とソ連崩壊を区切りとする。

況が作られたと言える。

表 2-2. 20 世紀における「農村文学」の各段階（ジンデエワ（2014）を基に）

年代	特徴	作家
20 年代	1.農民の在り方や土地などの特徴についての論議； 2.「農村の生活様式が都市と異なる」という思想的・社会的立場	イリヤ・ヴォルノフ、リディア・セイフリーナ、フセヴォロド・イワノフ、ボリス・ピルニャク、アレクサンドル・ネヴロフ、レオニード・レオノフなど
30-50 年代	1.芸術的創造性に対する厳しい統制の存在； 2.作家の小グループで相互協力	ヒョードル・パンフェロフ、イワン・マカロフ、ニコライ・コチン、ミハイル・ショロホフなど
60-80 年代	1.統制の緩和； 2.国内の文学活動の活発化； 3.文学ジャンルの多様化； 4.深刻な社会問題への訴え； 5.現実を包み隠さず描写； 6.創作思想の自由や歴史的真実に対する権利の意識	ワレンチン・オベチキン、アレクサンドル・ソルジェニーツィン、ビクター・アスタフィエフ、ヴァシリー・シュクシン、ワレンチン・ラスプーチン、ピーター・プロスクリンなど

ガブリエル・トロエポルスキーの「農学者の手記より」[25]（1953）、「ミトリッヒ」[26]（1955）、ウラジーミル・テンドリャコフの「悪天候」[27]（1954）、「場違い」[28]（1965）、アレクサンダー・ヤシンの「ヴォログダの結婚式」[29]（1962）、「レバー」[30]（1955）などのような農村文学作品には農民の日常生活の真実の姿が描かれている（ジンデエワ, 2014, p. 133）。これらの要素は 1930-50 年代の社会的プロセスがもたらしたさまざまな影響、伝統的な農民文化の運命について考えさせることになる[31]。

農村の問題に着目した上記のような「農村文学」の各作品を中心とした統一された文学的・批評的空間の形成は、『新世界』[32]にてワレンチン・オベチキンにより掲載されたエッセイ「近隣の日常」[33]（1952）及びそれに対するウラジーミル・ポメランツェフによる文芸批

[25] ロシア語で“Из записок агронома”。
[26] ロシア語で“Митрич”。
[27] ロシア語で“Ненастье”。
[28] ロシア語で“Не ко двору”。
[29] ロシア語で“Вологодская свадьба”。
[30] ロシア語で“Рычаги”。
[31] 表 3-4.による第 3 段階（60-80 年代）。
[32] ロシア語で“Новый мир”。
[33] ロシア語で“Районные будни”。

評「文学における誠意について」[34]（1953）が発表されたことに端を発する。文学における紋切り型のパターンの悪性について論じるポメランツェフは、文学世界ではオベチキンの「農村に着目したエッセイ」が極めて斬新であると述べている。「私は、集団農場をテーマにしたオベチキン以前の多くの作品では全てが摩耗し、擦り減り、何もかもが鋸で切られ、角が折れていたことに気づいた」（ポメランツェフ, 1953, p. 234）。つまり、農村にある各問題への注目が 1950 年代まではほとんど見られなかったというのである。1954 年 4 月に『新世界』に掲載されたヒョードル・アブラモフの文芸批評「戦後の散文における集団農場村の人々」[35]にも同様の指摘が見られる。彼によれば、戦争直後の文学にはある種の典型性が見られる。すなわち戦後の村における生活は「フィクションの中で一方的に、装飾された形で描かれていた」（アブラモフ, 1954, p. 221）。その考察の中で、1940 年代後半から 50 年代前半までの文学はまだ大いに、艶消しで民衆生活の苦難を隠しているものであると指摘されている。アブラモフは「平滑化された対立と単純化された登場人物」に対し反対の立場をとっていた。彼によれば、今までは主人公や登場人物、人間関係、労働条件など、全てが理想化の対象となっていたのである。自然でさえも、泥やぬかるみ、悪天候など、論争を呼ぶような不完全性は排除されていた（同上, 1954, p. 226）。つまり戦争直後の文学は、ある種の甘美な空想が掲げられるロマン主義に満ちており、戦後復興に向けてのイデオロギー的要素が含まれていたと言える。

ところが 1950 年代後半から 1960 年代前半にかけて、アレクサンドル・ソルジェニーツィン、 ヴァシリー・ベローフ、ウラジミール・ソロウキン、アレクサンドル・ヤーシン、セルゲイ・クルチリン、ユーリ・カザコフなどによる文学作品が登場し、農民の世界観の独自性とその再現不可能性が強調されるようになった。つまり、何世紀にもわたり受け継がれてきた農村の生活様式、自然とのつながり、労働技術、農民道徳など、不朽の宝物であるロシアの村の伝統を守ることが脚光を浴び（ホミャコーフ, 2019, p. 161）、人格崇拝の克服、現実との接近、生活を装飾する要素の排除などの特徴を含む現実的な文学、すなわち「農村文学」が形成されるようになる。1950-1980 年代の「農村文学」作品の特徴には、知恵に富みすぐれた道徳観をもつ労働者である主人公の描写が挙げられる。登場人物の深遠な洞察力を利用しながら、各地域のアクセント、方言、地域的慣用句などを積極的に使っている。作家の間でロシアのさまざまな民族の歴史的・文化的伝統や世代的連続性といったテーマに対す

[34] ロシア語で“Об искренности в литературе”。

[35] ロシア語で“Люди колхозной деревни в послевоенной прозе”。

る関心が高まっていたのである（ジンデエワ, 2014, p. 130）。1950 年代からロシアの各地域の作家は、以前はタブー視されていたテーマを導入し始め、シベリア各地域の作家により農業集団化の悲劇的結末、村の近くて遠い過去の伝統的なイメージ、普遍的な問題や文明の悪影響などに照らされた村の現在、民俗的伝統や自然に向けられた世界観などが頻出するようになる。また、農民の描写、村の精神世界、先住民族などにも注目するようになる。

2.3.4　シベリアを故郷とするシベリア農村文学の例：「産業」と「自然」

前項で述べたように、ロシア文学の枠組みの中で「農村文学」が形成され始めたのは 1920 年代である。しかし最終的な形成は 1950 年から 1980 年にかけてである。この時期にシベリアを故郷とするシベリア作家により、シベリア農村の独自性、文化、自然などと同時にシベリア農村の問題も現実的に描写する数々のシベリア文学作品が登場する。1950 年から 1980 年にかけてのシベリア文学作品は、シベリア農村における産業拡大によるさまざまな破壊的な変化を芸術的な形で批判し、変化による精神的な離郷を嘆くリアリズムに基づいたものとなった。

戦後のシベリア作家による文学作品の多くは 1950 年代から 1980 年代にかけての「農村文学」に君臨するリアリズムの潮流を反映したものである。この時代は戦時に存在していた統制の緩和を目指した当時の政治状況の影響を受け、さまざまな政治改革やシベリアにおける大規模な産業拡大などに対する批判を含むシベリア文学作品が出版されるようになる。一方、シベリア作家にとって 1950 年から 1980 年までの期間は「シベリア地域アイデンティティ」の新たな段階となる。大祖国戦争以前、自身をシベリア人と自己認識できたシベリアの対照はロシア中央部であると考えられていた。大祖国戦争の時代には「祖国」と「敵国」という対照の相互作用を背景にシベリアを眺めるようになり、シベリアが政治的に形式化された祖国の一部であり精神的なつながりをもつ「故郷」として認識されるようになる。戦後、シベリアを抽出できる 2 つの対照が相互作用する環境は再び変容する。20 世紀後半にシベリアを中心とした文学では「故郷」という概念が定着する。それと同時に、1950 年代に入ってから「シベリア地域アイデンティティ」が存在する対照の相互作用は、戦後の活発な産業拡大を背景に「自然」と「産業」へと変容していく。このような 20 世紀後半のシベリア文学を代表する文学潮流の 1 つとして現れるのが「農村文学」である。20 世紀後半のシベリア作家は自然や生活様式などといったシベリア農村のさまざまな特徴に注目するようになる。そして大祖国戦争の時代から定着した「故郷」という概念の枠組みに置かれたシ

ベリアのイメージを含む「シベリア地域アイデンティティ」が存在する「産業」と「自然」という対照が相互作用する環境が形成される。さらに戦時中とは異なり、戦後のシベリアの作家は「故郷」からの物理的な離郷（例えば、戦線に送られるなど）ではなく、シベリアの変化を目の当たりにし精神的な離郷を経験するのである。これらを考慮した上で、20 世紀後半のシベリア文学作家と、彼らの農村文学に該当する作品の例を挙げてみる。

例えば、ヴァレンティン・ラスプーチン（1937-2015）を挙げることができる。ラスプーチンはいわゆる「農村作家」[36]の代表者の 1 人である。東シベリアのイルクーツク州ウスチ・ウダ村に生まれ、イルクーツク州を活動拠点としながら、イルクーツク州に住む先住民族の生活様式、工業化によるイルクーツク州におけるロシア村の全滅への懸念、バイカル湖のエコロジーといった問題を掲げ、自分の故郷の改善を目指した数々の小説を発表している。

ラスプーチンの代表的な文学作品である『マティオラへの別れ』(1976) [37]は水力発電所の建設が農民に与えうる悪影響について考えさせようと試みる作品である。この中には、アンガラ川上流に水力発電所が建設され水没してしまうマティオラ島住民による広大な土地への移住に向けた準備が描かれている。必然的な結末を予感させる登場人物の精神状態の詳細な描写は、シベリア人にとって「故郷」である場所、精神的なつながりのある場所の重要性を示している。『マティオラへの別れ』における「故郷」の場所は、マティオラ島にあるシベリア農村である。ラスプーチンはアンガラ川沿いのウスチ・ウダ村の出身で、この村も水力発電所の建設後に水没する。作家はこのような個人的な体験から故郷の喪失、精神的な離郷を学んだのである。『マティオラへの別れ』における精神的な離郷の描写は「産業」と「自然」という対照の相互作用の中で、20 世紀後半における「シベリア地域アイデンティティ」の存在形態を示す特別な文学的空間を作り出している。

さらに、ビクター・アスタフィエフ（1951-2001）を例に挙げることができる。アスタフィエフは東シベリア・クラスノヤルスク地方を拠点とした「農民作家」である。アスタフィエフはラスプーチンと同様にロシア村、農民生活などと並行してクラスノヤルスク地方の環境への懸念を、小説を通じて綴っている。『魚の王様』（1976）[38]の中の「ボイエ」という作品では、森林伐採やその他の産業拡大の形によるシベリアの自然破壊を強調しながらも、「故郷」としてのシベリア農村が心の安らぎを与えてくれる重要な要素として描かれている。シ

---

[36] ロシア語で“деревенщики”。
[37] 作品の詳細な分析は、付録 A に掲載している。
[38] 作品の詳細な分析は付録 B に掲載している

ベリアの北に位置する故郷の村に帰る主人公は、父親との関係に問題があるにもかかわらず、穏やかさや暖かさを感じる。アスタフィエフは、一方で産業拡大による弊害を描きながらも、他方でシベリア農村とその伝統、生活様式などを守ることの重要性を指摘しているのである。ラスプーチンと同様にアスタフィエフも故郷からの精神的な離郷を経験している。アスタフィエフはクラスノヤルスク地方オヴシャンカ村で生まれる。戦後、クラスノヤルスク地方では、他の地方と比較して多くの工業企業が建設される。アスタフィエフは故郷であるクラスノヤルスク地方にもたらされる悪影響を見て、文学を通して問題の解決策を模索する必要性を感じ、産業政策の見直しなどの重要性を指摘しようとしたのである。

もう 1 つの例としてヴァシリー・シュクシン（1929-1974）を挙げる。シュクシンも著名な「農村作家」の 1 人で、西シベリアのアルタイ共和国を拠点とする。ラスプーチンとは異なり、自然ではなく主に「人」、「農民」のイメージに着目し、「小説-運命」、「小説-性格」、「小説-懺悔」、「小説-アネクドート」の 4 つの小説を生み出す。その作品の重点は「故郷とのコミュニケーション」に置かれており、「故郷」との相互作用が何であるかが作品の中心となっている。もちろん「自然」が完全に除外されているわけではなく、「故郷の自然」に対する思いが「人」の精神を明かしていくという側面も窺える。シュクシンの作品における主なモチーフはアルタイの農民生活である。その理由はシュクシン自身がアルタイスロツキ村の出身だったからである。学生時代、シュクシンはアルタイからモスクワに移るが、このことは故郷としてのシベリア農村への帰郷というテーマを積極的に扱うきっかけとなる。例えば『村人たち』（1963 年）[39]の「スチョプカ」という作品では、故郷をそれなしでは存在しえない場所として描写している。「スチョプカ」の主人公は刑期が終わる 3 日前に、故郷と親戚に会うためだけに刑務所を脱獄する。一方、『村人たち』の中の「蛇毒」では祖国や母などからの離郷に対する男の懺悔という心理状態を描いている。このように、シュクシンの場合、物理的な離郷がシベリア農村を描写する文学的傾向に大きな影響を与えたと言える。ただしシュクシンの文学作品は単なる個人的な体験の描写ではなく、シベリア農村の保護という重要な問題に注意を向けさせようとする試みである。

2.3.5　シベリア文学における「エコロジー文学」という文学的潮流の実態及びその特徴

「農村文学」と並行して、1990 年以降、シベリア文学を含めロシア文学において「エコ

[39] 作品の詳細な分析は付録 C に掲載している。

ロジー文学」という文学的潮流が登場する。前述したように、「農村文学」は 1920 年代にはじめて登場するが、「エコロジー文学」という文学の用語は初めて 1990 年代に使われ新しい潮流として認識されるようになった。このような遅れは主に、20 世紀のロシアでエコロジーそのものが科学として遅れて発展してきたことに起因している。ロシアのエコロジー科学学派は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて E.ヘッケルを創始者とする古典的なドイツ学派と同時期に形成される。しかし「エコロジー」という用語は、V.I.ヴェルナドスキー、G.F.モロゾフ、N.I.ヴァヴィロフらによって科学領域に導入され自然管理の実際的な問題を解決するために使用されたものの、ロシア革命、革命後の復興、大祖国戦争、戦後の復興といった、より重要とみなされる出来事が連続したため、広範な科学的発展を必要とするテーマとみなされることはなかった。また 20 世紀の工業化時代には、環境問題の可能性を否定すると同時に自然を最も早く征服しようとする態度によって、ロシアのエコロジーの発展は人為的に減速させられることになる（クラフチェンコ&コピティナ, 2006, p. 134）。言い換えれば、戦後の産業拡大という現実的な必要性が適切な自然管理や環境問題の解決という問題を覆い隠してしまったのである。つまり「人間」と「自然」の正しい相互作用を構築するための解決策の模索を覆い隠してしまったとも言える。しかし、産業拡大が積極的に行われていた地域に住む人からすれば、自然破壊は批判的に受け止められることがほとんどだった。というのも、自然は（特に経済的に発展した地域から離れた地域にとっては）その地域に住む人の生活様式（狩猟、家屋の建築など）や文化的空間の重要な一部であるからである。産業の拡大が進む地域に住む人から見れば、「エコロジー」という概念は決して二次的なものではなかった。そのため産業拡大への反応とも言える「人間」と「自然」の正しい相互作用を考えるというコンセプト、すなわち「エコロジー」の観点から文学作品が作られるようになる。

前述したように、シベリア人の地域アイデンティティの重要な要素はシベリアの自然である。シベリアの自然が破壊されることはシベリア人にとって非常に辛いことである。戦後のシベリア地域における活発な産業発展はシベリア地域の自然を破壊するだけではなく、シベリア人の生活様式の破壊にもつながりうる。そのため 20 世紀後半のシベリア作家による文学作品には、自然が破壊されていく状況についての描写だけではなく自然との共存を訴える要素が多く見られる。すなわち「エコロジー文学」の形成である。

「エコロジー文学」という概念は 1993 年にロシア文学研究の科学雑誌『社会科学と近代』

[40]でフェリックス・ロジナーにより初めて使われる。この時期のロシアではエコロジー運動やエコロジー教育などが積極的に行われていた。『社会科学と近代』で、ロジナーは「エコロジー文学」について「文学研究の一分野であり、文学テキストと作家と環境の相互作用の問題を考察する文学である」と指摘する（ロジナー, 1993, p. 141）。「エコロジー文学」という概念が広がったことから、1990 年代以降に書かれた文学作品だけではなく、戦後 1950 年以降に書かれたエコロジーに着目した作品もエコロジー文学作品として分類されるようになった。シベリア作家による文学作品もそうである。

「エコロジー文学」と「農村文学」のような新しい分類が確立した理由は、「エコロジー文学」とみなされる文学作品の特徴にある。「農村文学」にも「自然」の側面が存在するが、「農村文学」で見られる「自然」は登場人物が感情的・心理的なつながりを持つ故郷のイメージの構成要素として機能し、しばしば詩的に描写される。一方「エコロジー文学」と分類される作品では、より専門的なアプローチが窺える。例えば、特殊な用語や統計データなどがしばしば用いられる。また「エコロジー文学」では、自然が生活様式に及ぼす諸影響ではなく自然資源の保護と適切な利用、自然との共存などの探求に重点が置かれる。その土地の生態系を保全することの重要性や生態系保全に伴う問題点への問いかけなどが特徴的である。土地のエコロジー的な側面をテーマにすることは、作家自身の故郷の問題に注意を向けさせようとする試みであると捉えることも可能である。

このような「エコロジー文学」が出現した背景には、「農村文学」と同様に歴史的要因が存在する。20 世紀前半のロシアにおける人間による自然界への侵入のペースとその規模は、1930 年代に主な課題として掲げられていた広範な社会主義建設により決定されていく。1930 年代当時、大規模な自然界への侵入は科学技術の進歩に大規模に貢献する、肯定的な現象として認識されていた。そのため、アレクサンダー・フェルスマン[41]による「私たちは自然を征服し、自然を人間、その文化、その経済に従属させる闘士になりたいのだ…私たちは、故郷の広大な土地をただ歩き回るだけではいけない」（フェルスマン, 1956, p. 8）、のような哲学が支配的な位置を占めており、自然や農村の生活などに多大な悪影響が及ぼされる要因の一つとなる。

1940-1950 年代には、何世紀にもわたり自然と闘う方法と手段を開発することに専念してきた「科学」と、人間と自然の渾然一体性を理解することに益々傾倒するようになる「文学」

---

[40] ロシア語で“Общественные науки и Современность”。

[41] ソビエト連邦の地球化学者、鉱物学者である。

の間に、ある種の隔たりが現れ始める。「科学」の剛胆と無責任により文学作品において自然寄りの哲学が強まり、自然に対する不安が高まる。この点に関してセルゲイ・ザリギン（1980, p. 171）は「文学は…人生の議論としての自然に対する独自の態度に属している」と述べている。

1970 年代に入ってからは、現実の世界でもフィクションの文学界でも「人間と自然」の相互作用における問題を理解しようとする新たな風潮が生まれる。その一体性はどういうものなのかについての議論が行われるようになるのである。1984 年 9 月のソビエト連邦作家同盟創立 100 周年記念総会での演説で、コンスタンティン・チェルネンコは創造的知識階級が社会の精神生活に多大な影響を与えていることを指摘し、「社会が質的に新しい課題に直面している時期には、創造的知識階級が特に重要である。このような問題を解決するには当然、新しいレベルの社会意識が必要である」と強調した（チェルネンコ, 1984）[42]。このように「人間」と「自然」の関係の領域における新しいレベルの社会意識が形成されるには、特に文学の影響が大きかったのである。科学技術がかつてないほどのテンポで発展する 20 世紀後半には特に、各地域の環境価値が再評価されるプロセスが急速に進むことになる。シベリアも例外ではなかった。このような中で、「自然」または「自然と人間の関係性」に着眼する数々の有名な文学作品が現れるようになる。

2.3.6　シベリアを故郷とするシベリアエコロジー文学の例：「産業」と「自然」

農村を中心テーマとする「農村文学」の文学傾向とは対照的に、「エコロジー文学」では自然の描写、自然保護、自然に有害なプロセスの描写などが中心テーマとなっている。シベリアのエコロジー文学も同様である。20 世紀半ば頃に形成された故郷的要素に着目した「産業」と「自然」という 2 つの対照の相互作用性の中での「シベリア地域アイデンティティ」、故郷としてのシベリアの各要素への訴えは、シベリアエコロジー学文学の文学作品にも窺える。

例えば、ウラジーミル・チビリキン（1928-1984）を挙げることができる。チビリキンは西シベリアのケメロヴォ州マリインスク生まれのエコロジー文学作家である。文学作品の必要不可欠な要素として「ロシアの森」を掲げ、シベリアにおける森林管理、エコロジー問題などに着目した数々の文学作品を発表している。チビリキンの作品には林業に関する統

[42] 文学新聞を参照した。

計データや科学的論拠などが多く含まれている。チビリキンにとって故郷シベリアの「健全な」状態の重要な要素は、シベリア地域の豊かな森林を適切に利用することであった。例えば『騒げ、タイガ、騒げ！』（1962 年）[43]の中で、チビリキンはシベリア杉の苗床を作った実話を語っている。シベリア杉は、エコロジカルな文学的要素としてシベリア作家により少なからず扱われているモチーフである。例えば、ケメロヴォ州マーリエフカ村出身の詩人ワシーリー・フェドロフ（1918-1984）は故郷の大切さを詠った詩の中でシベリア杉を賞賛している[44]。離郷という観点で言えば、チビリキンはシベリアのタイガで起こっている破壊的なプロセスを目の当たりにしたことで故郷からの精神的な離郷を経験する一方、フェドロフの場合はロシア各地を旅していた時期があり、故郷であるマーリエフカからの物理的な離郷をしているのである。

このようにエコロジカルな要素を強調したシベリア文学作家も、20 世紀後半に存在したシベリアの文化的文学空間の形成に貢献していると言える。「産業」と「自然」という 2 つの対照の相互作用の中で、故郷という概念を通じて描かれるシベリア、すなわち「シベリアの地域的アイデンティティ」の構築への貢献である。

2.3.7　20 世紀後半の「シベリア文学」の「農村文学」と「エコロジー文学」における「故郷」の概念

「農村文学」及び「エコロジー散文」の分析の結果、2 つの文学的潮流にはともに「抗議」の要素がみられると結論づけることができる。「農村文学」の場合、シベリアの作家たちは産業拡大が「故郷」であるシベリアの住民の伝統的な生活様式に与える影響を目の当たりにし、シベリア農村の破壊と保存の問題に着眼を置く。このような「農村文学」に窺えるシベリア農村の問題に関する言及の存在が、批評的な文学表現の形で反作用を生み出している行為の存在を示唆している。シベリアの場合、そのような行為とは工業の拡大とそれに伴う影響である。従って「農村文学」は、20 世紀後半にシベリアで起こる、シベリア農村に破壊的な影響を与えたさまざまな種類の破壊的プロセスに対する反作用として現れる。同じような状況は「エコロジー文学」にも見られる。しかし「エコロジー文学」の場合は自然的な側面への傾向が特徴的である。このように、20 世紀後半のシベリア文学の作品の多くはシベリア農村及びシベリアの自然に向けられた要素が含まれている。

---

[43] 作品の詳細な分析は付録 D を参照。

[44] 作品の詳細な分析は付録 E を参照。

シベリアの「農村文学」にも「エコロジー文学」にも見られる時間の動き、進歩、破壊的なプロセスなどに対する「反作用」は、その地域とのつながり、反作用を表明する権利を与える何らかの基盤の存在を示唆する。「シベリア文学」の場合、ほとんどの作家がシベリアで生まれ、シベリア人として自らを語り、シベリアを「故郷」と考えていた。20 世紀後半のシベリアの作家にとって、大祖国戦争中に確立された「故郷」という概念の視点からシベリアの村、自然、村の生活などを描写することは、故郷との物理的・精神的な離郷というノスタルジックな体験の現れであると同時に、読者の関心をシベリアという地域に引きつけようとする試みでもあった。例えば、ワシーリー・シュクシンは故郷であるアルタイ地方のシベリア農村を舞台にした物語の大半をモスクワの大学で勉強しながら書く。ウラジーミル・チビリキンはシベリアの森林伐採が盛んな時期に作品の大半を書きおろし、一方では生まれ育った土地の自然を描き、他方では生まれ育ったシベリアの森林の保護を訴えている。

さらにいえば、20 世紀後半のシベリア文学には 20 世紀前半のシベリア地域主義者たちと並行するものを見出すことができる。シベリアの地域主義者にとっては「シベリア」と「中央」という対照が相互作用する環境の存在が重要だった。言い換えれば「シベリア」と「中央」の相互作用を基にシベリア地域の独自性と問題に注目し、アピールするというコンセプトが構築されたのである。20 世紀後半には、シベリア地域の独自性と問題に注目する点は変わっていないが、「シベリア」と「中央」は「祖国」と「故郷」、また「産業」と「自然」へと変化し、政治的な側面ではなく、起源に関わる感情的・心理的な側面が重要な役割を果たすことになる。

2.4　小括

第 2 章では、19 世紀末にはじまるシベリア文学の歴史的形成過程とその特徴について考察してきた。分析されたデータに基づいて、今日まで多くの研究の対象となっている「シベリア文学」の形成は、3 つの歴史的な時期に大きく影響されていると言うことができる。すなわち、1. ロシア革命、2. 大祖国戦争、3. 1950 年代以降のシベリア地域の経済発展プログラムである。

19 世紀末以降、シベリアは本格的に経済発展の可能性を秘めた地域とみられるようになってきた。ロシア革命はシベリア地域における文化・経済などの発展に注目するという考え方の確立の契機となった。その結果、シベリアの経済や文化などが発展することになり、シベリア地域アイデンティティを持つ知識階級のシベリア作家は全ロシア文学活動の枠組み

の中で、シベリアの特徴や、そこにおける問題について積極的に語り始める。

大祖国戦争は、帰りたい場所、「故郷」というシベリアに対する考え方の出現に弾みをつけるものであったことから、1940 年代はシベリア文学的伝統の中で「故郷」の概念が形成された時期であると言える。また戦時中、シベリア人は物理的な移動を通じて物理的な離郷を経験する。戦争を機にシベリア地域が認識される対照的な関係は「中央」と「地域」から「祖国」と「敵国」という形式へと変容し、ロシア革命時にあったような政治的な要素が失われ、物理的・精神的な喪失を体験した兵士のシベリア作家により「祖国」に含められる「故郷」としてのシベリアが描かれるようになる。

戦後、シベリアの経済と産業はいっそう発展していく。50 年代からはシベリア地域の文化・経済などが発展する一方、シベリアの経済地図の大規模な建設は、ところどころシベリア人の伝統的な生活様式やシベリアの自然などの破壊につながった。その中で、地域作家の間に「故郷の問題を語ろう」という風潮が生まれてくる。20 世紀半ばごろから、シベリアにおける地域の産業拡大がシベリアの自然あるいはシベリア人に与える影響に注目する作家が増え、その結果、シベリアの文学的文化的空間において「農村文学」および「エコロジー文学」という文学的潮流が出現するようになったのである。これは 20 世紀後半におけるシベリアの作家たちの「故郷」への不安と、シベリア文学の伝統の中で 40 年代に生まれた「故郷」概念の強化を示唆している。それと並行して、戦後は「敵国」と「祖国」という対照の相互作用が再び変化する。「故郷」という概念はシベリア文学の伝統の中に定着するが、「シベリア地域アイデンティティ」を確認できる対照として「産業」が現れ、シベリアは「産業」と「自然」の相互作用の中で捉えられるようになる。

まとめると、「シベリア文学」という現象はシベリア地域アイデンティティと同様に、ロシアで起こったさまざまな歴史的なプロセスの枠組みの中で形成された部分が大きいと言える。さらに 20 世紀にはさまざまな歴史的プロセスを背景に、文学に現れる「シベリア地域アイデンティティ」は政治的な側面から「故郷」をめぐる精神的な側面へと質的に変化し、「シベリア地域アイデンティティ」の抽出できる対照の相互作用も「中央」と「シベリア」から「敵国」と故郷を含む「祖国」を経て、「産業」と「自然」へと変化してきたのである。

第 3 章　「シベリア文学」をテーマにしたシベリア文学観光：主催者及び観光者を対象とした調査

3.1　本章の目的

第 2 章では「シベリア文学」の概念とその歴史的形成過程を検討した。それによると「シベリア文学」は、さまざまな対照の相互作用の枠組みの中で、ある歴史段階におけるシベリア住民の心理的認識を反映したものである。19 世紀末からシベリア作家はシベリアのさまざまな特徴や問題点などを示しながら、文学を通じて各歴史的段階における「シベリア地域アイデンティティ」の形態を描いてきた。

シベリアの各地域では近年、20 世紀後半に活躍したシベリア作家及びその文学作品に関する内容が盛り込まれた文学観光ツアーが行われている。文学観光ツアーの主催者によれば、ツアーの主な目的は「地域アイデンティティの強化」である。

このような文学観光ツアーでは、ツアーが行われる地域の出身者であるシベリア作家[45]ゆかりの場所をいくつか訪れるのが一般的である。例えば博物館の訪問、プレゼンテーションの鑑賞、作家が暮らした家の訪問、作家がよく訪れていた公園の訪問などである。ほとんどのツアーがテーマにする作家は、そのシベリア地域の出身者であり地域にとって重要な文化的意義を持ち、その地域の文化的空間の一部であり、地元の教育課程の枠組みの中で文学の授業のカリキュラムに使われるような作家である。教育課程の例を挙げると、イルクーツク州の学校ではヴァレンティン・ラスプーチンの文学作品、クラスノヤルスク地方の学校ではアスタフィエフの作品が扱われている。こうしたことから、文学観光ツアーの参加者がツアーの行われる地域の地元民である場合、その観光者には文学観光ツアーの場所や環境、及びその内容が個人的なある種の感情を呼び起こしうる。観光者にとって馴染み深いシベリア地域の文化空間の一部と直接的に関連する要素、または観光者が生まれ育った地域と関連する要素との接触による感情が発生しうるのである。観光者が地元民であれば、文学観光が、シベリア地域アイデンティティが強化される契機になるとも言える。Cohen and Cohen（2012）による「ホットな真正化」と「クールな真正化」に関する議論にも同様の考察が窺える。

Cohen and Cohen によれば、観光は一種のパフォーマティブで「ホットな」実践として提

[45] 主に 20 世紀後半に活躍しており、シベリアを「故郷」という観点から描写し、シベリアにおける問題及びその特徴を描く、という政治的要素を排除し作品を残したシベリア作家を扱う。

示され、それは個人を巻き込み、「実存的な真正性」、つまり「自分自身のアイデンティティを感じること」に関連する状態の個人的な体験に貢献することが可能である（Cohen & Cohen, 2012, p.1308）。観光もまた、「ホットな側面」と「クールな側面」の両方を含む実践として紹介されている。つまり、観光者はホットでパフォーマティブな観光実践に参加することを通じて「クールな」場所を訪れる。ここで言う「クールな」場所とは、博物館や文学資料館といった、専門家によって鑑定され真正性が証明された場所や物などである。一方、「クールな」場所だけではなく、作家にゆかりがあるとされる場所（作家が歩いた公園、作家が住んでいた道など）のような間接的にゆかりのある場所を、観光の枠組みの中でダイナミックに繰り返し訪れることは、情緒的な意味合いの出現、すなわち「ホットな真正化」の出現に寄与することが可能である（同上,2012, p.1304）。例えば、地元の作家に敬意を表する、その作家の作品が地域にとって重要であると信じる、などの感情が生まれることがこれに当たるだろう。さらに作家や文学作品、作家が住み活動した町などに対する感情的な反応が現れるだけではなく、観光者自身が記憶や親しみのあるものへの感覚、いわばノスタルジーを持つようになることもありうる。つまり観光者の過去の経験や思い出に直接関係する情緒的効果が生じる可能性があり、それは観光者の自己認識的要素に直接影響を与えうるだろう。このように、地元の観光者の地域的アイデンティティの根底にある文化空間と関連づけられる物理的な場所や情報に基づく文学観光ツアーは、Cohen and Cohen の言葉を借りれば「クールな」場所を訪れるという「ホットな」実践の反復の集大成となりうる。このような観光の実践の中では、シベリア文化的空間（文学的空間）に対しても観光者自身（地元民である場合）に対しても、感情的な反応が出現しうる。このうち観光者自身に対する感情的な反応の潜在的な効果の 1 つとして、地域アイデンティティの強化が考えられる。

上記の考察を背景に、第 3 章ではシベリアの 4 つの地域で行われる文学観光ツアーの主催者を対象に行ったインタビューと、シベリア文学観光ツアーに参加した観光者を対象に行ったアンケートにより獲得できたデータを分析する。シベリアでこの種の観光ツアーが実施される背景を探ると共に、シベリア地域アイデンティティの強化の可能性を示すと思われる観光者側の個人的体験に関連する要素の存在を探るため、主催者及び観光者の回答を分析する。個人的経験の要素が存在する場合は、シベリア文学観光ツアーが行われる理由を、観光者のバックグラウンドという視点からも考察する。

3.2　シベリア文学観光ツアーの主催者

3.2.1　文学観光が行われるシベリア地域の実体：4 つの地域を例に

これまで見てきたように、「文学観光」とは特定の作家やその文学作品とのつながりがある場所への旅を指す。そのつながりは多様である。例えば自伝的なつながり（作家の生誕地・埋葬地）、イメージ的なつながり（文学作品の中に描かれている内容に関連する場所）、社会的に構築されたつながり（文学的風景、文学的テーマなどを伝えうる主催者により作られたデコレーション）などである（Fawcett & Cormack, 2001; Herbert, 2001; Tetley & Bramwell, 2002）。近年、アルタイ共和国、ケメロヴォ州、イルクーツク州、クラスノヤルスク地方では各地域の主催団体により地元のシベリア作家に関連したさまざまな文学観光活動が行われている。ここからは文学観光ツアーが行われている地域と、そこにおける文学観光活動について概説する。

アルタイ共和国は西シベリアの南東部、アジア大陸との境界に位置し、首都モスクワから 3,419 キロ離れている。面積は 92, 903 平方キロメートルで、ロシア連邦で 24 位、シベリア連邦管区で 10 位を占めている（図 3-1.）[46]。北はノボシビルスク州、東はケメロヴォ州、南東はカザフスタン共和国に隣接している[47]。



図 3-1.ロシアにおけるアルタイ共和国の位置

アルタイ共和国における文学観光の主な主催者には、1977 年 9 月 1 日に設立された「全ロシアシュクシン V.M.記念博物館・自然保護区」[48]が挙げられる。これはアルタイ共和国ス

[46] 各地域の地図はロシア連邦議会の公式サイトから引用。

[47] アルタイ共和国の公式サイトより。

[48] ロシア語で “Всероссийский мемориальный музей-заповедник В. М. Шукшина”。

ロストキ村出身の地元作家ヴァシリー・シュクシンを記念して作られた博物館兼自然保護区である。年間を通して作家自身や作家の文学作品に着目した展示を行い、ロシアのみならず世界各地からの注目を集める「シュクシンデイズ・イン・アルタイ」[49]文学祭りを開催するなど、シュクシンを中心とした多様な活動が行われている[50]。

ケメロヴォ州は西シベリアの南東部に位置し、ロシアの西と東の国境から同距離にある。地理的にモスクワとウラジオストクの中間に位置する。州の面積は 95,500 平方キロメートルで西シベリアの 4%、ロシアの 0.56%と、西シベリアで最小面積の州である[51]（図 3-2.）。



図 3-2 .ロシアにおけるケメロヴォ州の位置

ケメロヴォ州では、ケメロヴォ市を拠点とする「ヴァシリー・フェドロフ科学国立図書館」[52]がさまざまな文学観光活動を 2014 年から毎年定期的に行っている。アルタイ共和国とは多少異なり、ケメロヴォ州では一人の作家に特化した文学観光活動ではなく、ツアーごとに一人の地元作家やその文学作品などに関する内容を盛り込む形式を取っている。例えば、ミハイル・ネボガトフを中心とした「サライルスキー・クリャシュの物語」[53]文学観光ツアー、ヴァシリー・フェドロフを中心とした「ヴァシリー・フェドロフに会うためにマーリエフカへ」[54]文学観光ツアー、ウラジーミル・チビリキンを中心とした「ウラジーミル・チビリキ

[49] ロシア語で “Шукшинские дни на Алтае”。

[50] 「全ロシアシュクシン V.M.記念博物館・自然保護区」の公式サイトより。

[51] ケメロヴォ州の公式サイトより。

[52] ロシア語で “Кемеровская областная научная библиотека имени В. Д. Фёдорова” 。

[53] ロシア語で “Сказы и были Салаирского кряжа” 。

[54] ロシア語で “В Марьевку, на встречу с Василием Фёдоровым” 。

ンが見たタイガ」[55]文学観光ツアー、レオニード・ゲルシドヴィッチを中心とした「詩人レオニード・ゲルシドヴィッチと一日」[56]文学観光ツアーなど、ケメロヴォ州の著名な作家に着目した文学観光ツアーである[57]。

イルクーツク州はシベリア連邦管区の南東部に位置し、総面積は 767,900 平方キロメートルでロシア 6 位である。西はクラスノヤルスク地方、東はブリヤート共和国、南西はティヴァ共和国に隣接する（図 3-3.）[58]。



図 3-3.ロシアにおけるイルクーツク州の位置

イルクーツク州において文学観光ツアーを行っているのは、イルクーツク州ウスチ・ウダ村出身のヴァレンティン・ラスプーチンを記念して 2015 年に創立された「ラスプーチン V.G. 博物館」[59]である。メインの展示以外にも、2016 年から「作家ラスプーチン V.G.の故郷への旅」[60]という文学観光ツアーを毎年不定期に行っている[61]。ケメロヴォ州やアルタイ共和国と同様、固定展示と同時に作家やその文学作品などに関連した文学観光実践が見られる。

クラスノヤルスク地方はロシア連邦で 2 番目の総面積を持ち、2,366.8 平方キロメートルを占めている。シベリア連邦管区の一部である。東はサハ共和国及びイルクーツク州、南は

[55] ロシア語で “Тайга Владимира Чивилихина” 。
[56] ロシア語で “День с поэтом Леонидом Гержидовичем” 。
[57] 「ヴァシリー・フェドロフ科学国立図書館」の公式サイトより。
[58] イルクーツク州の公式サイトより。
[59] ロシア語で “Музей В. Г. Распутина”。
[60] ロシア語で “Путешествие на родину писателя Валентина Распутина。
[61] 「ラスプーチン V.G.博物館」の公式サイトより。

ティヴァ共和国及びハカシア共和国、西はケメロヴォ州及びトムスク州、そしてハンティ・マンシースク自治管区及びヤマロ・ネネツ自治管区に隣接している（図 3-4.）[62]。



図 3-4.ロシアにおけるクラスノヤルスク地方の位置

クラスノヤルスク地方における文学観光活動の主催者は、クラスノヤルスク地方オフシャンカ村出身のビクター・アスタフィエフを記念して 2004 年に創立された「アスタフィエフ V.P.文学館」[63]である。現在、オフシャンカ村へのエクスカーションと同時に「偉大な同胞を訪ねて」[64]ツアーを不定期的に行っている。オフシャンカ村の「国立アスタフィエフ・センター」[65]も 2024 年に竣工が予定されている[66]。

上記の文学観光実践で扱われている 5 人の作家は、すべてシベリアの 4 地域の出身者である（表 3-1.)。それぞれの作家にとってシベリア（特定のシベリア地域）は「故郷」であり、物理的にも感情的にもつながりを持つ地域である。

[62] クラスノヤルスク地方の公式サイトより。

[63] ロシア語で “Литературный музей им. В.П. Астафьева” 。

[64] ロシア語で “В гости к великому земляку” 。

[65] ロシア語で “Национальный центр Астафьева” 。

[66] 「アスタフィエフ V.P.文学館」の公式サイトより。

表 3-1.シベリア文学観光ツアーで扱われる作家の出身地

No.	作家	出身地	出身地の地理的所属
1	ヴァレンティン・ラスプーチン	ウスチ・ウダ村	東シベリア・イルクーツク州
2	ビクター・アスタフィエフ	オフシャンカ村	東シベリア・クラスノヤルスク地方
3	ヴァシリー・シュクシン	スロストキ村	西シベリア・アルタイ共和国
4	ウラジーミル・チビリキン	マリインスク市	西シベリア・ケメロヴォ州
5	ヴァシリー・フェドロフ	マーリエフカ村	西シベリア・ケメロヴォ州

第 2 章で 20 世紀後半のシベリア文学における農村文学作品及びエコロジー文学作品の例を挙げたが、それらは上記の文学観光ツアーで扱われる 5 人の作家による文学作品であった（付録 A-E)。作品を分析した結果、各作家にとって「故郷」（シベリア）というテーマは重要であり、多くの作品で取り上げられていることが明らかになった。このことから、ここで概説した文学観光ツアーを企画する主催者は、シベリア地域アイデンティティを持つ作家、すなわちシベリア人と自己認識し故郷であるシベリアの特徴やその問題などに少なからず言及するシベリア作家を扱っていることが確認できる。

3.2.2　シベリア地域における文学観光の主催者及びインタビュー調査の概要

2021-2023 年に、上記のシベリアの 4 地域で行われる文学観光活動に着目しながら多面的な調査を行った。これらの地域で文学観光ツアーを行う主催者を対象としたインタビュー、観光者を対象としたアンケートの分析調査である。

このような多角的な調査を行った理由は、近年シベリアにおいて、前述のように「故郷」という概念を中心とした要素を含む 20 世紀後半のシベリア作家による文学作品を扱いながら、文学観光ツアーを行うようになった理由を探ろうとするためである。調査を通じてシベリアで行われる文学観光ツアーの具体的な内容、主催者が文学観光ツアーを企画する際に設定する目的、ツアーに参加する観光者の特徴、参加後のツアー全体及びその要素に対する観光者の意見を明らかにしていく。まず主催者を対象としたインタビューの概要及びその結果から述べていく。表 3-2.はインタビュー調査の対象とするシベリア文学観光の主催者に関する基本情報である。

表 3-2.インタビュー調査の対象とする主催者側に関する基本情報

シベリア地域	創設年	主催団体	所属団体	機関種別	文学観光でテーマとする地元作家	具体的な文学観光活動の例
アルタイ共和国	1978	全ロシアシュクシン V.M. 記念博物館・自然保護区	同団体	国立	ヴァシリー・シュクシン	1.「母の家」展のガイド付きツアー； 2.作家の生家で「遠い冬の夕暮れ」展のガイドツアー； 3.出身学校への観光ツアー； 4.「シュクシンデイズ・イン・アルタイ」フェスティバル； 5.「私たちの大きな村。スロストキと呼ばれる」村の思い出の場所への観光ツアー
ケメロヴォ州	1918	図書館郷土資料室	ヴァシリー・フェドロフ科学国立図書館	国立	ヴァシリー・フェドロフ、ミハイル・ネボガトフ、ウラジーミル・チビリキン	1.「サライルスキー・クリャシュの物語」ツアー； 2.「ヴァシリー・フェドロフに会うためにマーリエフカへ」ツアー； 3.「ウラジーミル・チビリキンが見たタイガ」ツアー； 4.「詩人レオニード・ゲルシドヴィッチと一日」ツアー
イルクーツク州	2017	ラスプーチン V.G. 博物館	自治州文化機関イルクーツク郷土博物館	国立	ヴァレンティン・ラスプーチン	1.2016 年以降「作家ラスプーチン V.G.の生家を訪ねる旅」観光ツアー； 2.「ラスプーチン V.G.のイルクーツク」バスツアー； 3.「ラスプーチン V.G.ンのイルクーツク」散歩コース
クラスノヤルスク地域	1997	アスタフィエフ V.P. 文学館	クラスノヤルスク郷土博物館	国立	ビクター・アスタフィエフ	1.「アスタフィエフ V.P. の人生と仕事」観光ツアー； 2.作家の故郷オヴシャンカ村では、「アスタフィエフ V.P.国立センター」の 2024 年に竣工を予定

表 3-2. から、4 つのシベリア地域における各団体はいずれもその地域で生まれ育った地元作家を掲げ、作家自身や作家の家族、作家の文学作品などに関連する要素を中心とした文

学観光ツアーを実施していることがわかる。各主催者が拠点とするシベリアの各地域と「故郷」という関係性を持つシベリア作家に関連する文学的要素に着目する傾向が窺えるのである。

2021 年 7 月と 2022 年 1 月に現地調査の枠組みの中で行った対面インタビュー以外にもクラスノヤルスク地方及びアルタイ共和国における文学観光活動について調べるため、ビデオコミュニケーションズツール Zoom Meetings を利用し、2023 年 4 月に 2 つのインタビュー調査を行った（表 3-3.）。

表 3-3.インタビュー調査実施の概要

地域	実施日時	実施方法	団体	インタビューの対象者
アルタイ共和国	2023 年 4 月	Zoom Meetings	全ロシアシュクシン V.M.記念博物館・自然保護区	A さん（博物館長）
ケメロヴォ州	2021 年 7 月	対面	ヴァシリー・フェドロフ科学国立図書館郷土資料室	B さん（図書館郷土史部門主任司書）
イルクーツク州	2022 年 1 月	対面	ラスプーチン V.G. 博物館	C さん（担当部門長）
クラスノヤルスク地方	2023 年 4 月	Zoom Meetings	アスタフィエフ V.P. 文学館	D さん（担当部門長）

インタビューは、アルタイ共和国、ケメロヴォ州、イルクーツク州、クラスノヤルスク地方の 4 地域で文学観光活動を行う 4 つの主催団体を対象に実施した。次項ではインタビューへの回答及びその分析について詳述する。インタビューの質問は、文学観光ツアーの実質的な内容と、オーガナイザーが自ら設定した目的の両方を引き出すように作られている。

3.2.3　シベリア地域における文学観光の主催者を対象としたインタビュー調査の結果

インタビューの設問は「当団体の活動」、「当団体による文学観光」、「文学観光と地元作家」の 3 つのカテゴリーに分けた。「当団体の活動」については前項で具体的に述べたため、本項では「当団体による文学観光」と「文学観光と地元作家」のカテゴリーに着目しながら、「文学観光ツアーのために当作家を選んだ理由は何か」、「当作家による文学作品の地元文学作品としての価値は何か」、「当作家の作品を基に文学観光ツアーを作ろうと思った理由は何か」という 3 つの質問に対する回答を通じ、シベリア地域の文学観光ツアーの主催者による「作家と文学観光の関係性」[67]、「作家」[68]、「文学観光」[69]の特徴を表 3-4.で下線を引いて示す。

表 3-4.からわかることは、インタビュー調査の対象者 4 人とも（A-D)、その地域で活躍していたシベリア作家による文学作品を全ロシア文学の一部として認識しながら、その地域の特徴を含んだものとして見ているということである。例えば「ロシア文学を代表する作家の一人である」、「全国的に有名な偉人」、「全国のロシア住民が誰でも知っている作品である」などの言及がみられる。また主催者は文学的な側面から「シベリア」と「中央」という 2 つの対照の相互作用性において形成される「シベリア文学」の特徴を理解していることも確認できる。

農村文学とエコロジー文学を含む 20 世紀後半のシベリア文学作品には、シベリア各地域の特徴（生活様式や自然など)、作家の個人的な経験を基にシベリアを故郷と認識する要素などを強調したさまざまな文学的要素が存在している[70]。「故郷の自然について考えさせる作家の一人である」、「外から見た自分の故郷の重要性が窺える」、「自分の故郷を愛していた」、「故郷について綴るシベリア作家として有名」という言及からみると、文学観光ツアーの主催者はツアーで扱うシベリア作家の文学作品の特徴を理解していることがわかる。言い換えれば、主催者は大祖国戦争以降に形成された「故郷」という概念の存在を意識しており、地元シベリア作家により対照的な関係性を基盤に掲げられるようになったシベリアの故郷的な側面を抽出し、ツアーで故郷的な要素を意識的に利用していると言えるのである。

---

[67] 文学観光で使われる地元作家と文学観光ツアーの関係性。

[68] 文学観光ツアーで使われる地元シベリア作家。

[69] 当地域で行われる文学観光。

[70] A-E 付録.を参照。

表 3-4.シベリア文学観光の各主催者を対象としたインタビュー調査（回答）

地域	対象者	「文学観光と地元作家」		「当団体による文学観光」
		作家と文学観光	作家	文学観光
		「文学観光ツアーのために当作家を選んだ理由は何ですか？」	「当作家による文学作品のシベリア文学作品としての価値は何ですか？」	「当作家の作品を基に文学観光ツアーを作ろうと思った理由は何ですか？」
イルクーツク州	A	「翻訳されて世界的な人気を獲得した作品を残していて、ロシア文学を代表する作家の一人であるから。」	「イルクーツク州の自然や生活様式などについて色々教えてくれて、また、地元の人にとって大事で聖なるバイカル湖にも少なからず言及するシベリア文学の宝石である。」	「2000 年代半ば頃の数度の経済危機を経て、全国・地方を問わず、人文科学の発展のルネサンスが始まる。イルクーツク州では、地元文学が特別に注目されている。ラスプーチンの作品には、地域の象徴と作家の故郷への愛が込められている。彼は 70 年代後半の地域住民の波瀾万丈を描いている。彼は自分の故郷を愛していた。文学観光を通じて、地元の人と観光者がツアーに参加することで、愛国心を高揚させ、地元の人々がイルクーツク州の文化に興味を持つことにつながると考える。」
アルタイ共和国	B	「作家だけではなく映画監督としても全国的に有名な偉人で、いまでもたくさんの人を引き付け、時代を問わず農村のアクチュアルな問題が描かれた小説の農村作家として知られている。」	「小説のマスターとも呼ばれるシュクシンの作品はアルタイの村人の生活様式、村の全滅危機、紆余曲折などを反映させている。さらに、大学時代作家自身がアルタイを離れ都会モスクワに住んでいたので、外から見た故郷の重要性が窺える。」	「シュクシンは、ロシアの国富である。彼の文学作品と映画のおかげである。1977 年創立と同年にこの博物館へのツアーが始まった。しかし、他の地域と協力し文学観光ツアーを行うようになったのは、ごく最近のことである。昨年、イルクーツク、スロストキ（アルタイ）と共に、文化・文学教育プログラムの拡大で 3 つの地域を統合した共通の文学・観光空間「シベリア文学の三角形」プロジェクトがスタートした。この 3 人の作家は共通の特徴を持ち、故郷について綴るシベリア作家として有名になった。」

クラスノヤルスク地方	C	「学校で誰でも読んだことのある作家の一人で、クラスノヤルスク地方を愛し、特にエニセイ川が好きで、故郷の自然について考えさせる作家の一人であるから。」	「全国ロシア住民が誰でも知っている作品である。活躍当時経済発展によりシベリア、特にクラスノヤルスク地方、エニセイ川の空間におけるエコロジー問題が拡大を成し遂げることにより、そこへの注目を向けさせようと筆を走らせていた。」	「博物館自体はいくつかの分野がある。文学もその一つである。当初、博物館にはアスタフィエフ部門はなく、郷土史博物館として設立された。1996 年にアスタフィエフ V.P.の発案で、文学博物館が開設された。2002 年にアスタフィエフがオヴシャンカ村の実家で亡くなった後、作家を記念した博物館が開設された。この中には、シベリアに関する神話やシベリア文学にまつわる話が盛り込まれ、地域文化への思いやりを兼ね備えている。それはアスタフィエフの作品にも反映されているので、観光ツアーを通じてクラスノヤルスク地方の文化及び文学世界に触れることが可能である。」
ケメロヴォ州	D	「どの作家もケメロヴォ州を褒めたたえていた。小説や詩などを通じて故郷とのつながりを見せていた。例えば、ネボガトフが戦地散文を通じて故郷を離れた自分の心境を描く。フェドロフは自分の故郷であるマーリエフカの自然や家の温もりなどについて述べている。チビリキンはシベリアのエコロジー問題を掲げ、そこへの関心を向けさせる。学生時代から知っている人も、その作家たちが活躍していた場所を訪れることで、彼らの気持ちを理解することができる。」	「ケメロヴォ州にとって数々の実績を収め、たくさんの傑作を残している、ケメロヴォ人なら誰でも一度は聞いたことがある作家である。又、ケメロヴォ州のさまざまな場所を描いているので、自分の故郷の各地域の文学的模様が想像できる。その豊かさが想像できる。」	「2014 年に図書館は大統領補助金を受賞し、同年に初めて文学観光ツアーを作った。元々、ケメロヴォ州における国立図書館による文化的プログラムとして考えられていたが、その後もっと文学的ディスクールに集中したツアーに取り組むようになった。2016 年ぐらいから作家の数が増え、1 つのツアーにつき 1 人の作家をテーマとする仕組みができた。また、その各作家の特徴、例えば自然、村、戦争と故郷などを中心にツアーを作ると同時に、ケメロヴォ州の文化的要素、フェスティバル、テレウト人のオープン・ミュージアムなども導入する。」

表 3-5 では、表 3-4 のデータに基づきながら、シベリア文学観光ツアーの主催者が 20 世紀後半のシベリア文学作品の故郷的な特徴を理解しているだけではなく、文学観光実践の枠組みの中でシベリア文学作品における「故郷」の概念を使用していることを示す要素を挙げてみた。回答データのうち「文学作品における故郷という概念の意識」と「観光づくりでの故郷という概念の利用の意識」に関連する要素をまとめたものである。

表 3-5.シベリア文学観光の主催者により「故郷」という概念を意識する要素（表 3-4.を基に）

回答者（主催者側）	質問	
	「文学観光ツアーのために当作家を選んだ理由は何ですか？」／「当作家による文学作品の地元文学（シベリア）作品としての価値は何ですか？」	「当作家の作品を基に文学観光ツアーを作ろうと思った理由は何ですか？」
	「故郷」に関する意識の所在	
	「文学作品における故郷の概念の意識」	「観光づくりでのその利用の意識」
A さん	1.イルクーツク州の自然や生活様式などについて色々教えてくれる； 2.地元の人にとって大事で聖なるバイカル湖にも少なからず言及している。	1.ラスプーチンの作品には、地域の象徴と作家の故郷への愛が込められている； 2.彼は 70 年代後半の地域住民の波瀾万丈を描いている。彼は自分の故郷を愛していた； 3.文学観光を通じて、地元の人と観光者がツアーに参加することで、愛国心を高揚させ、地元の人々がイルクーツク州の文化に興味を持つことにつながると考える。
B さん	1.アルタイの村人の生活様式、村の全滅危機、紆余曲折などを反映させている； 2.大学時代作家自身がアルタイを離れ都会モスクワに住んでいたので、外から見た自分の故郷の重要性が窺える； 3.時代を問わず農村のアクチュアルな問題が描かれた小説の農村作家として知られている。	文化・文学教育プログラムの拡大で 3 つの地域を統合した共通の文学・観光空間「シベリア文学の三角形」プロジェクトがスタートした。この 3 人の作家は共通の特徴を持ち、故郷について綴るシベリア作家として有名になった。
C さん	1.クラスノヤルスク地方、エニセイ川の空間におけるエコロジー問題が拡大を成し遂げることにより、そこへの注目を向けさせようと筆を走らせていた； 2.クラスノヤルスク地方を愛し、特にエニセイ川が好きで、故郷の自然について考えさせている作家の一人であるから。	シベリアに関する神話やシベリア文学にまつわる話が盛り込まれ、地域文化への思いやりを備えている。それはアスタフィエフの作品にも反映されているので、観光ツアーを通じてクラスノヤルスク地方の文化及び文学世界に触れることが可能である。

D さん	1.ケメロヴォ州のさまざまな場所を描いているので、自分の故郷の各地域の文学的模様が想像できる。その豊かさが想像できる； 2.小説や詩などを通じて故郷とのつながりを見せていた； 3.ネボガトフは戦時に文学作品を通じて故郷を離れた自分の心境を描く； 4.フェドロフは自分の故郷であるマーリエフカの自然や家の温もりなどについて述べている； 5.チビリキンはシベリアのエコロジー問題を掲げ、そこへの関心を向けさせる。	その作家たちが活躍していた場所を訪れることで、彼らの気持ちを理解することができる。

表 3-5.から、主催者 4 人はいずれもシベリア文学作品において、作家とその故郷としてのシベリアとのつながりに基づく文学的要素を指摘していることがわかった：

1. **A さん：**ヴァレンティン・ラスプーチンによるイルクーツク州における村の伝統的な生活様式及び地元の人にとって聖なるバイカル湖（故郷の自然）の描写；
2. **B さん：**ヴァシリー・シュクシンによるアルタイに住む村人の生活様式の描写；
3. **C さん：**ビクター・アスタフィエフによるクラスノヤルスク地方におけるエコロジー問題、故郷の自然への負担に関する言及；
4. **D さん：**ヴァシリー・フェドロフによるマーリエフカの自然、またウラジーミル・チビリキンにより掲げられたシベリアにおけるエコロジー問題などの描写

この調査から、シベリア作家に関する情報と共に文学観光ツアーで扱われるシベリア文学作品の要素が、付録 A-E.の文学作品の分析で明らかになった点と類似していることがわかる。例えば、天然資源の適切な管理の重要性、自然の生態系及び農民生活様式を破壊することの悪影響など（ヴァレンティン・ラスプーチン）[71]、人間と自然の関係、天然資源を適切に扱うことの重要性、シベリアの先住民族にとってのタイガの重要性など（ビクター・アスタフィエフ）[72]、地域アイデンティティの一部となっている同郷人の間の人間関係（ヴァ

[71] （付録 A）ヴァレンティン・ラスプーチン『マティオラへの別れ』(1976）の分析を参照した。
[72] （付録 B）ビクター・アスタフィエフ『魚の王様「ボイエ」』(1976）の分析を参照した。

シリー・シュクシン）[73]、故郷のシベリアの森林に存在する問題とその解決方法の描写など（ウラジーミル・チビリキン）[74]、安定の場所、アイデンティティを構成する場所、人格を形成する重要な要素、故郷の特徴的な自然要素など（ヴァシリー・フェドロフ）[75]が挙げられる。主催者側の 4 人（A-D）はいずれも、その地域の地元作家の文学作品において「故郷」が存在する点、また観光づくりにおいてその利用を強調している点が確認できた。

さらに表 3-4.及び表 3-5.から、シベリアの 4 地域を拠点とする文学観光活動の主催者は作家と故郷のつながりに着目した内容を中心にツアーを作っており、「愛国心の高揚」、「地元への興味上昇」、「地元の文学世界との接触」などの目的を掲げていることがわかる。このように、シベリア文学作品から「故郷」の概念を意識・抽出し、それに基づく文学観光ツアーを作ることで、実践的に「観光者の郷土とのつながりを強化する」取り組みを構成したいという意図が窺える。

これからは「故郷」と「郷土」の 2 つの用語を平行して使っていく。第 2 章にも述べたように、「故郷」を人の起源（祖先の出身地、出生地、両親の出生地、同胞の出生地など）に関連し、物理的・感情的な離郷の両面でノスタルジーの顕在化に寄与しうる、その地域との感情的なつながりを形成する地域（国、村、都市など）の場所・空間であると規定する。本論文において「故郷」は、かつてシベリア作家が物理的・心理的喪失を体験し、文学作品を通して過去に失ったことのある「故郷」を意味する。一方、文学観光ツアーに参加した観光者は、シベリア作家が体験したような「故郷」の物理的・心理的喪失という経験を持っていない。そのため、観光者が精神的なつながりを持ち文学観光ツアーを通じてそのつながりを強めることができる空間に対して、「故郷」の喪失とノスタルジーの出現という意味で「郷土」という言葉を用いる。故郷を失い、ノスタルジー感覚が湧いてくる体験がない可能性が高いからである。実際、インタビュー調査及びアンケート調査を通じて、喪失の経験が存在する証拠を見出すことはできなかった。

まとめると、インタビューにより獲得できたデータから、シベリア文学観光ツアーの 4 つの主催団体は、20 世紀後半のシベリア文学の農村文学作品とエコロジー文学作品における特徴を理解していることがわかる。つまりシベリア文学観光ツアーの主催者は、20 世紀後半の各シベリア地域の地元作家による文学作品には、作家にとっての「故郷」としてのシベ

---

[73] （付録 C）ヴァシリー・シュクシン『村人―「スチョプカ」と「蛇毒」―』（1963）の分析を参照した。
[74] （付録 D）ウラジーミル・チビリキン 『騒げ、タイガ、騒げ！』（1962）の分析を参照した。
[75] （付録 E）ヴァシリー・フェドロフ『マーリエフカ・クロニクル』（2016）の分析を参照した。

リア地域の描写が含まれており、そのような文学作品における「故郷」がシベリアの一般化されたイメージを作り出すためのツールであると理解しているのである。

このように 20 世紀後半シベリア文学における特徴に対する理解があるため、主催者は文学観光の枠組みの中で、特定の地元作家及びその文学作品を意識的に利用するのである。さらにインタビューへの回答によれば、文学観光ツアーを企画する際、主催者は地域アイデンティティの強化を目的としている。シベリアの場合はシベリア地域アイデンティティの強化である。では、故郷的な要素が窺える 20 世紀後半のシベリア文学作品に焦点を当てて文学観光ツアーを企画することには、どのような理由があるのだろうか。

3.2.4　主催者側が「故郷」に着目した文学観光活動を行う理由

故郷的な要素が窺える 20 世紀後半のシベリア文学作品に焦点を当てて文学観光ツアーを企画することには 2 つの理由があると考えられる。1 つ目は主催者へのインタビューの回答から抽出できる。それはロシア文化省を筆頭とする国の文化政策である。

表 3-2.で示したように主催団体は 4 つとも国立機関で、ロシア文化省の管轄下にある。すなわち主催団体はロシア文化省の後援を受け、文化省が定めた『自治体郷土史博物館の活動に関するモデル基準に基づく、自治体博物館の近代化のための方法論的提言』[76]（2020 年度）を考慮した活動を行う必要がある。この提言のいくつかの項目に着眼してその趣旨を見てみると、例えば「市立博物館における研究活動に関して」の項目では「多くの自治体博物館の実践は、教育、文化、科学機関に勤務する市や区などの学校卒業生が、自治体博物館の業務にも携わることが可能である。郷土を愛するこれらのスペシャリストは、無償で効果的な研究コンサルタントになれるからである」（p. 9）とある。「博物館のコンセプトは、この博物館がなぜ、誰のために、何のために機能するのか、その独自性、ユニークさ、異質さは何か、この博物館がなければこの地域の社会文化状況はもっと貧しくなっていただろうという理解を反映する必要がある」（p. 9）とも記述されている。つまり観光活動を含め、博物館、文学館などの郷土博物館による活動は、地域との関係性を強化したり郷土における問題に関心を向けさせたり郷土への愛を育てたりすることを目指す必要があるというのである。このようなロシア文化省により定められた方針に従って観光活動を形作る必要がある証拠として、B の「文化・文学教育プログラムの拡大で 3 つの地域を統合した共通の文学・

[76] ロシア語で “Методические Рекомендации по Модернизации Муниципальных Музеев на Основе Модельного Стандарта Деятельности Муниципального Краеведческого Музея”（2020 年度）。

観光空間「シベリア文学の三角形」プロジェクトがスタートした」（アルタイ共和国）及び D の「2014 年に図書館は大統領補助金を受賞し、同年に初めて文学観光ツアーを作った」（ケメロヴォ州）という言及が挙げられる。

文学観光ツアーの 4 つの主催団体が、「故郷」の概念が際立つシベリア作家及びその文学作品に関連する情報を利用する 2 つ目の理由は、観光者に「共鳴」を呼ぶことがあり得るからである。そのため主催者は文学観光ツアーの内容を選ぶ際、潜在的な観光者にとって馴染み深く、好まれそうなものを念頭に置く。本論文で扱う文学観光ツアーの場合は、好まれそうな内容とは郷土であるシベリアに関連したものである。このような内容を用いることで、自身をシベリア人と自己認識する観光者の「シベリア地域アイデンティティ」を強化する可能性が考えられる。

シベリア文学観光ツアーに参加する観光者の「シベリア地域アイデンティティ」が強化される可能性を探るために、また主催者によるシベリア文学観光の目的を裏付けるために、ツアーに参加する観光者を対象にアンケート調査を行った。アンケート調査の回答を分析することで、どのような人が、どのようなバックグラウンドを持ってツアーに参加するのか、また、シベリアの各地域で文学観光ツアーを実施する理由は何であるのかを理解することが可能になる。さらにアンケート調査では、文学観光ツアーに参加する観光者における「共鳴」の有無を探ることも目的とする。

3.3　シベリア文学観光に参加する観光者を対象としたアンケート調査

3.3.1　ケメロヴォ州の「サライルスキー・クリャシュの物語」ツアー

本論文では、シベリアのケメロヴォ州で行われる文学観光ツアーに参加する観光者を対象にアンケート調査を行った。主催団体を対象にインタビューを行った他の 3 地域（アルタイ共和国、クラスノヤルスク地方、イルクーツク州）で観光者を対象としたアンケート調査を行わなかった理由は、3 地域の文学観光ツアーが不定期で、観光者に関連する一次資料も不足しているからである。したがって、観光者に着目したアンケート調査はケメロヴォ州に絞る。



図 3-5.ケメロヴォ州で文学観光を行う図書館（玄関）

2021-2023 年の間に実施したアンケート調査の結果を

分析する前に、本項ではケメロヴォ州の文学観光ツアーがどのような雰囲気の中で行われているのか、どのような構図でツアーが企画されているのか、その全体像を把握するために、著者が 2021 年 7 月 17 日に参加した「サライルスキー・クスリャシュの物語」[77]文学ツアーの内容を示す。



図 3-6．図書館から主な目的地グリェフスク市までの距離

「サライルスキー・クスリャシュの物語」文学ツアーは、毎年定期的に 5 月頃から 10 月頃まで行われる 8 時間（日帰り）の文学観光ツアーである。バスツアーの旅程には 5 つの場所の訪問が含まれている。1. シャンダ村のテレウト民族遺跡、2. M.A.ネボガトフ中央市立図書館内の M.A.ネボガトフ博物館、3. 正教会の祠堂群があるモスクワの聖マトロナと洗礼者ヨハネの聖なる泉、4. 聖ペテロとパウロ教会（19 世紀の建築物）、5.修復されたサレール文化の家と鉱石探検家ポポフ[78]にちなんだ公園（図 3-7.）の 5 カ所である。

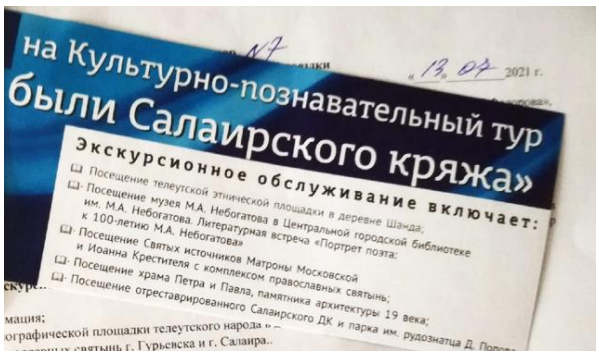


図 3-7．訪問する場所が書いてある文学観光ツアーのチケット

ツアーの中心テーマはケメロヴォ州グリェフスク市生まれの作家 M.A.ネボガトフである。訪問する 5 カ所のうち 4 つが M.A.ネボガトフの生誕地とその環境に関連している。M.A.ネボガトフ博物館は M.A.ネボガトフが生まれた町にある中央市立図書館内にあり、正教会の祠堂群があるモスクワの聖マトロナと洗礼者ヨハネの聖なる泉は M.A.ネボガトフが生前訪れたことがある場所である。聖ペテロとパウロ教会は M.A.ネボガトフが何度も訪れたグリェフスク市の近くにある。

距離が長いため、ツアーはすべてバスで移動する。図書館から朝 8 時に出発し、最初の目的地はシャンダ村のテレウト民族遺跡である。これはケメロヴォ州の主要な先住民族のひとつであるテレウツ族の文化に特化した野外博物館である。野外博物館の展示品は本物ではなく、地元の人々の話に基づいて再現されたものである（図 3-8.；3-9.）。

---

[77] ロシア語で “Сказы и были Салаирского кряжа” 。

[78] ツアー中は修復中だった。



図 3-8．シャンダ村のテレウト民族遺跡 1



図 3-9．シャンダ村のテレウト民族遺跡 2



図 3-10．シャンダ村のテレウト民族遺跡（野外博物館のガイド）1



図 3-11．シャンダ村のテレウト民族遺跡（野外博物館のガイド）2

シャンダ村では、シャンダ野外博物館で働くガイドがテレウト族の風習や文化について説明する。ガイドによれば、テレウト族は 19 世紀に正教に改宗した民族であり、現在は正教伝来以前の信仰であったシャーマニズムを説くテレウト族はいないにもかかわらず、近年地元や他地域の人の間でテレウト族の文化に対する関心が高まっている。2020 年にはテレウト語で「鳴り響く山のそばの土地」を意味するシャン・トゥウ・ジェリム博物館（Шан туу Jерим）がオープンする。ケメロヴォ州の文学観光を企画し観光ツアーにも同行するガイドの N は、「テレウツ族の文化はケメロヴォ州の文化と切り離せないため、この場所は文学ツ

アーに組み込む重要な場所である」[79]と話す。また野外博物館のガイドは「ネボガトフの詩はテレウト語に翻訳されている。シャンダ村はネボガトフが生まれ育ったグレフスク市の近くにあり、ネボガトフは私たちの誇りでもある」と述べている。このように、シャンダ村訪問はケメロヴォ州の地元作家であるネボガトフとも間接的に関係があると言える。シャンダ村は作家が先住民を含む地元民からどのように見られていたのかを知ることができる場所なのである。



図 3-12．毛糸で幸運のシンボル「テレウト」を織る（文化体験）

その後、観光者はバスで、残りの 4 つの訪問地が市内と近郊に点在するグリェフスク市に移動する（図 3-13.）。上記の「M.A.ネボガトフ中央市立図書館内の M.A.ネボガトフ博物館」「正教会の祠堂群があるモスクワの聖マトロナと洗礼者ヨハネの聖なる泉」「聖ペテロとパウロ教会」「修復されたサレール文化の家と鉱石探検家ポポフにちなんだ公園」の 4 カ所である。最初に訪れるのは M.A.ネボガトフにちなんで名付けられた中央図書館である。

[79] 2021 年 7 月 17 日の文学観光ツアー中に直接得られた回答である。



図 3-13 . グリェフスク市の中心部

この図書館を訪問する目的は、M.A.ネボガトフを中心に作られたプレゼンテーションを聞くことである。ネボガトフは大祖国戦争の全期間を戦い抜いた詩人兼作家であり、とりわけ戦時中は前線で自分の故郷であるケメロヴォ州について多くの詩を書いた。プレゼンテーションの準備中に、ツアー参加者は図書館内のネボガトフ関連の展示などを見学するよう提案される。固定展示ではネボガトフの写真、家族の写真、私物、ネボガトフの文学作品などが展示されている（図 3-14.)。



図 3-14 . ネボガトフの文学作品

中でも作家の写真、家族の写真、私物などが展示されたスタンドは特に観光者の注目を集めた（図 3-15.）。見学中には観光者の一人が「私の母も同じ髪型をしていた」[80]と感想を述べ、他の二人の観光者も納得したようにうなずく場面がみられた。これは世代間のつながりと、観光者の個人的な過去に直接関連する感情を呼び起こす展示物の能力を示唆している。



図 3-15．ネボガトフに関連する固定展示（写真や私物など）

ネボガトフは最前線で活発に詩を書いた作家である。軍事史のテーマはすべてのロシア人にとって神聖なものであるが、中でも大祖国戦争は特別である。ロシア人のほとんどは大祖国戦争に参加したり、亡くなったりした親戚を持っている。それゆえ地元のシベリア作家が戦線から帰還した作家であることは、同胞に対する誇りと地元への愛国心をより一層呼び起こしうる。プレゼンテーションにネボガトフが戦争中に故郷への憧れを綴った詩の紹介と朗読があることも、そのような目的であろう（図 3-16.；3-17.）。



図 3-16．プレゼンテーション準備中

[80] 2021 年 7 月 17 日の文学観光ツアー中に直接得られた回答である。

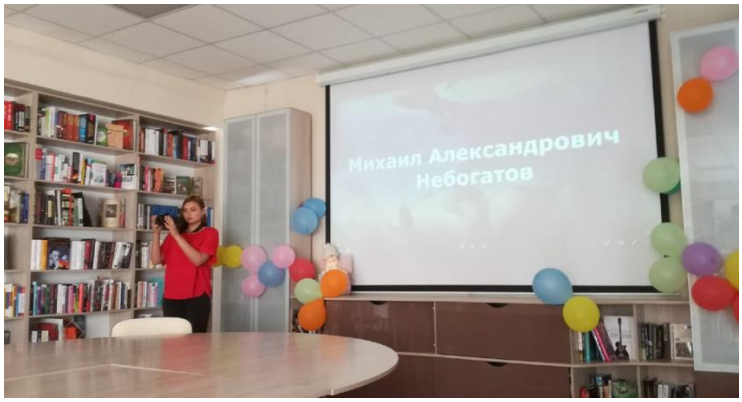


図 3-17．プレゼンテーション発表中

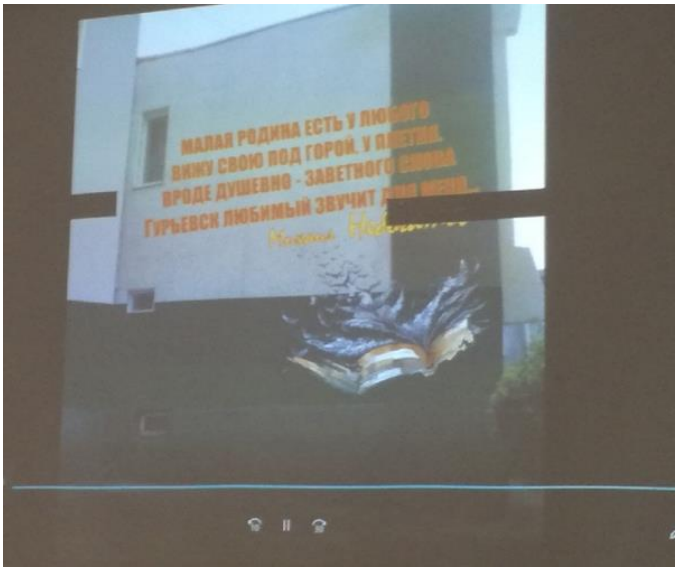


図 3-18．プレゼンテーションで紹介されたネボガトフの詩

Малая родина есть у любого,	誰にでも故郷がある。
Вижу свою под горой у плетня.	私の故郷は山の下にある草ぶき屋根
Вроде душевно-заветного зова	のそばだ。
«Гурьевск любимый» звучит для меня	心からの呼びかけのように
	"私の好きなグリェフスク"と私には
	聞こえる。

（図 3-18.のプレゼンテーション中に紹介されたネボガトフによる故郷に関連する詩。翻訳は著者）

図書館見学の所要時間は約 1 時間半である。図書館見学後、観光者一行はグリェフスク市近郊にある聖地を訪れる。正教会の祠堂群があるモスクワの聖マトロナと洗礼者ヨハネの聖なる泉及び聖ペテロとパウロ教会である。



図 3-19．モスクワの聖マトロナの教会

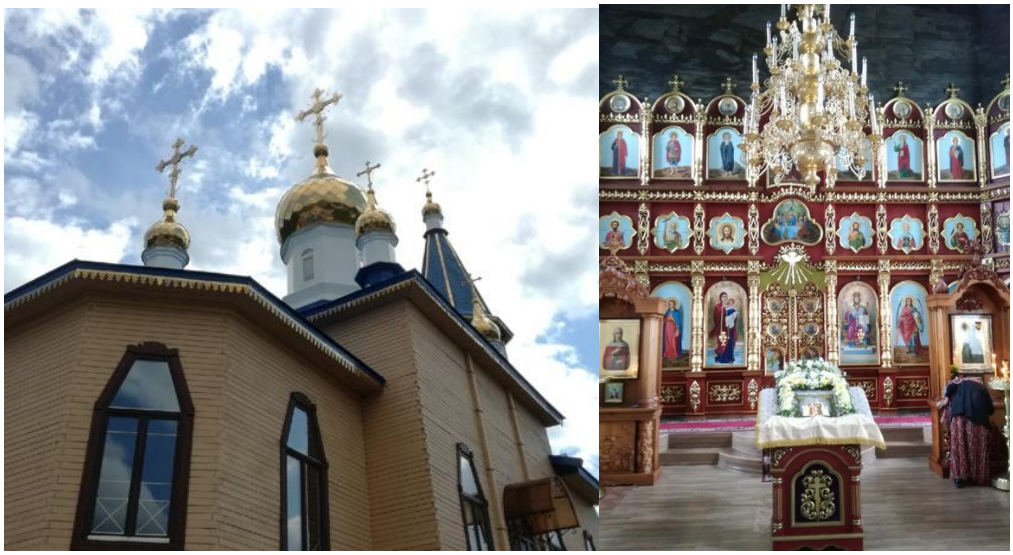


図 3-20．洗礼者ヨハネの聖なる泉（聖ペテロとパウロ教会）



図 3-21．聖ペテロとパウロ教会

グリエフスキー地区の聖地であるモスクワの聖マトロナ教会と聖ペテロ・パウロ教会は、M.A.ネボガトフと直接関係があるわけではない。しかしケメロヴォ州で文学観光を行う図書館のガイド N によると、モスクワ聖マトロナ教会と聖なる泉は、作家が住んでいた場所の全体的な雰囲気に関する理解を深めるのに貢献するという。「グリェフスク地方の聖地はグリェフスク市だけではなくケメロヴォ州全体の財産である。グリェフスク近郊のサレール町を含め、観光者はクズバスで最も古い教会の一つである聖ピョートルとパウロ教会を訪れる。この教会は、クズバスの作家の文学作品に描かれた（ロシア革命時)、非常に興味深いが単純ではない運命を持っている」[81]とのことである。このように民俗学的に重要な場所（シャンダ村）や聖地（教会、聖なる泉など）を訪れることは、一方では中心的なテーマとして扱われている同胞のシベリア作家が生まれ育った雰囲気を全体的に理解するための補足であり、他方ではケメロヴォ州の文化空間をより深く理解することに貢献すると言えるだろう。つまり文学的な側面もその他の側面も含めて、ケメロヴォ州の文化との積極的な“コミュニケーション”が目的となっているのである。クズバス図書館のガイドによると、ケメロヴォ州で企画される文学観光ツアーはすべて同じように構成されている。要するに、作家ゆかりの文学的な場所を訪れることで、観光者は地元の同胞のシベリア作家が生まれ育ち、暮らし、活躍していた場所の全体的な雰囲気と、ケメロヴォ州独特の文化的空間に接触できるようになっているのである。

[81] 2021 年 7 月 17 日の文学観光ツアー中に直接得られた回答である。

3.3.2　シベリア文学観光ツアーにおける観光空間及び観光者の行動の分析

前項ではケメロヴォ州で行われる文学観光ツアー「サライルスキー・クスリャシュの物語」を例にシベリア文学観光ツアーの構成要素を見てきた。ケメロヴォ州の例ではツアーの主催者が「地域アイデンティティの強化」を主な目的の 1 つに掲げ、地元のシベリア作家の出身地に直接または間接的に関係する場所を訪問するプログラムの枠組みの中でツアーを実施していることがわかった。例えば、作家に直接的な関係を持つ M.A.ネボガトフ博物館はグリェフスク市の同名の図書館内にあり、作家の本、写真、私物などが保管されている。一方、テレウトのシャンダ村は作家を敬愛する人々と知り合うことができる場所で、サライル市（グリェフカ郊外）に位置する教会は作家が生前に訪れた場所である。つまり作家と間接的なつながりを持つ場所である。

第 3 章の冒頭では、文学観光ツアーに参加する観光者が地元民である場合、観光者のシベリア地域アイデンティティを構成する要素との相互作用において、馴染みのあるものに対する感情的反応の出現により、観光者の地域アイデンティティを強化できる自己認識に関わる要因が出現する可能性があると述べた。しかし、地域アイデンティティの強化という潜在的な影響がツアー主催者によって厳格に規制されるプロセスなのか、つまり観光者の自己認識に関わる要因を再生産しうる観光者の行動のための特別な舞台が作られることによって生じるのか、それともあらかじめ準備された舞台とは無関係に生じる自発的なプロセスなのかといった点について言及しておく必要があると考える。

シベリアで行われる文学観光ツアーに参加する観光者の地域アイデンティティに影響を与えうる要因の出現の自発性または非自発性、そしてその後の感情的反応の可能性について論じるとき、主催者が企画した文学観光ツアーが開催される空間における観光者の行動や規制の自由度といった要因を考慮に入れなければならない。どのツアーも主催者によって作られた枠組みを持つ実践である。主催者は一定のルートを作り、参加者はそれに沿って行動するため、観光者はガイド（ツアーの主催者）の指示に従って行動するものと考えられる。このような観光の実践は、特定の場所と特定の時間にどのような行動をとるべきかを定めることによって実践的な方向づけを提供し、主体の立場を育成するさまざまな言説によって枠付けられ、情報を与えられている（Adler, 1989, p. 1384）。Tim Edensor（2000）は観光を一種のパフォーマンスとして分析し、その成功は行為者（主催者やツアー実施に携わる労働者）の技量、それが行われる文脈、そしてそれが観光者によってどのように解釈されるかに左右される、固定されたものではなく相互作用的で継続的なプロセスであるとし、「規律ある儀

式」という概念に言及する。Edensor（2000, p. 334.）によれば、観光における「規律ある儀式」とは期待されたルーティン、つまりツアーの一環として実行されることが要求される儀式（見るべきもの、撮るべき写真、購入すべき土産物や絵葉書など）と考えられるのである。このような儀式では、モノは形式的なポージングのパフォーマンスの舞台として機能し、「観光者である私たちが特定のドラマトゥルギーの風景の中に位置づけられるような、暗黙の演劇的慣習によって枠付けられる」（Chaney, 1993, p. 86）。確かにこのような観点からシベリア文学観光ツアーの企画及びその実態を見てみると、コンセプト的には、ツアーは反復的な性格を持っていることがわかる。一方では、文学観光ツアーのプログラムは安定した構造を持っており、その中で観光者は一定のルートに沿って特定の場所を訪問するようになっている。例えば「サライルスキー・クスリャシュの物語」のツアーでは、最初の到着地がシャンダ村、2 番目の到着地がグリュエフスク市、3 番目の到着地が M.A.ネボガトフの図書館などであるように、明確なツアープランが組まれている。しかしそれと同時に、主催者による規制があるにもかかわらず、ツアー中は積極的で自主的な動き、エデンソールの言葉を借りれば「即興的なパフォーマンス」をみることができた。つまり観光者はツアーのプランに沿いながらも、どこへ行き、何をするのかを自由に選択できる。自分自身のシナリオに従って「舞台」の上で（Edensor, 2000, p. 335）行動しているのである。ケメロヴォ州でのツアーでは観光者自身が作家の写真が飾られたスタンドや図書館に近づき自分たちの過去に思いを馳せたり、サレール市で聖ペトロとパウロ教会を訪れる際、ある観光者は寺院の中で祈りを捧げたり、別の観光者は寺院の裏手に回ったり、19 世紀から存在する古い歴史的墓地を訪れたりした。つまり観光ルートという外面的な反復性と規則性にもかかわらず、内省のために対象を選ぶ自由が見られるのである。シベリア文学観光ツアーを規律という観点だけで語るなら「観光者の従順な気質」がある（同上, 2000, p. 334）と言わざるを得ないだろう。ところがシベリア文学観光では、観光者の側に静的な行動や安定した行動パターンがないことがわかる。儀式の規範性を回避し、その結果、意味の新たなブリコラージュ（Schutz, 1964, p. 72）、感情的な反応の対象を生み出すことにつながりうる。

上記に述べたシベリア文学観光ツアーの特徴を見てみれば、シベリア文学観光ツアーは複雑な構造を持っていると言える。主催者による一定の規制があるにもかかわらず、観光者は即興行動ができる空間にいる。そのため、より幅広い感情的反応が得られる観光空間が形成される。さらに文学観光ツアーが行われる空間について言えば、ツアーのルートは地元民との社会的接触から切り離された、一種の飛び地のような観光空間の中に位置しているわ

けではない（Edensor, 2000, p. 328）。シベリア文学観光は、観光者が他の地元の人々と直接交流する一般的な社会空間に織り込まれている実践となっているのである。言い換えれば、観光地には明確な境界線がないため、観光者にはツアー内容や包括的な一般的社会空間など、環境全体との全面的な相互作用がある。また、このようなツアー中の環境全体との全面的な相互作用は身体的体験を通して行われる。教会のろうそくの匂いを嗅いだり、昼の食事を味わったり、聖なる泉の水のせせらぎを聞いたり、図書館のスタッフやガイド、他の観光者や地元の人々と話をしたりと、観光者は五感を駆使する。地域アイデンティティに与える影響という点では、観光者はツアー中にシベリアの文化空間及びシベリア地域アイデンティティの一部を成すシベリア文学に関連した、それぞれ異なる体験をする。周囲の環境要素との相互作用という点では、ツアーは観光者にとって比較的自由な実践の場である。したがって観光者はそれぞれ、ツアーの中で地域アイデンティティの強化につながり得る、感情的反応を引き起こす対象を選ぶ。言い換えれば、観光者全員に及ぼされる地域アイデンティティの強化という結果は同じであるが、結果までの達し方はそれぞれである。このようにシベリア文学観光では、観光者にとって身体は「身体的・感覚的な投資と、その精神的・社会的な意味合い」（Knudsen & Waade, 2010, p. 14）を反映する対象を選択するための道具として機能すると言える。シベリア文学観光において地域アイデンティティが強化される可能性について言えば、ツアー参加者の身体は環境と自発的に相互作用して感情的な反応を見出すことを可能にし、それが観光者のバックグラウンドと一致する場合には、自己認識できる要因の出現につながりうるのである。

3.3.3　ケメロヴォ州の文学観光ツアーに参加する観光者を対象にしたアンケート調査の概要

ここまでヴァンシーリー・フェドロフ科学国立図書館が実施する文学ツアーとそこにおける観光空間について考察した。ここからはケメロヴォ州で行われる文学観光ツアーに参加した観光者を対象に実施したアンケート調査を分析する。アンケート調査は、シベリア文学観光の主催者により掲げられる目的及び文学作品から抽出されたツアーの中心的な「故郷」のコンセプトという点を考慮した上で、どのような人がシベリア文学観光ツアーに参加し、どのような効果が得られるのかを明らかにするために行ったものである。前項で述べたように、今回のアンケート調査はケメロヴォ州を中心に実施した。以下の表 3-6. でアンケート調査の概要を示す。

表 3-6.アンケート調査実施の概要（ケメロヴォ州）

地域	実施日時	実施方法	団体	アンケート対象者の人数	質問の数	アンケート用紙を配ったツアーの数
ケメロヴォ州	2021 年 5 月 6 日 - 2021 年 9 月 11 日	アンケート用紙を配る	ヴァシリー・フェドロフ科学国立図書館郷土資料室	86 人	35 問（2 枚）	6 つ

ヴァシリー・フェドロフ科学国立図書館郷土資料室を通してアンケート用紙を配布し、2021 年 5 月 6 日～2021 年 9 月 11 日の間に 86 人の観光者を対象に調査を行った（表 3-6.）。期間中、当図書館によりケメロヴォ州で行われた 6 つの文学観光ツアーに参加した観光者が対象となった：

1. 2021 月 5 月 6 日：「フォークロア＆伝統フェスティバル “ホワイト・バーチ 2021”」[82]（14 人）；
2. 2021 月 6 月 12 日：「ヴァシリー・フェドロフに会うためにマーリエフカへ」[83]（11 人）；
3. 2021 年 7 月 17 日：「サライルスキー・クリャシュの物語」[84]（16 人）；
4. 2021 年 7 月 31 日：「ヴァシリー・フェドロフに会うためにマーリエフカへ」[85]（14 人）；
5. 2021 年 8 月 14 日：「詩人レオニード・ゲルシドヴィッチと一日」[86]（16 人）；
6. 2021 年 9 月 11 日：「ドストエフスキー家を訪ねて」[87]（15 人）

配布したアンケート用紙の質問項目は大きく 4 つのカテゴリーから成る 35 問である。4 つのカテゴリーは「観光者自身」、「観光者と当ツアーで扱われる作家の関係性」、「観光者と当ツアー（ガイド、内容の印象など）」、「シベリア文学そのものと観光者の関係性」である。

[82] ロシア語で “Фестиваль фольклора и традиций «Белая Берёза - 2021”。
[83] ロシア語で “В Марьевку, на встречу с Василием Фёдоровым”。
[84] ロシア語で “Сказы и были Салаирского кряжа”。
[85] ロシア語で “В Марьевку, на встречу с Василием Фёдоровым”。
[86] ロシア語で “День с поэтом Леонидом Гержидовичем”。
[87] ロシア語で “В гости к Достоевским”。

次項ではアンケート調査の質問に沿いながら、獲得できた 13 の結果を示していく。

3.3.4　シベリア文学観光者を対象にしたアンケート調査の諸結果—ケメロヴォ州—

調査結果 1.（年齢）：

観光者の「年齢」を尋ねる質問では、86 人の観光者の平均年齢は 59.4 歳で、30 代が 4 人（5%）、40 代が 16 人（19%）、50 代が 14 人（16%）、60 代が 38 人（44%）、70 代が 13 人（15%）、80 代が 1 人（1%）という結果になった（図 3-22.）

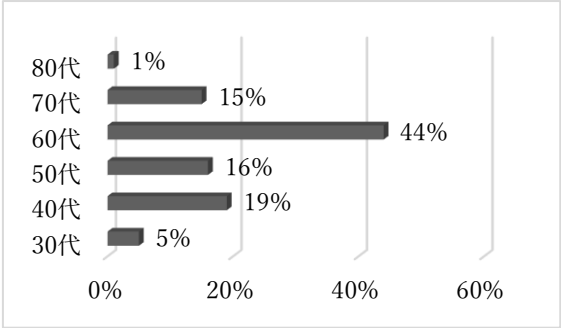


図 3-22.　調査結果 1.（年齢）

図 3-22.を見ると、ケメロヴォ州におけるシベリア文学観光ツアーに参加する観光者の大部分を占めるのが 60 代である。60 代以外にも 40 代から 70 代が文学観光ツアーに積極的に参加していることがわかる。こうした年齢層が多い理由としては 2 点が考えられる。一つは観光者が生まれた年代、もう一つは中学校・高校時代の教育課程で教えられる文学である。

先に述べたように、戦後のシベリアでは経済復帰を目指し大規模な産業拡大が行われた。シベリアの伝統的な生活様式の破壊や自然保護などに対する注目が高まり、「私たちは自然を征服し、自然を人間、その文化、その経済に従属させる闘士になりたいのだ…私たちは、故郷の広大な土地をただ歩き回るだけではいけない」（フェルスマン, 1956, p. 8）という哲学が脚光を浴び、シベリア文学では「農村文学」及び「エコロジー文学」という文学的流れが出現する。

アンケート調査を行った観光者の過半数を占める 60 代は、工業化を背景にシベリア各地で作られた「農村文学」の人気が上昇し、シベリア各地の中学校・高校の教育課程で扱われ始める時期に生まれた世代である。また、40 代の観光者は 1990 年代の中学校・高校の教育課程で「故郷」の自然にかかわる「エコロジー文学」が強調される時期に生まれているのが特徴である。すなわち、ケメロヴォ州における文学観光で扱われる文学作品とその作家に関する内容は、観光者が学校で学んだシベリア文学に関する内容に直接関係していると言える。つまり観光者が共鳴を感じることができるのは過去のバックグラウンドを持っているからである。

調査結果 2.（性別）：

86 人の回答者のうち、女性が 85%、男性が 15%を占めていた[88]（図 3-23.）が、ジェンダーが「郷土とのつながり」に影響を与える経験則を特定することはできなかった。

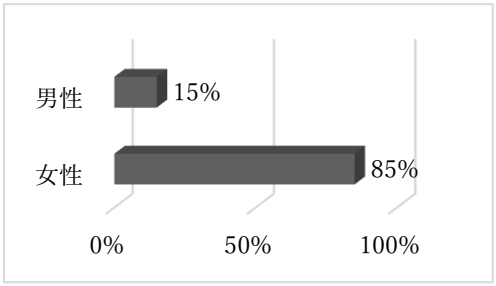


図 3-23. 調査結果 2.（性別）

調査結果 3.（地元民／非地元民）：

回答者のうち 18 人（21%）がケメロヴォ州以外で生まれた非地元民で、68 人（79%）がケメロヴォ州を「故郷」とする地元民であることが明らかになった（図 3-24.）。

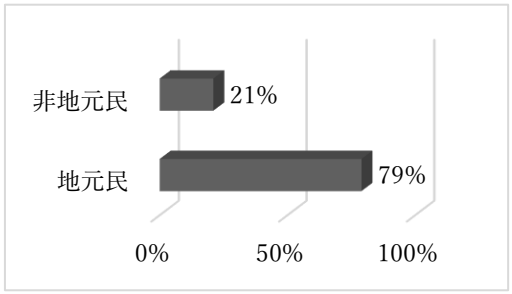


図 3-24. 調査結果 3.（地元民／非地元民）

「地元民」の割合が高いのは、「故郷」という概念が組み込まれたシベリア文学作品が盛んになる 20 世紀後半生まれの割合が高いことと相関している。「地元民」こそが、シベリア、シベリア文学、居住するシベリアの町、シベリアの作家などに関する情報を獲得し、シベリアを中心としたバックグラウンドが作られる機会を持っているからである。

「非地元民」の割合が最も高いのは、シベリア文学に加え文化やレクリエーションなどを含む「フォークロア＆伝統フェスティバル “ホワイト・バーチ 2021”」、「サライルスキー・クリャシュの物語」、「詩人レオニード・ゲルシドヴィッチと一日」のツアーで、これら 3 つのツアーに確認できたのはそれぞれ 5 人であった。シベリアとの関係性に基づくバックグラウンドを有さない非地元民は「シベリア文学作品」についての理解度が低いため、共鳴を感じるのが難しく、文学的要素よりも文化やレクリエーションなどにより興味が引かれるようである。

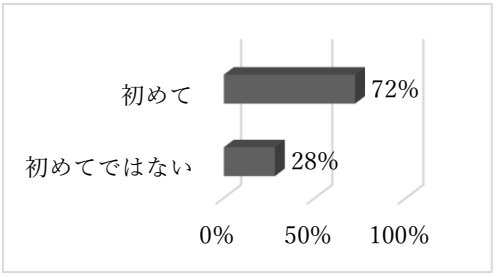


図 3-25. 調査結果 4.（参加頻度）

調査結果 4（参加頻度）：

86 人の回答者のうち 28%の 24 人が「初めてではない」、72%の 62 人が「初めて」ツアーを訪れた（図 3-25.）ことがわかった。

ヴァシリー・フェドロフ科学国立図書館により

[88] アンケート用紙には性別について質問がなかったが、男性名詞と女性名詞の利用で確認できた。

ケメロヴォ州で各文学観光ツアーが 2014 年から行われるようになったことを考慮すれば、地元民の間では再度参加する頻度がかなり高いレベルで見られる。再度参加頻度が最も高いツアーは「サライルスキー・クリャシュの物語」文学観光ツアーであった。平均参加回数は約 1.7 回である。

再度参加頻度が比較的高いことは、文学観光者に「共鳴を呼ぶ」要素が含まれていることに起因していると考える。主催者により作られる文学観光ツアーを通じて、過去に学んだことがある地元のシベリア文学作品及び地元シベリア作家に関する内容と接触することで、「もう一度参加したい」という欲求が起きる。これもまた「郷土とのつながり」すなわちバックグラウンド（調査結果 1.と 3.）があってこその現象であろう。

調査結果 5.（情報源）：

86 人の回答者のうち 7 人（8%）が「ツアーの主催者（図書館)」、26 人（30%）が「友人・知人」、9 人（10%）が「インターネットや SNS など」、2 人（2%）が「不明」、1 人（1%）が「その他の情報源」を通じて文学観光ツアーに情報を得ていた（図 3-26.)。

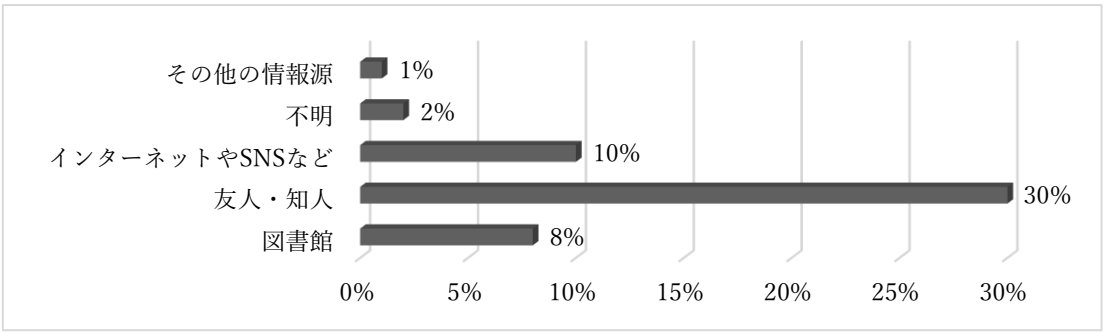


図 3-26. 調査結果 5.（情報源）

集計結果から、文学観光を促進する上で図書館が重要な役割を果たしていると言える。「友人・知人」と答えた回答者の大半は「既に参加したことがある友人・知人」からの情報であると回答している。これらのことから、「図書館」を中心とした情報ネットワークが形成されており、また過去に参加した観光者が友人や家族にツアーの内容を普及する行動をとっていることが窺える。

調査結果 6.（参加理由）：

86 人の回答者のうち、過半数の 51%（44 人）が「興味」、6%（8 人）が「好奇心」、23%（20 人）が「郷土に興味がある」、9%（8 人）が「趣味としての観光」を参加理由に挙げた（図 3-27.）。

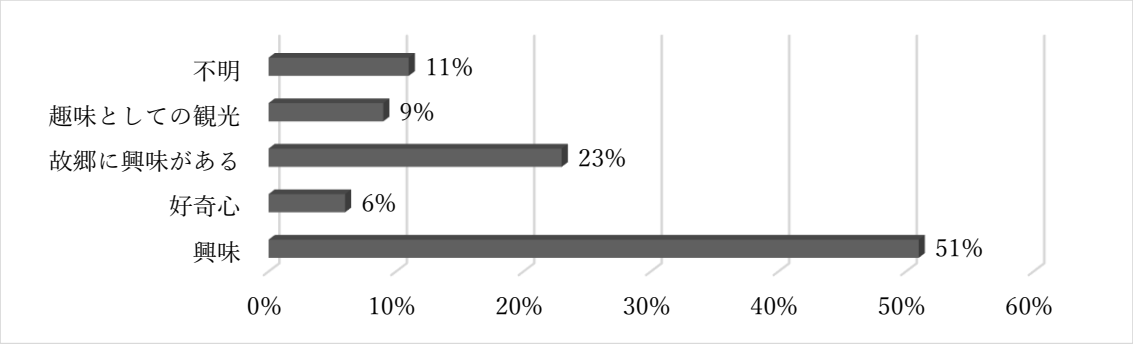


図 3-27. 調査結果 6.（参加理由）

「郷土に興味がある」と答えた回答者（23%）は学校教育課程や図書館通い、自己啓発などにより、地元のシベリア文学に関して一定の知識を持っており、そのようなバックグラウンドを持って意識的にツアーに参加していると思われる。

調査結果 7.（各地元作家について）：

6 つの文学観光ツアーのうち 4 つのツアーについて、「観光者とツアーで扱われる地元作家の関係性」に着目した質問を行った。残りの 2 つのツアーについてこの質問をしなかった理由は、フョードル・ドストエフスキー（5 つ目）と文学的フェスティバル（6 つ目）については中心的なテーマが「地元シベリア作家」ではなく、より広義のシベリア文学世界に関するものに設定されているからである[89]。

7.1 バルザス村：「詩人レオニード・ゲルシドヴィッチと一日」（16 人）：

この文学観光ツアーに参加した回答者の 88%（14 人）が「この作家を知らない」、6%（1 人）が「この作家を知っている」、6 %（1 人）が「不明」と答えた（図 3-28.）。

[89] フョードル・ドストエフスキーは一時期ケメロヴォ州ノヴォクズネツク市に住み、そこで妻とも出会った。

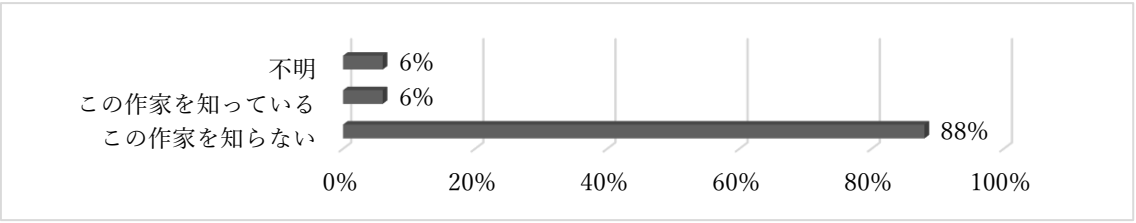


図 3-28. 調査結果 7.1（レオニード・ゲルシドヴィッチの理解度）

7.2 マーリエフカ村：「ヴァシリー・フェドロフに会うためにマーリエフカへ」（25 人）：

この文学観光ツアーに参加した回答者の 56%（14 人）が「この作家を知っている」、40%（10 人）が「この作家を知らない」、4%（1 人）が「不明」と答えた（図 3-29.）。

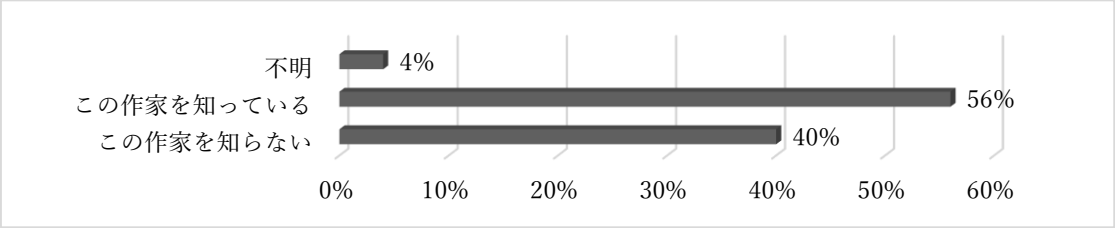


図 3-29. 調査結果 7.2（ヴァシリー・フェドロフの理解度）

7.3 サライル村：「サライルスキー・クリャシュの物語」（16 人）：

この文学観光ツアーに参加した回答者の 50%（8 人）が「この作家を知っている」、50%（8 人）が「この作家を知らない」と答えた（図 3-30.）。

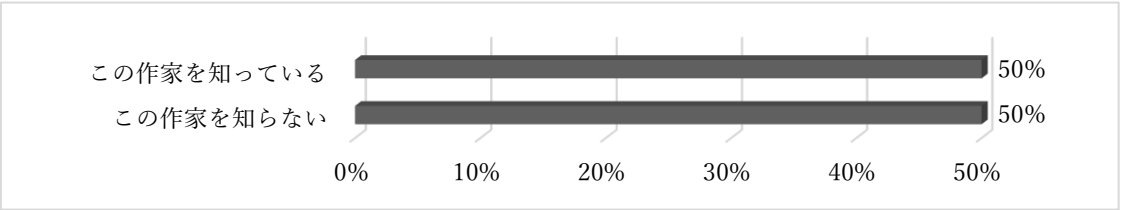


図 3-30. 調査結果 7.3（M.A.ネボガトフの理解度）

7.1, 7.2, 7.3 の結果をまとめると、これらの 3 つの文学観光ツアーに参加した 57 人のうち、「作家を知っている」と答えたのは 36 人（63%）であった。つまり参加者の過半数が地元作家のレオニード・ゲルシドヴィッチ、ヴァシリー・フェドロフ、M.A.ネボガトフを知っており、各作家がシベリアについて故郷的な観点から書いた作品を読んでいる可能性が高

い。これらの作家は地元の学校教育で扱われているからである。この点を踏まえれば、文学観光ツアーにおける「故郷」の概念を認識して参加している可能性があると思われる。

7.4 「ケメロヴォ州で（…）が活躍していたことを知ってどう感じるか」

さらに「ケメロヴォ州で＜レオニード・ゲルシドヴィッチ、ヴァシリー・フェドロフ、M.A.ネボガトフ＞が活躍していたことを知ってどう感じるか」という質問をしてみた。

その結果、バルザス村のツアーの参加者は 75%（12 人）が「誇り」、19%（3 人）が「興味深い事実」、6%（1 人）が「不明」と回答した。マーリエフカ村のツアーで 88%（22 人）が「誇り」、4%（1 人）が「興味深い事実」、4% （1 人） が「不明」、4% （1 人）が「関与していると感じる」と答えた。サライル村のツアーでは 81%（13 人）が「誇り」、13%（2 人）が「興味深い事実」、6%（1 人）が「不明」、と回答した。

3 つのツアー参加者の回答をまとめると、82%（47 人）が「誇り」、11%（6 人）が「興味深い事実」、5%（3 人）が「不明」、2%（1 人）が「関与していると感じる」という結果となった（図 3-31. ）。

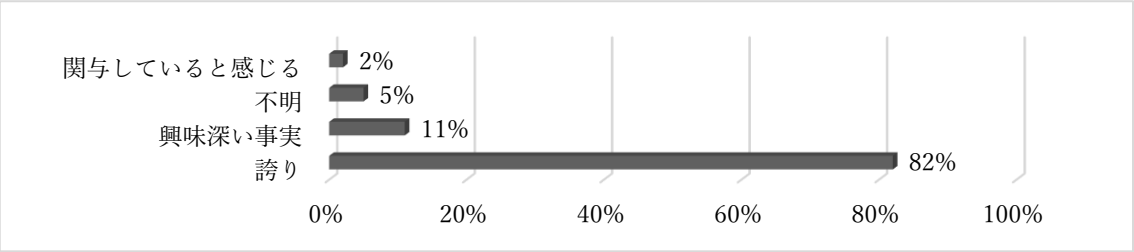


図 3-31. 調査結果 7.4

（「ケメロヴォ州で（…）が活躍していたことを知ってどう感じるか」）

文学観光ツアーに参加する観光者にとって「郷土」のケメロヴォ州で行われるツアーに参加した時に現れた「誇り」の感情は、観光者が自らをその地域の住民として、シベリア人として自己認識しており、「郷土」とのつながりに基づく「郷土への愛情」が存在することを物語っている可能性がある。

Gurney（1997, p. 384）によれば、個人は自分自身とある場所とを結ぶ感情的なプロセスを介して、そこにおけるホームを経験する。つまり「観光者」と「郷土」（シベリア）の関係性における重要な位置を占めているのが「郷土」に対する「好感情」である。「誇り」、「愛

情」、「愛国心」などといった感情は「郷土とのつながり」をより強化し、「観光者と郷土」の相互作用性に拍車をかける要素として受け止められる。このことから、今回のアンケート調査で確認できた文学観光ツアーによる諸好感情は、観光者と郷土であるシベリアとのつながりの強化という主催者の目的の達成を示唆しているのではないかと考える。

調査結果 8.（ツアー開始前及び終了後の気分）：

ツアー開始前及び終了後の気分について尋ねたところ、以下の結果となった。

8.1 ツアー開始前の気分：24%（21 人）が「興味があった」、過半数の 62%（53 人）が「郷土についてもっと知りたかった」、5%（4 人）が「不明」、9%（8 人）が「どちらでもない」、と答えている（図 3-32.）。

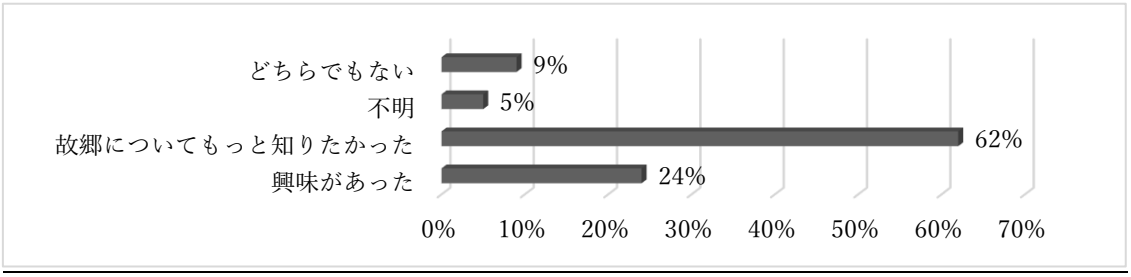


図 3-32. 調査結果 8.1（ツアー開始前の気分）

8.2 ツアー終了後の気分：90%（77 人）が「気分が良くなった」、7%（6 人）が「同じレベル」、3%（3 人）が「不明」と回答した。「気分が悪くなった」は 0%であった（図 3-33.）。

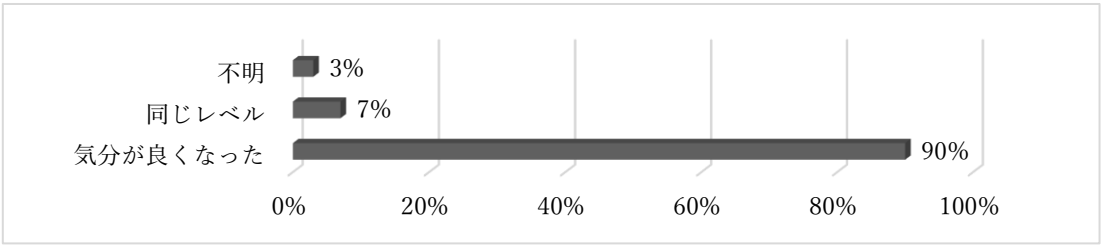


図 3-33. 調査結果 8.2（ツアー終了後の気分）

上記のデータを踏まえると、各文学観光ツアーに盛り込まれた内容は観光者にとって関心が高く、満足のあるものであったと言える。肯定的な感情の割合が高く、また回答者による

「郷土」に対する関心の高さも窺える。文学観光を作るさまざまな意図（経済的効果、プロモーション、ロシア文化省による指示など）がある一方、「観光者」自身によるイニシアティブも存在していると言える。

調査結果 9.（郷土の理解度）：

「郷土の場所へ出かけたりするか」という質問に対し、41%（35 人）が「時々郷土の自然のある場所へ出かけたり、博物館などを訪れたりする」、48%（41 人）が「よく郷土の自然のある場所へ出かけたり、博物館などを訪れたりする」、3%（3 人）が「全く行かない」、8%（7 人）が「不明」、と答えている（図 3-34.）。

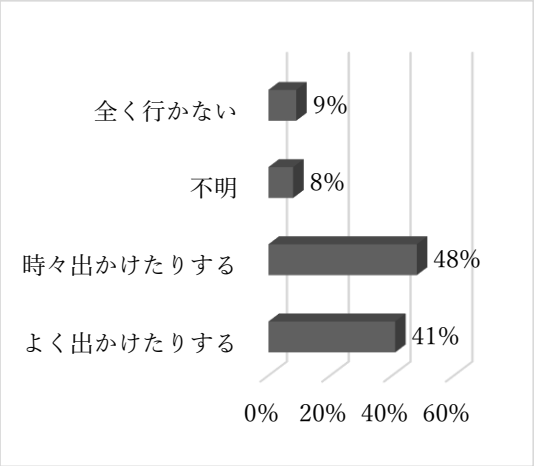


図 3-34. 調査結果 9.（郷土の理解度）

調査結果 8.1 でも 89%の回答者が自分の「郷土」のさまざまな場所を訪れることに積極的であるが、自分の「郷土」についてさらに深く知りたいという願望があることが確認できる。このように、観光者は物理的及び感情的な関係性を持つ「郷土」としてのシベリアとの関係性を重要視していることがわかる。

調査結果 10.（ツアー中の気分）：

ツアー中の気分について尋ねたところ、65%（55 人）が「興味を感じた」、8%（7 人）が「安らぎを感じた」と回答した。「私たちの郷土にもこのような場所がある」、「誇りを感じた」、「ノスタルジーを感じた」は 2%（2 人）であった。また 17%（15 人）が「ポジティブな感情」（喜び、満足、良い状態、素晴らしい状態など）[90]、6%（5 人）が「不明」と答えた（図 3-35.）。

[90] 具体的な回答をまとめて「ポジティブな感情」とする。

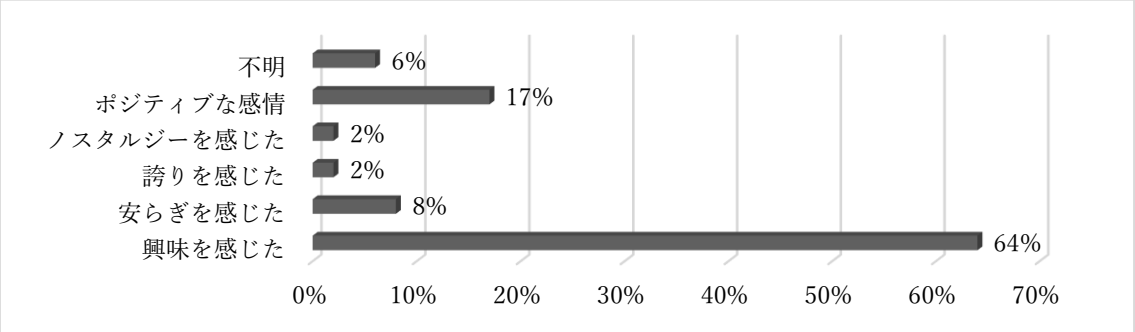


図 3-35. 調査結果 10.1（ツアー中の気分）

「安らぎを感じる」または「ノスタルジーを感じる」という回答は、観光者に郷土を感じさせるような要素が文学観光ツアーに含まれていることを示している。つまり、「郷土」という概念を中心とした地元の文学作品や作家に関する内容がツアーで使われていれば、その内容との相互作用により観光者のシベリア地域アイデンティティに影響が与えられうる。

調査結果 11.「文学観光が行われる場所の印象」：

ツアー中の気分と同時に、文学観光ツアーが行われる場所の印象について「観光地はあなたの郷土に似ているか」と口頭で直接尋ねてみた。その結果、86 人の回答者のうち 44%（38 人）が「シベリアにおける他の場所に似ている」（シベリアの自然、シベリアの雰囲気など）[91]、40%（8 人）が「私の郷土と似ている」、40%（16%）が「不明」と答えた（図 3-36.）。

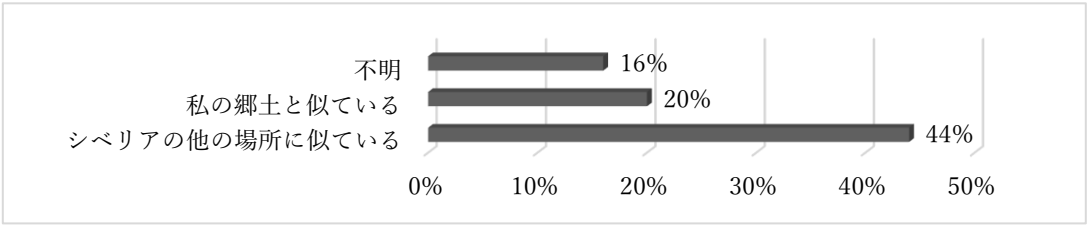


図 3-36. 調査結果 11.（場所の印象）

調査結果 11.から、ケメロヴォ州で行われる文学観光ツアーに参加した観光者はツアー中に「郷土」を思い出させる要素と接触することがわかる。シベリア文学観光ツアーの主催者はケメロヴォ州で生まれ、暮らし、活動したシベリア作家を中心としたツアーを企画する。ツアーで扱う作家は自身の「郷土」に関する記述を行っていたため、基本的にツアーの内容

[91] 具体的な回答をまとめて「シベリアにおける他の場所と似ている」とする。

も彼らの郷土に関連した要素を含む。ツアーの内容は文学作品に描かれた空間に限定されていると言えるのである。それにもかかわらず、調査結果 10. と 11. では、文学観光ツアーに参加した観光者は、ツアーが行われた場所が自分の郷土に似ていると感じていた。さらに、郷土という感覚はケメロヴォ州の地元民だけではなく、他の非地元民にも見られた。このように、「故郷」の概念に焦点を当てたシベリア文学作品やその作品を書いた作家を扱う文学観光ツアーは、「郷土」の感覚を呼び起こさせるように主催者が構築した特別な空間であると言える。これは観光者の郷土への想起の活性化、すなわち観光者のシベリア地域アイデンティティの強化に貢献しうるものである。ツアーに参加する観光者の郷土に関する思い出を内省するようなプロセスが出現するからである。

調査結果 12.（今後の参加）：

今後の参加の意思について尋ねたところ、回答者の 78%（67 人）が「もう一度参加したい」、8%（7 人）が「もう参加したくない」、14%（12 人）が「わからない」と答えた。

「もう一度参加したい」という回答が大多数を占めていることは、文学観光ツアーに「郷土とのつながり」に着目した「共鳴を呼ぶ」要素が存在しているため、「知っているからこそもう一度楽しめる」空間との接触を求める欲求の表れと考えられる。

調査結果 13.（地元シベリア文学の理解度）：

「地元シベリア文学を読んだことがあるか」という質問に対し、回答者の 77%（66 人）が「読んだことがある」、14%（12 人）が「読んだことがない」、9%（8 人）が「不明」と答えている（図 3-37.）。

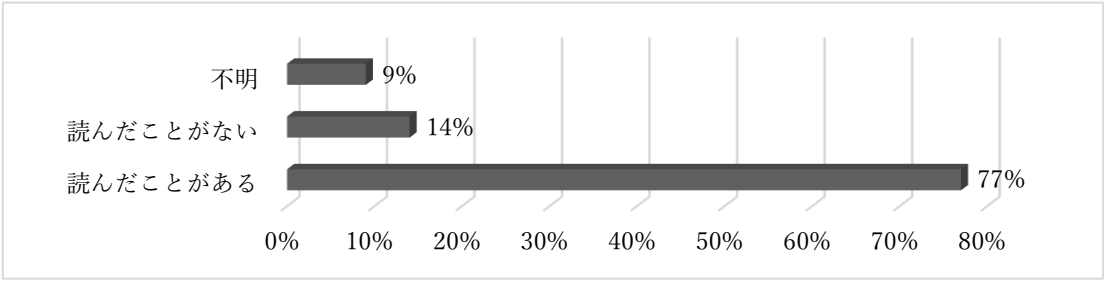


図 3-37. 調査結果 13.（地元シベリア文学の理解度）

調査結果 13. から、シベリア・ケメロヴォ州の文学観光ツアーに参加した観光者の大多

数が、ツアーで使用されるシベリア作家及びその文学作品についてツアー参加前から知っていたことが明らかになった。観光者は文学観光ツアーに参加する前からツアーの「故郷」の概念に関連する文学的側面に関する知識を持っているのである。例えば観光者はケメロヴォ州の学校教育プログラムの一環として、地元シベリア文学に関する知識をすでに得ている可能性がある。観光者のバックグラウンドに地元シベリア文学世界に関する知識があることは、観光者がツアーに含まれる内容を身近で馴染みのあるものとして認識できるようになる、いわば共鳴を感じさせるための土台となりうる。さらに地元シベリア作家に関する知識はシベリアの文化生活の特徴の 1 つであるため、シベリア地域アイデンティティの一部であると言える。これらを考慮すれば、文学観光ツアー中に発生しうる共鳴はシベリア地域アイデンティティの一部の再認識、すなわちシベリア地域アイデンティティの強化と認識することができる。

3.3.5　ケメロヴォ州文学観光者を対象にしたアンケート調査のまとめ

ケメロヴォ州で開催される文学観光ツアーに参加した観光者を対象に行ったアンケート調査のデータをまとめてみよう。前節で述べたように、主催者は「農村文学」と「エコロジー文学」という 2 つの文学的傾向の枠組みの中で「故郷」という概念がシベリア作家により積極的に用いられるようになる 20 世紀後半シベリア文学（ここではケメロヴォ州）の作家及びその作品を文学観光ツアーの基盤とする。アンケート調査で獲得できたデータによれば、ケメロヴォ州で行われる文学観光ツアーに参加した観光者の大半は、ツアーで扱われる作家及びその文学作品について既に知識を持っていることが明らかになった。このような地元（ケメロヴォ州）のシベリア文学に関する理解は、観光者の 80%以上が「農村文学」や「エコロジー文学」が盛んになり学校の教育課程に積極的に導入されるようになる 1960～1990 年に生まれていることに起因する。つまり観光者は、文学観光ツアーに盛り込まれる内容に関する一定のバックグラウンドを持っている人々である。さらに、20 世紀後半のシベリア文学は現在でも学校で扱われているため、若い世代も同様に地元のシベリア文学を中心としたバックグラウンドの一部を構築していると考えられる。以上を踏まえれば、シベリア文学観光ツアーの観光者は、主にシベリア地域アイデンティティの一部を形成するシベリア文学に関連するバックグラウンドを持つ人である。主催団体がこのような人々をターゲットにツアーの内容を企画しているとすれば、文学観光ツアーは地元シベリア文学に関する一定の知識がある対象者に向けて意図的に作られる社会的実践であると言える。

また、今回のアンケート調査における重要な点は「故郷」という感覚である。ツアーに参加した 86 人のうち 20%が「ツアーが行われた場所が自分の郷土に似ている」と答えている。また 44%が「ツアーの場所がシベリアの他の場所に似ている」と答えている。80%以上がシベリアの一部であるケメロヴォ州の出身者であることを考えると、ツアー参加者の半数以上が、自分たちの郷土（シベリア）に似た要素の存在を指摘していることになる。これは文学観光の各ツアーの内容が、自分の郷土について考えさせる共鳴（感情的反応）を呼び起こす要素を含む可能性があることを示唆している。例えばアンケートへの回答では、「誇り」、「懐かしさ」、「安らぎ」という感情的な反応が示された。このような感情的な反応は、観光者の郷土（シベリア全体またはシベリアの町や村など）に関連する感情や記憶などの更新を示すと仮定することができるだろう。ここで言う更新とは、観光者の個人的な体験に基づく記憶や感情などの呼び覚ましである。ケメロヴォ州で行われる文学観光の場合、このような個人的な体験とは、例えば学生時代に地元のシベリア作家の作品を読むことである。すなわち、文学観光ツアーの内容は郷土（シベリア）との精神的なつながりに関連する思い出または感情的な反応の出現に寄与していると言える。このように、シベリアにおける文学観光はノスタルジーを呼び起こす記憶に目を向けさせることにより、観光者のシベリア地域アイデンティティに影響を与える社会的実践として認識される可能性があると言える。

3.4 小括

第 3 章では、シベリア地域で文学観光ツアーを行う主催者を対象にしたインタビュー調査と、ツアーに参加した観光者を対象にしたアンケート調査により獲得されたデータを基にシベリア文学観光を分析した。また、ケメロヴォ州で実施された文学観光ツアー「サライルスキー・クスリャシュの物語」への参加を通じて、シベリア文学観光ツアーの全体的なコンセプト及びその雰囲気を示した。

文学観光ツアーの主催者によれば、国家機関を通じた文学観光はロシア連邦文化省の『自治体郷土史博物館の活動に関するモデル基準に基づく自治体博物館の近代化のための方法論的提言』を中心に行われており、郷土とのつながりの強化、地域アイデンティティの強化などに貢献する社会文化的実践に取り組むという決議と関連していることが明らかになった。言い換えれば、アルタイ共和国、ケメロヴォ州、イルクーツク州、クラスノヤルスク地方のシベリアの 4 地域で行われる文学観光は、地域の文学的文化空間に関わる国家機関に

よって実施されており、地域住民を対象とした文化実践を促進するための国家プログラムの一部であると言える。

この種の国家プログラムでは、主催者は観光者のシベリア地域アイデンティティに影響を与えることが可能な観光実践を企画することが目的とされている。本論文でインタビュー調査を行ったシベリアの 4 地域の主催者は、観光者の個人的な過去の体験と共鳴できるようなテーマに焦点を当てる。一般的にシベリア文学はシベリアの文化空間の特徴の一つであると考えられている。中でもシベリアの文学観光の主催者は、20 世紀後半シベリア文学の「故郷」という概念が見える「農村文学」や「エコロジー文学」の文学的潮流の枠組みの中で書かれた作品に注目している。戦後、シベリアの作家は「故郷」で現れる問題（例えば伝統的な農村生活様式の消滅や自然破壊など）に注意を向けようとした。20 世紀後半のシベリア文学は「故郷」とのつながりに注目する形を取るようになるのである。このような 20 世紀後半のシベリア文学の作家とその文学作品は、1960 年代後半から学校の教育課程に積極的に導入され始める。そして今日に至るまでシベリアのどの地域でも学校の授業に取り入れられており、その結果、地域住民の間に十分に浸透した。インタビュー調査の回答によると、ツアー主催者は 20 世紀後半のシベリアの作家の文学作品の内容[92]やその浸透の程度を把握している。4 人の主催者全員が、ツアーが開催される地域で生まれたシベリア作家及びその文学作品に関する情報を利用しており、シベリア作家の人生、作品、育った場所、育った雰囲気などが理解できる体験を提供する。ツアー主催者の立場からすれば、ツアー対象地域と深い関わりを持っていて、作品の中で故郷を描き、ツアー対象地域にとって重要な人物であり、学校のカリキュラムで使用され、多くの地域住民に親しまれている作家を中心テーマとした文学観光を実施することで、観光者自身の学校時代に遡るバックグラウンドゆえの過去の体験の認識や自身の郷土であるシベリアに対するより深い理解（郷土の重要な歴史的場所や重要な歴史的・文化的遺産の理解）、最終的にはシベリア地域アイデンティティの強化に貢献することが可能である。地元のシベリアの文学的側面は、シベリア地域アイデンティティを形成するシベリアの文化空間と不可分的な関係性にあるからである。

一方、ケメロヴォ州において行われる文学観光ツアーに参加した観光者を対象に実施したアンケート調査を分析したところ、観光者のほとんどが地元民であることがわかった。このことは、地域的なデータを含むシベリアの文学観光ツアーが、主に地元民を惹きつけている

[92] 付録 A-E を参照。

ことを示唆している。アンケート調査の回答によると、ツアー参加者の大半は、文学ツアーで中心的なテーマとして使われる地元のシベリア作家について一定の知識があった。つまり、文学観光ツアー中に生じる観光者のバックグラウンド及び彼らの過去の個人的な経験とのつながりが窺えた。また、文学観光ツアー中に観光者が訪れた場所が、彼らの郷土を思い出させるという回答もあった。これは観光者の感情的な反応の存在を示唆しているのである。このように、アンケート調査の回答から、文学観光ツアーは過去の経験に対する共鳴の出現、感情的反応の出現、また郷土であるシベリア地域（今回はケメロヴォ州）の文学に関連する文化空間に対するより深い理解の出現に貢献することができると言える。

第 4 章　シベリア文学観光によるシベリア地域アイデンティティの強化に関するまとめ

4.1　本章の目的

第 3 章では、シベリアで文学観光を行う主催者を対象にしたインタビュー調査と、文学観光ツアーに参加した観光者を対象にしたアンケート調査により獲得できたデータを基にシベリア文学観光を分析した。これにより、主催者側から見ると、ロシア省の方針によって決定されるイデオロギー的要因があることがわかった。これはシベリア文学観光活動のコンセプト的規制を示唆しており、シベリア各地域における地元住民の「地域アイデンティティの強化」に焦点を当てたものである。一方、インタビュー調査により得たデータからは、地元住民である観光者は自身の郷土であるシベリア地域で行われる文学観光ツアーへの参加を通じ、「郷土」の感覚に関連する感情的反応が引き起こされる要素を窺うことができた。それは例えば、ノスタルジーや郷土に対する誇りなどである。このような感情的反応は、回答者のほとんどがツアー開催地の地元住民であることから、地元のシベリア作家に関する文学教育課程による知識及び文学ツアーが開催される場所での生活経験といったバックグラウンドの存在に起因すると考えられる。このように、観光者の郷土の感覚に直結する感情を呼び起こすことを可能にする文学観光実践を通じて、地域アイデンティティが強化される可能性を示す要素が特定された。シベリア文学観光の場合はシベリア地域アイデンティティの強化である。

さらに第 3 章では、文学観光ツアーが実施される空間についても分析した。分析により、ケメロヴォ州で行われる文学観光に代表されるように、文学観光ツアーには二重構造があることが明らかになった。すなわち、ツアーには決められたルートと内容が反復的に観光者に提供される一方で、観光ルートに沿った場所では観光者は厳密にガイドされないため、内省の対象を選択する行動の自由が与えられ、より情緒豊かな観光空間が形成されるのである。この点を分析する中で観光プロセスの身体化の重要性が指摘された。第 3 章にも述べたように、観光者による感情的反応が引き起こされる対象の探索、また比較的自由な観光空間の中での自己認識プロセスへの影響が出現する自発性という点を考慮すれば、身体は重要である。

第 4 章では、シベリア文学観光の身体化の側面をさらに発展させていく。ただし、それはもはや内省の対象を見つけるための道具という観点からではない。本章では、文学作品を読むこととは対照的に、身体化を内包する地域アイデンティティに影響を与える実践として

の文学観光における身体化そのものの重要性と利点を検討する。すなわち、シベリア地域アイデンティティを形成するシベリアの文化空間の要素に近づくものであるならば、文学観光にはどのような利点及び特徴があるのかという点である。また、この分析に続き本論文全体の論理的な結論に導く試みとして、第 4 章では全章を通して得られた各結論に基づき、シベリアの各地域で行われる文学観光ツアーの実施を通じてシベリア地域アイデンティティを強化することについても述べていく。すなわち、シベリアの各地域と個別にではなく、シベリアのようなマクロな地域とのつながりが強化されるという文学観光実践の特徴に言及する。この議論は、シベリア地域アイデンティティに影響を与えるシベリア文学観光の重要性と展望についての問いに答え、論文を締めくくることを目的とする。

4.2　シベリア地域アイデンティティを形成する拡散したシベリアの各地域における要素の実体

第 3 章で述べたように、近年文学観光はいくつかのシベリア地域で実施されており、例としてアルタイ共和国、ケメロヴォ州、イルクーツク州、クラスノヤルスク地方が挙げられる。この 4 地域で文学観光ツアーを行う主催者を対象にしたインタビューへの回答からは、観光ツアーの目的及びその内容が決定される規制があることがわかった。ツアーの規制において主要な役割を担う主なアクターの 1 つは、ロシア連邦文化省であることが明らかになった。ロシア連邦文化省は「自治体郷土史博物館の活動に関するモデル基準に基づく、自治体博物館の近代化のための方法論的提言」（2020 年度）を出し、4 地域で文化活動を行う 4 つの国立機関による文化活動の実施方針を定めている。従って、各団体が実施する実践の中で追求される目的は、文化省による方法論的提言によって決定されるのである。シベリアの各地域で行ったインタビュー調査への回答から、文学観光ツアーを主催する 4 つの国立団体全てが「地域アイデンティティの強化」を文学観光の主な目的の 1 つとしていることがわかる。「地域アイデンティティの強化」を達成できる実践として文学観光が選ばれ、またその内容には各地域出身の著名なシベリア作家とその作品に関する包括的な情報が盛り込まれることになった。例えば、アルタイ共和国ではワシーリー・シュクシン、ケメロヴォ州では M.A.ネボガトフ、ワシーリー・フェドロフ、ウラジーミル・チビリキン、レオニード・ゲルジドヴィチなど、イルクーツク州ではヴァレンティン・ラスプーチン、クラスノヤルスク地方ではビクター・アスタフィエフが選ばれた。それぞれの作家は、出身地だけではなくシベリア全体でも著名であり、シベリアの文化空間に含まれている。つまり、シベリアの各地

域に生まれた地元の作家及びその作品はシベリア地域との精神的なつながりに基づく、地元民の自己認識プロセスに直結している要素を成すのである。シベリア地元民の自己認識プロセスへの直接的な関係性を裏付けるものとしては、シベリアの各地域の学校で地元作家が扱われていることが挙げられる。子どもの重要な成長段階である学校で地元の著名な作家を学ぶことは、自身の郷土であるシベリア地域の文化空間の一部に地元の作家に関する情報が含まれ、地元民のバックグラウンドが作り出されるプロセスの存在を示している。このようなバックグラウンドの存在は、本研究で実施した文学観光ツアーへの参加者を対象にしたアンケート調査の回答からも明らかになった。ツアーに参加した観光者の 79%が地元民であり、地元の著名な作家に関する理解度が高いレベルにあった。

ここで興味深いのは、文学観光ツアーの主催者もツアーに参加する観光者も、地域アイデンティティを特定のシベリア地域ではなく、シベリア全体と関連付けていることである。例えばアルタイ共和国で文学観光ツアーでの主催に関わる B によれば、「シベリア文学の三角形」というプロジェクトは、シベリアで実施されている文学プログラムを統合することが目的とされている。つまりシベリアにおける文学的文化空間は、統一された全体として認識されているのである。また観光者はシベリアの各地の作家を、例えば「アルタイ共和国の作家」や「イルクーツク州の作家」ではなく「シベリア作家」として認識する傾向がある。もちろん作家と地元地域との連想を否定するものではなく、「ケメロヴォ州の作家」や「アルタイ地方の作家」といった連想は存在している。しかし多くの場合、各地域の作家はシベリア全体の文化空間に属しているとみなされ、「シベリア作家」と呼ばれる。シベリアの各地域の地元民から見ても、全ロシアの文学的文化空間から見ても、上記のような作家はシベリアの文化的文学空間の形成に貢献し「シベリア文学」を創造した人々である。従って、彼らはシベリア文化空間の特徴の 1 つである文学的側面に関わり、シベリア地域アイデンティティの一部を形成しているのである。

このような、自分が生まれた「小さな地域」を通したシベリアというマクロな地域と自分との相関関係は、付録 A〜E で分析・付記したシベリア作家の文学作品にも窺うことができた。例えばヴァレンティン・ラスプーチンの作品『マティオラへの別れ』（1976 年）では、上流に水力発電所が建設され、水没することになったマティオラ島の住民たちのドラマが描かれている。作家は、生まれ育った村が失われること、つまり故郷が失われることの感情的な側面を、詳細に色彩豊かに描写している。ラスプーチンはマティオラ島を集合的なイメージとして使っている。作家自身、水没という同じ運命をたどった同州のアタランカ村で生

まれた。イルクーツク州だけではなくシベリアの他の地域でも 20 世紀後半、シベリアの活発な産業拡大による水力発電所の建設で洪水が相次いだ。そのため作家はマティオラ島という集合的なイメージを用いて、作家の故郷ではないアンガラ川のマティオラ村の状況を例に、水没で村が消滅することによる文化的伝統の喪失というシベリア全体に存在した問題を取り上げようとした。

ビクター・アスタフィエフの作品集『魚の王様』(1976 年) の中の「ボイエ」は、主人公が故郷のイガルカ町に戻る物語が描かれている。父親との関係がうまくいっていないことによる精神的苦痛が描かれるほか、20 世紀後半にクラスノヤルスク地方の北部で繰り広げられた自然に対する行き過ぎた消費主義的な態度の問題が提起されている。ヴァレンティン・ラスプーチンの場合と同様、アスタフィエフは「ボイエ」で、シベリアの森林伐採と動物相の絶滅というシベリアの先住民にとって根源的な問題に読者の注意を喚起している。北方民族は定住ではなく遊牧であり、ある地域から別の地域へと移動する。そのため、シベリアの各地域における森と動物の量は重要である。すなわち森林伐採または行き過ぎた狩猟は先住民族に関して多くの問題をもたらしうる。つまりアスタフィエフは、故郷であるクラスノヤルスク地方の問題を指摘することで、20 世紀後半におけるシベリア北部全体の特徴的な問題を表現しているとも言える。

ウラジーミル・チビリキンの『騒げ、タイガ、騒げ！』(1962) 及びワシーリー・フェドロフの『マーリエフカ・クロニクル』(2016) という詩集の詩を見てみると、シベリア杉の伐採という問題の提起が窺える。チビリキンは『騒げ、タイガ、騒げ！』の中で、実話に基づいてシベリア林業ケドログラードの創設の物語を描いている。チビリキンが描いた実話はアルタイで起こったが、チビリキンの出身地はケメロヴォ州である。シベリアの森林伐採の問題はシベリア全体の問題であり、多くの作家によって提起されてきた。例えばワシーリー・フェドロフはその詩『杉の板』の中で、杉の伐採に関する問題を提起していないにもかかわらず、シベリア杉の重要性を指摘し、この木への愛と敬意を表現している。杉は他のシベリアの木々と同様にシベリアの宝であり、他の地域とは異なる特殊性を持つシベリアのタイガの一部を形成している。このように多くのシベリア作家が、シベリアの森を守るという問題を、村の水没や狩猟の乱用といった問題と共にシベリア全体の問題として取り上げている。この問題もシベリアを統一するテーマであると言えるのである。また、ヴァシリー・シュクシンは人間を中心とした物語の巨匠と呼ばれている。彼はシベリアの森林やその適切な自然管理の問題を提起しなかった。ところがシュクシンの作品の中で特別な位置を占

めていたのは「シベリアの村」で、自身の故郷であるアルタイ共和国を通じてシベリア全体の伝統と農村の伝統的な生活様式の保護を訴えていた。

まとめると、シベリア作家と認識される作家の文学作品分析で得られた結果に基づいて言えることは、それぞれの作家が自身の生まれ故郷であるシベリアの特定の地域だけではなく、シベリアの他の地域でもみられた問題を描いていることである。このような事実は、上記の作家がシベリア作家とされ、「農村文学」や「エコロジー文学」というジャンルで書かれた作品が 20 世紀後半シベリア文学の代表作とされることの所以でもある。それぞれの作家の故郷であるシベリア地域で起こった農村の問題あるいはエコロジーや自然管理に関する問題を描いた作品は他のシベリア地域でも同様に起こりうるものであり、シベリア作家によるシベリア全体に関するイメージ、または一般化された故郷としてのシベリアのイメージの形成に貢献したと言える。従って、地元のシベリア作家に関する内容及びその文学作品に関する内容を利用することで、主催者は「観光者が生まれた地域」と「観光者」の関係だけでなく、「シベリア」と「観光者」の関係に影響を与えることのできる観光文化空間を形成することが可能である。前述のように、地元民である観光者は地元の著名なシベリア作家についての予備知識、いわばバックグラウンドを持っているため、すべてのシベリア住民を結びつけるシベリアに関する一般化された諸イメージと接触する。観光者はシベリア人の自己認識プロセスに影響を与える要因が出現する環境に入り込んでいくとも言えるだろう。

4.3　シベリア地域アイデンティティの強化における身体化としてのシベリア文学観光

上記にも述べたように、文学作品における一般化されたイメージの理解はシベリア地域アイデンティティの形成に貢献する。地域住民はシベリア作家により創作された文学作品を通じて、タイガ、シベリアのツンドラ、バイカル湖などシベリアの特徴的な自然や 1950 年以降の産業拡大に対する批判、20 世紀初頭のシベリア地域主義運動などシベリアにおける歴史的出来事、ロシア系シベリア人またはシベリア全土に住むシベリア先住民族の生活様式などに触れる。学校の文学の授業で地元のシベリア作家及びその文学作品を学ぶことで、成長段階の子どもたちはシベリア全体の特徴と、かつて存在した、あるいは現在存在する問題に精通するようになる。このように、シベリア作家によって描かれたシベリアの一般化されたイメージは、教育プログラムの枠組みの中でシベリアのさまざまな地域の住民に親しまれるようになり、感情的な体験を与えると言える。従って、文学作品がシベリアの各地域と

シベリア全体の文化空間との接点を持つならば、地元のシベリア作家の文学作品は地元民のシベリア地域アイデンティティの一部を成すことになると言える。それゆえ「地域アイデンティティの強化」という目標設定の観点から、シベリア文学観光での地元のシベリア作家及びその作品に関する情報は、地元民である観光者のシベリア全体に関わる自己認識プロセスの維持に影響を与えることが可能である。

地域アイデンティティの強化に貢献する可能性のある実践として、シベリア文学観光の重要な側面は身体化である。本論文における「身体化」とは、抽象的理念や概念がツアー中の身体的感覚を伴う経験を通して参加者の精神に強化、定着されるプロセスを言う。例えば、感覚的経験を喚起するツアー対象物（写真、訪問地、ツアー中に擦れ違う地元の人、彫像など）が多ければ多いほど、ツアーに込められた理念やイデオロギーが観光者の精神に浸透していくと考えられる。こうした身体的、感覚的経験はまた、地域に暮らす観光者の過去の経験とも共鳴し、感情的反応を引き起こす。このように、具体的な事物にもたらされる感覚的経験は、感情的反応を出現させる契機ともなる。また、ツアー中行動の自由度が高ければ、観光者はより自発的にそうした身体的経験を実践することになり、その結果として過去の記憶との感情的なつながりもより主体的になされることになる。

第 3 章ではケメロヴォ州を例に、文学観光が行われる観光空間の特徴に基づき、文学観光が二重構造を持っていると述べた。すなわち、観光ツアーの目的やコンセプトの選択という点ではロシア連邦文化省への従属及び確定されたルートという規制が存在している。一方、観光者の行動という点で言えばシベリア文学観光ツアーは比較的に自由を持っている。観光者には、ルートにおける各地点で自由に歩き、探検する権利が与えられているのである。観光地はフェンスで囲まれているわけではなく、他の地元の人々が日常的に交流する場所にある。つまり観光者の身体はガイドやデコレーションなどが指す方向に従って厳密に動くわけではない。従って Edensor（2000）の用語を使えば、ツアー内での観光者の「パフォーマンス」は、決まったレパートリーを持つ通常の「ローカル・バレエ」（Seamon, 1979）を彷彿とさせるような、規則的でルーティン化された空間のパターンを表すものではない。即興的なパフォーマンスのレベルが高いシベリア文学観光ツアーもそうである。例えば美術館のように、観光者が設計されたルートに沿って一方向的なダンスを披露するのとは異なる。美術館は展示ケースや案内板、フロアプランなどの配置によって、観光者が決まった散策プログラムに従うよう促し、そこでは観光者がどんな傾向も厳格で一貫した方向へと向けられる（Bennett, 1995, p. 186）。もちろん、前述の「サライルスキー・クスリシュの物語」ツアーで

は、図書館でのプレゼンテーションの上映のほか、シャンダ村の野外博物館を訪れてガイドが簡単な案内をするという旅程になっていることから、観光者が特定の方向へ向けられるのではないかとの異論が生じるかもしれない。しかし前にも述べたように、これは制限された規制である。プレゼンテーションの準備が行われている間に図書館を回りながら、図書館の文学作品史や文学観光ツアーのテーマとなっている M.A.ネボガトフに関連する展示を自由に見ることができる。シャンダ村の野外博物館についてはガイドが主な展示物を案内するが、その後、観光者は自身で他の展示物を見学したり、野外博物館の外に出て近隣やシャンダ村そのものを散策したりできる。つまり、シベリア文学観光ツアーは多面的であり、身体を生かし定まったコンセプトの中で内省の対象を自由に選ぶという任意の行動による感情的反応が発生しうるプラットフォーム、いわば「舞台」を提供するものなのである。

シベリア文学観光の重要な側面はツアーの身体化である。観光者は体を生かし移動し、比較的な自由な行動ができる空間で内省の対象を選んでから、その対象が過去の体験に関係性がある場合、観光者の過去の記憶に感情的な反応が呼び起こされることが可能である。ここでは文学観光ツアー中に感情の幅を得る可能性のレベルや、地元のシベリア作家やその文学作品に関する情報だけではなく、文学観光ツアーが企画された地域の地元民や非地元民といった場所の環境も含む、ツアーの内容との心理的な親和性のレベルが重要である。第 3 章で述べたように、シベリア文学観光ツアーは空間における行動の相対的自由を提供し、さらにルート上の観光地がその場所に住む人々の日常生活空間と絡み合っていることを考えると、観光者にとって多様な感情的反応が出現する可能性について語ることができよう。Edensor (2000, p. 340) によれば、厳しく規制されたツアーでは感覚的な刺激が最小限に抑えられ、観光者の身体をなだめ、順応を促し、特異なパフォーマンスの機会を減らす。言い換えれば感情の幅や主体性の可能性が制限されるのだ。しかし混交的（heterogeneous）な空間では、観光者はより鮮明で多様な感覚体験をする可能性が高い。シベリア文学観光ツアーでは行動の自由度が比較的高いため、観光者はツアー全体を身体化することでさまざまな感情を得ることができる。これは、ツアー対象物に対する観光者の内省、ツアー時の天候、ツアー参加時の他の観光者の個人的資質、ツアー中に偶然知り合った人々の個人的資質などに左右される。このような感覚的な猛攻撃は、さまざまな感覚体験を身体で認識することに貢献する。混交的な空間を通過することは、さまざまな行為、感覚、光景を経験することによって特徴づけられる（同上, 2000, p. 340）。ここでは、観光地の混交的（heterogeneous）な空間や孤立的(enclavic)な空間といった側面に言及する場合、「シベリア文学観光」とは何か

を明らかにする必要がある。Edensor（同上, 2000, p. 328）によれば、孤立的な空間の最も重要な特徴の一つは、どのような活動が可能で、誰が入場できるかを規定する明確な境界が常に維持されていることである。言い換えれば、観光者の行動が厳しく規制される空間である。この観点から考えれば、シベリア文学観光はロシア文化省による提言を考慮するという点にも、ツアー主催者により作られた観光ツアーのルートやその内容などが使われるという点にも規制的な要素が窺えると否めない。このように、『自治体郷土史博物館の活動に関するモデル基準に基づく、自治体博物館の近代化のための方法論的提言』（2020 年度）を考慮し、観光活動を含め、博物館、文学館などの郷土博物館による活動は、地域との関係性を強化したり郷土における問題に関心を向けさせたり郷土への愛を育てたりすることを目指す必要があるというのである。これは行政機関との直接なつながりの中で現れるコンセプト的な規制の存在を示唆している。またシベリア観光ツアーの主催者は特定のルートを作り、地元文学及び地元の作家に関連する内容を選抜しツアー中に利用することで、観光者に対し指示を出し行動をある程度調整・規制することが可能である。このような点はシベリア文学観光における孤立的な要素が存在することを示している。一方、シベリア文学観光ツアー中に観光者個々人の感情や観光者の過去に遡る郷土での経験に関わる記憶が文学作品やそれに関する展示を通して喚起されることにより、定式的であるはずの観光空間の実践には観光者の個性的な、即興的なパフォーマンスが入り込んでくる余地がある。例えば、観光者はツアー中に観察・内省の対象を選ぶことで、過去の経験を思い出させる感情を体験することが可能である。そうした意味においてシベリア文学観光は混交的観光空間に特徴的な要素も持っていると言える。そう言った点を踏まえればシベリア文学観光は混交的及び孤立的な要素を併せ持つ両義的な観光のタイプであるのではないかと考える。さらに、シベリア文学観光の混交的な側面があるからこそ、観光者の過去の体験に関連した多様な感情の幅を得る可能性を語ることができるのである。

シベリア文学観光ツアーにおける多様な感情体験の豊かな可能性に加えて、身近なものに対する感情的反応の要因も考慮する必要がある。前述したように、シベリア文学観光ツアーに参加する観光者の大半は地元民であることがアンケート調査への回答により明らかになっている。地元民であれば、学校や生活圏でシベリア作家とのつながりを持つバックグラウンドが形成されている可能性が高い。シベリア文学観光ツアーが行われる地域とのつながりを持つ観光者は、ツアーで地元のシベリア作家、彼らの生き方、彼らが生きた環境などといった、観光者にとっての郷土でもある地域のシベリア作家に関する諸情報に接触すること

で、過去の感情が更新される経験を得ることができる。また、観光者のほとんどが地元民であるため、地元のシベリア作家の文学作品の中で表現され、描写されている一般化されたシベリアに関連する諸イメージについて知識を持っている可能性がある。このためシベリア文学観光は、同じようなバックグラウンドを持つ観光者の集合的記憶の喚起に貢献できる、現実的な実践であるとも言えるだろう。シベリアの自然、シベリアでの生活、シベリア作家など、同じ文化的背景を持つ観光者は、地元民に焦点を当てて作られた文学観光実践に参加するとき、例えば故郷の水力発電所の建設によって村が失われたことを描写するヴァレンティン・ラスプーチンを読むような、過去の感情的経験への「回帰」効果を経験しうる。すなわち、過去の感情的経験に関連した記憶の喚起がありうる。このような喚起は観光ルート上のさまざまな場所で確認できる。例えば、戦時中の写真を見て母親を思い出した女性の例が挙げられる。

以上のことから、シベリア文学観光のメリットは、単に地元のシベリア作家の文学作品を読むよりも、観光者の郷土に直結するバックグラウンドに積極的に関わり、地域アイデンティティに影響を与えることができる実践であるという点であると言える。また、ツアー中に豊かな感情的体験をする可能性があり、それが能動的な身体化及び感情的体験により喚起された記憶のより良い維持に貢献することができる。ただし、シベリア文学観光ツアーへの参加という身体化を通じた集合的記憶の喚起効果は、地元民の観光者であること、すなわちシベリア地域を中心に形成されるバックグラウンドを持っていることが条件となる。つまりシベリア文学観光は、ツアーで扱われるシベリア作家の故郷であるシベリアの各地域の描写を通じて、シベリア全体の一般化されたイメージの描写を含めたシベリア文学に親しんでいる地元民のシベリア地域アイデンティティを強化する効果を出現させるための積極的な実践として機能することができると言える。

4.4　シベリア地域アイデンティティを強化しうるシベリア文学観光に関する結論

本論文ではシベリア文学観光ツアーに参加した観光者のシベリア地域アイデンティティに影響を与える可能性という観点から、シベリア文学観光ツアーの分析を行ってきた。第 1 章で見てきたように、シベリア地域アイデンティティの形成には複雑な歴史があり、それぞれの歴史的段階と結びついた特徴を含む構造を持っている。歴史を通じてシベリア地域アイデンティティの形成の根底に窺えるのは、ロシアとシベリアの対照的な関係である。歴史上のさまざまな時代において、過激化された政治的な要素、または政治への傾きが排除された

要素があり、シベリア地域アイデンティティを豊かにしてきた。このような背景のもと、20世紀初頭からシベリア出身の知識人によりシベリア文学が形成され始める。シベリア文学はシベリアの特殊な文化空間の一部として形成され、シベリアの発展の歴史的過程やロシア中央部との関係なども反映している。シベリア文学観光の枠組みの中で積極的に利用されているのは20世紀後半のシベリア文学である。20世紀後半のシベリア文学には内戦時代のような政治的な要素は排除されているが、シベリアのさまざまな特徴と、1950 年以降の活発な産業拡大によってシベリア全体で1950年代以降に起きた諸問題の両方を描写している。さらに、20世紀後半のシベリア文学は「農村文学」及び「エコロジー文学」と呼ばれるジャンルの作品が多く、そのような作品が描くのはシベリアで起きていた農村及びエコロジーに関する問題やその特徴である。このような傾向は戦後のシベリアにおける産業拡大を背景に出現し、シベリア作家が自身の故郷であるシベリア地域の問題や特徴を描くことで、シベリアの一般化されたさまざまなイメージを含みシベリア全体の文化空間を形成する文学作品が生み出されてきた。シベリア全体の文化空間における文学的な側面から言えば、シベリアで生まれ育った人々のシベリア地域アイデンティティを支えているのはまさにシベリア文学であろう。

このようなシベリアの文学作品をテーマとする文学観光ツアーの目的の 1 つとして挙げられるのは、前述のように「地域アイデンティティの強化」である。文学観光ツアーに参加した観光者を対象に実施したアンケート調査の結果によると、参加者のほとんどが地元民である。地元民であれば「地域アイデンティティの強化」という目的が達成される可能性は高い。その理由はシベリア地域に住むことによって形成されるバックグラウンドにある。地元のシベリア作家について教える学校教育課程が重要な役割を果たすのである。学校教育課程では、郷土を舞台にした物語を通じてシベリア全体の一般化されたイメージを描くシベリア各地域のシベリア作家が扱われる。地元民である観光者は、自身の郷土であるシベリア地域の文学作品を学校で学ぶことで、シベリア全体を内包するシベリア作家による一般化されたイメージを理解するようになり、自身の郷土の地域とのつながりだけではなく、シベリア全体とのつながりも形成される。そしてシベリアとロシアの中央地域の対照的な関係、自身の地域だけではなく他のシベリア地域にも存在する問題、中央地域との関係におけるシベリアの周縁性、シベリアの特徴などを学校の段階で意識し、シベリアとのつながりに基づいたバックグラウンドを持つようになる。従って地元民である観光者には、馴染みのあるシベリア作家及びその文学作品に関わる文学観光ツアーへの参加によって、集合的記憶の

喚起に貢献する感情的反応が起こりうる。感情的反応は、過去に文学作品を読んだときの感情的な経験や、観光者の個人的な経験の両方に関連しうるものである。文学観光ツアーの内容が、観光者が生まれ育ったシベリアの文化空間に直接関係しているからである。また、主催者による一定の規制があるにもかかわらず、比較的自由な行動が可能であり、ツアーで訪問する場所が複数存在するため、観光者に起こりうる感情は非常に多様である。このようなツアーの特徴がより鮮明な感情体験に寄与し、ひいては観光者のシベリア地域アイデンティティが強化されるプロセスの効率性を高める可能性がある。

4.5 小括

第 4 章では、前の各章で得られた結論をまとめ、シベリア地域アイデンティティの強化に貢献する実践としてのシベリア文学観光の特徴について包括的に考察した。

まず本章の前半では、シベリア文学観光の実施を通じて、シベリア全体に着目したシベリア地域アイデンティティを強化する可能性を考察した。シベリア地域アイデンティティはシベリア全体と結びついており、シベリアの全地域を包含する文化空間に基づいて形成されている。シベリア文学というロシア文学のジャンルに属する文学作品には、作家の故郷であるシベリア地域の特徴や問題点などが描写されている。これらの特徴や問題はシベリア全域に特徴的なものであり、シベリア作家の故郷であるシベリア地域に焦点を当てた作品は、一般化されたシベリアのイメージを含むという点では普遍的なものである。また、20 世紀後半のシベリアの文学作品には政治的な要素が排除されており、シベリア作家の故郷であるシベリア地域と、20 世紀後半のシベリア全体に対する産業拡大とその影響を考慮した物語描写が特徴的であり、それがシベリア文学観光の枠組みの中で利用されている。このように、各シベリア地域の地元の著名なシベリア作家とその文学作品に関する情報は、シベリア全体の文学文化空間に結びついた普遍的な概念を内包しており、シベリア全体に着目したシベリア地域アイデンティティの一部を形成することができると言える。

後半では、シベリア文学観光の重要な側面である身体化について分析した。第 3 章で述べたように、シベリア文学観光ツアーは規制が限定的なツアーである。ツアーは一定のコンセプトや目的がある一方で、旅程のポイントは一般地元民の社会空間内にあり、ガイドによって行動が制限されることはほとんどないという二重構造を示している。身体化について言えば、さまざまな対象で満たされた観光空間を通過することで観光者自身が内省のための対象を選び、それが感情的反応を引き起こすことが可能である。そのような感情的反応の 1 つ

は、地元のシベリア作家と直接的・間接的に関連するものへの反応である。その理由としてあるのが、地元民である観光者のバックグラウンドの存在である。シベリア文学に関連するシベリア各地域の住民のバックグラウンドは、学校での学習を通じて形成される。シベリア文学は、シベリア各地域の描写を含むと同時にシベリア全体を含意していることから、地元民はシベリアの文学的文化空間に精通しており、それがシベリア地域アイデンティティの一部を形成していると言える。従って、シベリア文学観光ツアーでは、地元民である観光者はすでに馴染みのある地元のシベリア作家やその一般化されたイメージに接触することになり、バックグラウンドを基にした過去の感情的経験に遡る感情的反応が出現する可能性がある。要するに、シベリア文学観光は、地元作家によるシベリア各地域の描写を通じて一般化されたシベリア全体のイメージを含むシベリア文学に親しんでいる地元民のシベリア地域アイデンティティを強化する効果を出現させるための積極的な実践として機能することができるのである。

終章

5.1 各章の概要

本論文では、シベリア地域における文化空間や、いわゆるシベリア人とシベリア地域の精神的な結びつきに関わるさまざまな側面に触れながら、「シベリア文学観光」について包括的な分析を行った。すなわち、シベリア地域アイデンティティ、シベリア文学、シベリア文学観光ツアーにおける身体化要因などの側面に着目することで、シベリア文学観光とは何かを明らかにすることを目的に定めた。これらの 3 つの側面は、シベリア文学観光の構造と内容の特徴を説明するためのものであった。移動、すなわち複数の観光ポイントを訪れることで身体化するプロセスが窺えるシベリア文学観光はシベリア文学作品を積極的に利用しており、その作品を書いたシベリア作家の自己認識プロセスの根底にはシベリア地域アイデンティティが関わっているからである。さらに、ツアーに参加する観光者のシベリア地域との潜在的なつながりの存在に基づき、過去の経験に関連する感情的経験を得ることにより、シベリア地域とのつながりが強化される可能性を考察することも目的とした。つまり、観光者のシベリアとの結びつきを強化することに貢献しうる文学教育やシベリアでの生活を基にした過去の感情的経験が存在する可能性を分析した。ここでは、観光者がツアーが行われる地域の地元民で精神的なつながりを持っている場合、シベリア地域アイデンティティを強化する可能性がある、という観点からシベリア文学観光による地域アイデンティティへの影響についての考察を行った。以下では、まず各章の主要な論点を要約する。

第 1 章では、シベリア地域アイデンティティを明らかにした。文献に基づき、シベリア地域アイデンティティとは 10 の地域の文化空間を統合する社会文化的現象であることを示した。16 世紀末からの歴史的プロセスの枠組みの中で形成され、自然や民族、文化などの特徴を含む一方、ロシア中央部との対照的な関係を基に構築されたものである。シベリア地域アイデンティティの持ち主は、自分をシベリア人、すなわちシベリアとの精神的なつながりを持ち、シベリアの社会文化的空間に精通する人である。

第 2 章では、シベリア文学を考察した。また、シベリア文学観光で 20 世紀後半のシベリア文学作品が使われるため 20 世紀後半の文学作品の分析を行った。さまざまな時代におけるシベリア文学の定義をまとめ、シベリア文学を「作品の中で注意を向けさせようとするシベリアの諸問題や自然・民族文化などの特徴を描くシベリア人と自認する作家により作られる文学である」と定義した。シベリア文学は 19 世紀末に政治運動の高まりの波に乗り、

シベリア人の知識人により作られた文学であるが、戦後には政治的要素を排除された農村文学及びエコロジー文学という文学潮流のシベリア文学が形成される。20 世紀後半のシベリア文学作品を分析した結果、故郷という概念の存在が明らかになった。作家は自分の故郷を描くことで戦後の産業拡大によるシベリア全体における問題について考えさせようとしていた。

第 3 章では、4 つのシベリア地域を例にインタビューとアンケートで得られたデータを基にシベリア文学観光を分析した。その結果、シベリア文学観光は規制と同時に自由行動と内省の対象の選択が可能な、混交的な観光空間であることが明らかになった。規制は、ツアーの主催者が国家機関でありロシア連邦文化省による方法論的提言に従っているため、確立されたコンセプト及び反復的なルートが定まっていることを示す。一方、ルートは他の地元民の社会空間に織り込まれ、各場所での観光者の行動はガイドの指示に制限されないため、内省の対象を自由に選ぶことができる。ツアーの内容は、各地域の地元のシベリア作家に直接的・間接的に関係する。各地域の 20 世紀後半のシベリア文学作品は地元学校のプログラムに含まれている。そのため地元民には馴染みのあるものである。観光者を対象にしたアンケートによると、観光者の 79%が地元民である。つまり、ツアーに参加することで、大半の観光者は過去に感情的体験を受けた内省の対象と向き合うのである。このようなことから、観光者の地域アイデンティティが強化される可能性があると考えられた。

第 4 章ではツアーの身体化という点に言及し、シベリア文学観光がいかにシベリア地域アイデンティティを強化することができるかをまとめた。ツアーにおける自由行動はより幅広い感情を得ることができ、より鮮明にツアーの内容を認識することに貢献している。ツアー自体は各地域の地元作家に集中し、さまざまな地域で行われるにもかかわらず、地元民である観光者は作品におけるシベリアの一般化されたイメージを理解しているため、シベリア全体の文化空間で感情的体験を得、郷土とのつながりが強化されうる。つまり、シベリアの文化空間に含まれる地元文学を通じてシベリア地域アイデンティティの強化が可能となるのである。

最後に、シベリア文学観光はツアーで扱われるシベリア作家の故郷であるシベリアの各地域の描写を通じて、一般化されたシベリア全体のイメージの描写を含むシベリア文学に親しんでいる地元民のシベリア地域アイデンティティを強化する効果を出現させるための実践として機能することができると結論づけた。

5.2　結論と今後の課題

以上、本論文の各章で説明した主な論点をまとめたが、シベリア文学観光の包括的な分析からどのような結論を導き出すことができるだろうか。第一に、現象としての「シベリア地域アイデンティティ」の本質を明らかにすることができた。シベリア地域アイデンティティは、一方ではシベリア地域との安定した結びつきを持ち、シベリア地域の自然的・文化的・その他の特徴を取り込んでいる。他方では、さまざまな歴史的プロセスの影響下で、異なる歴史的時代におけるシベリア人の自己認識過程がシベリア地域アイデンティティに影響を与え特定の歴史的段階に窺える特徴を考慮して変容されていることがわかった。そこでは 6 つの歴史的段階を抽出することができた。1.形成（17 世紀から 19 世紀まで)、2.過激化（1917 年から 1922 年まで)、3.大祖国戦争を背景とした国民的アイデンティティとの統一（シベリアに関する「故郷」概念が出現)、4.再発揮（1950 年から 1970 年代：シベリアにおける産業拡大)、5.劣化（1980-1990 年代)、6.安定化（2000 年代から現在まで）である。歴史的プロセスにおけるシベリア地域アイデンティティの特徴は、シベリアとロシア中央部の対照的な関係の存在と相互作用といった要因が重要で、さまざまな歴史的プロセスの中でも変容しない点であることが明らかになった。シベリア人のシベリア地域に対する自己認識現象としてのシベリア地域アイデンティティは、ロシア中央部との相互作用なしには存在し得ない。例えば、最初のシベリア人はロシア中央部からシベリア地域へのロシア人移民を指し、ロシア中央部によるシベリア地域における文化空間の形成（例えば、先住民の間での文字の出現）があった。また他方では、シベリアの歴史的な周縁性、自然、民族文化などの特徴は、中央部との対照的な関係の構築に寄与した。他者との比較こそが自己の特異性を形成するのである。シベリア地域も例外ではない。このようなロシア中央部とシベリアの相互作用及び対照的な関係性に基づき、歴史を通じてシベリア地域アイデンティティはさまざまな変化を遂げてきた。過激化、大祖国戦争を背景とした国民的アイデンティティとの統一、揮発、劣化、安定化である。このことは、シベリア地域的アイデンティティが政治・行政の超越的現象としてロシア歴史の枠組みの中で形成され、歴史的プロセスの影響を受けて変成する構造を持っていることを示唆している。現在、シベリア地域アイデンティティは 1990 年代の政治的混乱を経て安定期を迎えている。シベリア地域アイデンティティの本質を分析することは、シベリア文学観光ツアーで扱われるシベリア人作家やシベリア文学観光ツアーに参加したシベリア人の自己認識過程の理解に資するだけでなく、長期的には歴史的要因を考慮した超政治行政的な周辺地域や他の地域における地域アイデンティティの現象を

さらに研究する契機となると考える。また、シベリア文学観光及びそこにおけるアイデンティティ構築を政治的・イデオロギー的な視点から分析する可能性が存在している。つまり、シベリア文学観光ツアーの主催者をはじめとした、文化政策の立案者たちは、「観光」や「文学」という一見すると政治とは関係が薄いと思われるような実践を巧みに利用することにより、また、観光者の経験に「ホット」 で 混交的（heterogeneous） な要素が持ち込まれてくることをあらかじめ見越したうえで、あえてこうした企画を推進しているのではないだろうか、という考え方の方向である。例えば、上から強制されるような教育的プログラムでは、それを受ける者はイデオロギーを押し付けられるという受け身的な姿勢を意識せざるを得ないだろうが、「観光」や「文学」という観光者の主体的なアプローチがなされる実践においては、より能動的、積極的に地域アイデンティティの価値構築への関与が促されるはずである。そのようなことを為政者や地方行政当局は意識したうえで、シベリア文学観光を政治的操作の手段として巧みに利用しているのではないかと考えられるため、イデオロギー的な側面からの研究も視野に入りうるのである。

「シベリア文学」については、用語学的・歴史学的な分析を行った結果、ロシア文学の一部でありながら独自の特徴を持つユニークな文学ジャンルであることを明らかにした。多くの点で「シベリア文学」の特徴は、シベリア地域アイデンティティと同様に歴史的プロセスとシベリア地域そのものの特徴に結びついている。20 世紀後半のシベリア文学作品を分析した結果、この時期のシベリア作家は、作品の中でシベリアのユニークな自然、シベリア村を保護することの重要性、20 世紀後半にシベリア地域で起こっている諸問題などを描いていることがわかった。20 世紀後半のシベリア文学は「農村文学」と「エコロジー文学」に属する。このようなジャンルの出現や、当時のシベリア作家によるエコロジー、適切な自然管理、シベリア村の保護といったテーマへの言及は、政治的要素が取り除かれ、シベリアが祖国の一部として認識されるようになった大祖国大戦や 1950 年代などの時からシベリアで起こった活発な産業拡大を背景としている。つまり、大祖国戦争時からの祖国統一がシベリアに対する故郷的な認識の出現に貢献し、その後の産業拡大が故郷としてのシベリア認識にシベリアの自然や文化などの特徴の保存に対する懸念の要素を与えたのである。同じ傾向は、シベリアを中心テーマとする文学作品を創作するシベリア作家が有するシベリア地域アイデンティティの変容にも見られる。このように、「シベリア文学」は「シベリアの地域的アイデンティティ」に直結するものであると同時に、独自の特徴を持つものである。このことから、シベリア文学独自のジャンル的特徴からシベリア作家による文学作品研究の

展望を語ることができよう。

本論文の後半では、20 世紀後半の文学作品、インタビュー調査、アンケート調査などによるデータを分析することで「シベリア文学観光」を包括的に分析する試みを行った。その結果、シベリア文学観光は混交的な構造を有することが明らかになった。一方では、ツアーの主催者は地域アイデンティティの強化に貢献する実践の組織化に関わるロシア連邦文化省による提言に基づいて、地元のシベリア作家とその文学作品に関する情報を利用し、特定の旅程を持つ観光ルートを作る。ツアーには作家と直接関係のある観光地（作家の家など）や間接的な観光地（作家を敬愛する村人との出会いなど）が含まれている。インタビューのデータによると、ツアーの主催者はツアーが実施されるシベリア地域にとって重要なシベリア作家と、これらの作家の 20 世紀後半の作品を意識的に起用していることが明らかになった。第 3 章では、この時代のいくつかの作品を分析した。その結果、いずれの作品においても、それぞれの作家の故郷であるシベリア地域の特徴的なイメージの描写を通して、シベリアの一般化されたイメージが描かれていることがわかった。それぞれの作家は、精神的なつながりを持つシベリア地域から物理的あるいは精神的に距離を置いた経験を持ち、故郷というテーマを強調している。つまり、自分の故郷としてのシベリアにおいて保護しておいた方がよい特徴や注意を払うべき問題について、読者に考えさせようとしているのである。同時に、シベリアの各作家は自分のシベリア地域だけではなく、シベリア全体で注目すべき点を指摘している。つまり、シベリアの文学作品にはシベリアの一般化されたイメージが含まれているのである。ツアーの主催者はシベリア文学観光ツアーの枠組みの中でまさにシベリアの一般化されたイメージを描くシベリア作家またはその文学作品を利用している。

シベリア文学観光ツアーに参加した観光者の本質を分析してみたところ、観光者の大半はツアー主催地の地元民であった。シベリアの学校ではその地域の地元作家について学習していることから、観光者は作家とその作品に関連するツアーの情報を理解しているのである。また、過去にシベリア作家を学んだ記憶や感情的経験を持っているとも言える。観光者が地元民であるという点は、観光者が過去に地元のシベリア作家やその作品に関わる経験を持っている場合にのみ、シベリア文学観光の中で地域アイデンティティを強化する効果が発生しうるため、きわめて重要である。観光者の大半が地元民であったため、ノスタルジー、過去の経験への回想、過去にすでに訪れた郷土の場所との連想といった心理的効果が看取できた。つまり、地元作家の文学作品に関連した過去の経験やツアーが実施される地域の文化空間での生活経験などに基づいて、観光者にはシベリア地域に住んでいる間に得た過去

の経験、過去に遡る集合的記憶への回帰の効果が見られた。ここでは観光者が地元民であるという条件の下で、観光者の郷土の文学・文化空間に関連する、過去に受けた感情や経験の更新が発生すると言える。したがって、観光者がシベリアの一般化されたイメージを含むシベリア文学作品及びツアーが行われる地域の文化空間を理解することで、観光者の郷土との結びつきだけではなく、シベリア全体との結びつきが強められる可能性について語ることができる。そしてこの理解はシベリアの地域的アイデンティティの存在に基づいているものである。つまり、特定の地域とのつながりの強化だけではなく、観光者のシベリア地域アイデンティティが強化されることについても語ることができる。また、シベリア文学観光ツアー中にシベリア地域アイデンティティが強化されるという効果が発生しうる重要な要因として、ツアーにおける行動の自由という条件下での身体化を挙げた。シベリア文学観光ツアーの構造を分析した結果、ツアーには決められたルートと内容があるが、ルート上の観光地ではガイドによって観光者の行動が制限されないことが明らかになった。また、ルート地点自体も他の一般住民が通りを歩いたり、買い物をしたりするなど、観光地があるところの日常的な社会空間から乖離しているわけではない。このように、シベリア文学観光ツアーは他の地元民の社会的日常空間に織り込まれていると言える。この特徴は、観光者が内省のための選択肢をより多く持ち、自由に内省の対象を選べるという点で重要である。本論文では、内省の対象を自由に選択することで、さまざまな感情を得ることができるという要素が存在することで、地域アイデンティティが強化される可能性が高まると述べた。行動に制限があるツアーでは、観光者を惹きつけ、過去の感情や経験を想起させる対象に観光者を近づける可能性が低くなるからである。このように、「シベリア地域アイデンティティ」と「シベリアの文学」の本質、ツアーにおける情報、ツアーの構造、ツアーの主催者により設定される目的、観光者の本質、ツアーにおける行動の自由度、ツアー中に観光者の過去にまつわる感情的体験の可能性などを考察し、地域アイデンティティが強化される効果の可能性という観点から「シベリア文学観光」について包括的な研究を行った。この研究は、地域アイデンティティとロシア文学のユニークなジャンルとしてのシベリア文学の両側面をこれから分析する研究者にとって有益であろう。また、本論文で取り上げた側面の一つとして、シベリア文学観光ツアーへの参加を通じて観光者のシベリア地域アイデンティティが強化される可能性を分析した。これは、観光実践が観光者に与える心理的影響について考察するという意味においても有用であろう。すなわち、観光実践が観光者と地域のつながりや、観光者とツアーで扱われる文学作品の作者の双方の自己認識プロセスに与える影響は、心理学

の観点から分析することが可能である。今回は観光空間の特徴という観点から観光者とツアーが行われる地域の精神的なつながりの存在や感情的経験などによる地域アイデンティティへの影響を見てきた。観光中に起こりうるさまざまな心理学的なプロセスも、今後の中心的な研究テーマとして考えられる。

参考文献

1. Adler, J. (1989) Travel as Performed Art. *American Journal of Sociology, 94*, pp. 1366-1391.
2. Bennett, T. (1995) *The Birth of the Museum*. London: Routledge.
3. Brenner, N. (2001) The limits to scale? Methodological reflections on scalar structuration. *Progress in Human Geography, 25*(4), pp. 591-614.
4. Chaney, D. (1993) *Fictions of Collective Life*. London: Routledge.
5. Cohen, E., Cohen, S. A. (2012) Authentication: Hot and cool. *Annals of Tourism Research, 39* (3), pp. 1295-1314.
6. Edensor., T. (2000) Staging Tourism. Tourists as Performers. *Annals of Tourism Research, 27*(2), pp. 322-344.
7. Fawcett, C., Cormack, P. (2001) Guarding authenticity at literary tourism sites. *Annals of Tourism Research, 28* (3), pp. 686-704.
8. Gurney, C. M. (1997) ...Half of me was satisfied: making sense of home through episodic ethnographies. *Women's Studies International Forum, 20*(3), pp. 373-386.
9. Herbert, D. (2001) Literary places, tourism, and the heritage experience. *Annals of Tourism Research, 28*(2), pp. 312-333.
10. Koenig, H., Melgunov, N. (1837) *Literarische Bilder Aus Russland.* J. G. Cotta.
11. Schutz, A. (1964) *Collected Papers, 2*. Den Haag: Martinus Nijhoff.
12. Seamon, D. (1979) *A Geography of the Lifeworld*. London: Croom Helm
13. Tetley, S., Bramwell, B. (2002) Tourists and the cultural construction of Haworth's literary landscape. In M. Robinson & H. Andersen (Eds.), *Literature and tourism: Essays in the reading and writing of tourism* (pp. 155-170). London: Thomson International.
14. アザドフスキー, M. K. (Азадовский, М. К.) (1932) Литература сибирская. *Сибирская советская энциклопедия.* Западно-Сибирское отделение ОГИЗ, С.161-226.
15. アスタフィエフ, V. P. (Астафьев, В. П.) (1972-1975) *Царь-рыба*. Москва: Издательство «Детская литература».
16. アスタフィエフ V.P.文学館 (Литературный Музей им. В.П. Астафьева) Official Website. Retrieved May 30, 2023, from https://www.kkkm.ru/filialy-muzeya/literaturnyj-muzej-im-vp-astafeva

17. アブスリャモブ, M. B. (Абсалямов, М. Б.) (1995) *Очерки Истории и Культуры Сибири*. Красноярск: FAMILIA.

18. アブラモフ, F. A. (Абрамов, Ф. А.) (1954) Люди колхозной деревни в послевоенной прозе. *Новый мир, 4*, С. 210-231.

19. アルタイ共和国の公式サイト (Официальный сайт правительства Алтайского края) Official Website. Retrieved May 19, 2023, from https://www.altairegion22.ru/

20. イルクーツク州の公式サイト (Официальный сайт правительства Иркутской области) Official Website. Retrieved May 25, 2023, from: https://irkobl.ru/

21. オレル州アーカイブ (Государственный архив Орловской области) ГАОО. Ф. 151. Оп. 1. Д. 14. Л. 8.

22. クラスノヤルスク地方の公式サイト (Официальный сайт правительства Красноярского края) Official Website. Retrieved May 29, 2023, from http://www.krskstate.ru/

23. クラフチェンコ, M. B., コピティナ, Z. N. (Кравченко, М. Б., Копытина, З. Н.) (2006) Истоки формирования экологического образования в российском государстве. *Вестник ТГУ, 4*(44), С. 132-135.

24. クリロフ, M. P. (Крылов, М. П.) (2005) Российская региональная идентичность как фокус социокультурной ситуации (на примере европейской России). *Логос, 1*(46), С. 275-289.

25. クングロフ, G. F. (Кунгуров, Г. Ф.) (1975) *Сибирь и Литература*. Иркутск.

26. グルム＝グルジマイエロ, T. I. (Грумм-Гржимайло, Т. И.) (1987) Письма Г.Н. Потанина. Иркутск: Издательство Иркутского университета.

27. ケメロヴォ州の公式サイト (Официальный сайт правительства Кемеровской области) Official Website. Retrieved May 21, 2023, from https://ako.ru/oblast/obshchaya-informatsiya/history.php

28. コトリャコフ, V. M. (Котляков, В. М.) (2006) Словарь современных географических названий. Official Website. Retrieved November 12, 2023, from: https://1657.slovaronline.com/

29. ゴルシェニン, A. V. (Горшенин, А. В.) (2020) *Беседы о Русской Литературе Сибири*. Rideo.

30. サフォノワ, T. A. (Сафонова, Т. А.) (2000) Приём и размещение эвакуированного населения в Западной Сибири в 1941-1942 годах. *Вестник ТГПУ, 4*(20), С. 120-125.

31. ザズブリン,V. (Зазубрин, В.) (1927) Проза «Сибирских Огней». *Сибирские огни, 2*, С. 185-201.

32. ザミャーチン, D. N. (Замятин, D. N.) (2020) *Геокультурный брендинг городов и территорий: от теории к практике. Книга для тех, кто хочет проектировать и творить другие пространства*. Алетейя.

33. シュクシン, V. M. (Шукшин, В. М.) (2012) *Полное Собрание Рассказов в Одном Томе*. Москва: Эксмо.

34. ジンデエワ, E. A. (Жиндеева, Е. А.) (2014) *История русской литературы XX века (советский период): учебное пособие*. Scientific magazine Kontsep.

35. スヴェルクノワ, N. B. (Сверкунова, Н. В.) (2002) *Региональная Сибирская Идентичность: Опыт Социологического Исследования*. Санкт-Птербург: НИИ Химии СпбГУ.

36. ゼリツキ, B. Y. (Желицки, Б. Й.) Центральноевропейская идентичность и Венгрия. *Международный Исторический Журнал, 11*, С. 59-79.

37. ゼレブツォフ, B. (Жеребцов, Б.) (1926) Исаак Гольберг. *Сибирские Огни, 5*(6). pp. 243-254.

38. ダメシェク, I. L. (Дамешек, И. Л.) (2009) *Сибирь в системе имперского регионализма: 1822–1917 г*г. Иркутск: Изд-во ИрГУ.

39. チェルネンコ, K. U. (Черненко, К.У.) (1984) Утверждать правду жизни, высокие идеалы социализма. *Литературная газета, 1984, 26 сентября*.

40. チビリキン, V. A. (Чивилихин, В. А.) (1962) *Юность не умирает. Серебряные рельсы. Шуми, тайга, шуми*. Москва: Молодая Гвардия.

41. トヴェリ州アーカイブ(Государственный архив Тверской области) ГАТО. Ф. р-552. Оп. 1. Д. 7. Л. 16; д. 8. Л. 4, 6.

42. ドミトリエフ, D. V. (Дмитриев, Д. В.) (2003) Толковый словарь русского языка. Official Website. Retrieved November 12, 2023, from: http://rus-yaz.niv.ru/doc/dictionary-dmitriev/index.htm

43. ネクリロフ, S. A., ルコフ, E. V. (Некрылов, С. А., Луков, Е. В.) (2012) *Социально-Экономическое Развитие Сибири в Послевоенный Период. Учебное пособие.* Издательство Томского университета.

44. ノボシビルスク州アーカイブ(Государственный архив Новосибирской области) ГАНО. Ф. п. 5. Оп. 4. Д. 659. Л. 1, 3.

45. ファスマー, M. (Фасмер, М.) (1973）Этимологический словарь русского языка. Official Website. Retrieved November 15, 2023, from: https://lexicography.online/etymology/vasmer/

46. フェディアエフ, D. M., チナコワ, L. I. (Федяев, Д. М., Чинакова, Л. И.) (2012) Диалектика границы: общее в различных версиях. Современные проблемы науки и образования, 3. Electronic Journal. Retrieved May 12, 2023, from: http://science-education.ru/ru/article/view?id=6220

47. フェドロフ, V. A. (Фёдоров, В. А.) (2016) *Дивись тому, что ты живёшь...*. Стихотворения. Кемерово.

48. フェルスマン, A. E. (Ферсман, А. Е.) (1956) *Путешествия за камнем*. Ленинград: Детгиз.

49. ベグマン, V., ゴールドバーグ, Z., ザズブリン, V., イティン, V., ポスペロフ, A., プシュカレフ, G. (Вегман, В., Голдберг, И., Зазубрин, В., Итин, В., Поспелов, А., Пушкарёв, Г.) (1927) *Художественная Литература В Сибири (1922-1927): Сборник Статей и Докладов.* Новосибирск: Издание Сибирского Союза Писателей.

50. ホミャコーフ, V. I. (Хомяков, В. И.) (2019) Нравственно-философская модель «Деревенской прозы» середины 1950-х годов. *Ученые записки Орловского государственного университета, 2*(83), С. 160-163.

51. ボロノエフ, A. O. (Бороноев, А.О.) (2010) Проблемы динамики сибирской идентичности. *Общество, среда, развитие, 3*, С. 81-85.

52. ポストノフ, Y. S. (Постнов, Ю. С.) (1982) Сибирская литература. *Очерки русской литературы Сибири: в 2-х томах. Советский период*. АН СССР, сиб. отд-ние, ин-т истории, филологии и философии, Новосибирск: Наука.

53. ポスペロフ, E. M. (Поспелов, Е. М.) (2001) Географические названия мира. Топонимический словарь. Official Website. Retrieved November 12, 2023, from: http://otpusk-info.ru/journey/dictionary/world-geographical-names/index.htm

54. ポタニン, G. N. (Потанин, Г. Н.) (2014) Нужды Сибири. *Избранное*, С. 93-125. Томск

55. ポメランツェフ, V. M. (Померанцев, В. М.) (1953) Об искренности в литературе. *Новый мир, 12*, С. 218-245.

56. マンスーロフ, D. Z. (Мансуров, Д. З.) (2011) Теоретико-Методолические Подходы к Проблеме Региональной Идентичности в Политической Науке. *Учёные Записки Казанского Университета, 153*(1), С. 181-190.

57. ヤドリンツェフ, N. M. (Ядринцев, Н. М.) (2003) *Сибирь как Колония в Географическом, Этнографическом и Историческом Отношении*. Новосибирск: НИЦ «Сибирский хронограф».

58. ラスプーチン, V. G. (Распутин, В. Г.) (1976) *Прощание с Матёрой. Пожар*. (коллекция). Экслюзин: Русская Классика.

59. ラスプーチン V.G.博物館 (Музей В. Г. Распутина) Official Website. Retrieved May 30, 2023, from https://vgrasputin.ru/ekskursii-i-meroprijatija

60. レメゾフ, S. U. (Ремезов, С. У.) (1880) *Краткая Сибирская Летопись*. Санкт-Петербург: типография Ф.Г. Елконского.

61. ロシア文化省による大ロシア百科事典 2004-2017 (Большая российская энциклопедия 2004–2017) Official Website. Retrieved October 13, 2023, from: https://old.bigenc.ru/

62. ロシア連邦議会の公式サイト(Сайт правительства РФ) Official Website. Retrieved May 2, 2023, from https://www.pnp.ru/

63. ロシア連邦軍参謀本部軍事アカデミー戦史科学研究所の公式サイト Official Website. Retrieved May 17, 2023, from: https://encyclopedia.mil.ru/encyclopedia/history/more.htm?id=12104527@cmsArticle

64. ロシア連邦憲法 65 条 1 項 (Конституция РФ 65 статья 1 пункт) Official Website. Retrieved May 12, 2023, from: https://base.garant.ru/10103000/6cf34816dc52ae8870d524b8ed6399a5/

65. ロジナー, F. (Розинер, Ф) (1993) Литературная Экология. *Общественные Науки и Современность, 2*, С. 140-146.

66. ヴァシリー・フェドロフ科学国立図書館郷土資料室 (Государственная Библиотека имена Фёдорова) Official Website. Retrieved May 17, 2023, from https://kemrsl.ru/

67. 自治体郷土史博物館の活動に関するモデル基準に基づく、自治体博物館の近代化のための方法論的提言 2020 年度より(Методические Рекомендации по Модернизации Муниципальных Музеев на Основе Модельного Стандарта Деятельности Муниципального

Краеведческого Музея) (2020) Retrieved May 28, 2023 https://culture.gov.ru/press/news/minkultury_rossii_razrabotalo_metodicheskie_rekomendatsii_po_modernizatsii_munitsipalnykh_muzeev/

68. 重岡徹（2012）『最近 100 年間の「ふるさと」の語られ方―人間の生きる原点としての「ふるさと」による農業・農村再生への展望―』『農村計画学会誌』31 (3) pp. 457-462

69. 全ロシアシュクシン V.M.記念博物館・自然保護区 (Всероссийский Мемориальный Музей-Заповедник В.М. Шукшина) Official Website. Retrieved May 30, 2023, from https://shukshin-museum.ru/services/excursions/

ヴァレンティン・ラスプーチン『マティオラへの別れ』（1976）の分析

ヴァレンティン・ラスプーチンの『マティオラへの別れ』[93]（1976）は実話をもとにしている。シベリアには「マティオラ」という名の村は実在しない。ただしアンガラ川の畔にあった「マテラ村」はウスチ・イリムスク貯水池で水没し、またブラーツク水力発電所の建設で全滅した村もあった。ラスプーチンの故郷であるアタランカ村も同じ運命をたどる。こうしたことから「マティオラ」はシベリア村の集合イメージであると考えられる。

「マティオラ」という地名は、「母」[94]、「大陸」[95]といったコンセプトとのつながりを意味しており、偶然の産物ではない。「母」のイメージは物語の中心人物である老女ダリヤ・ピニギナと結びついている。彼女は伝統を守り、家族、家庭、日常生活などの調和を図るのが得意である。

作品中で展開される出来事の契機となるのは、水力発電所の建設によりマティオラが水没するという凶報である。この村には 300 年前からロシアの農民が住んでいる。暮らしは淡々と続き、300 年の間にマティオラにより多くの人々が幸せにされてきた。「このように、村は三百年以上にわたり、あらゆる時代と逆境を乗り越え生きていた。三百年の間に、岬の上部に半露里ぐらいの土が積もってきている（略）」〈Так и жила деревня, перемогая любые времена и напасти, триста с лишним годов, за кои на верхнем мысу намыло, поди, с полверсты земли（略）〉（p. 7）。

この村はすべての人を受け入れ、すべての人の母親となり、全員を大切にすることで有名だった。そしてマティオラの住人たちは快適な家を必要とせず、そこに幸福を見出すことはなかった。しかしそれも村が水没する凶報までのことだった。

これまでの研究のほとんどは「故郷」を失うという状況に直面した住民の行動や態度などに注目している。つまり「人間の概念」、「ロシア人としてのシベリア村マティオラ島の住民の概念」などである。それと同時にシベリア村の消滅と地域の伝統文化の保存という問題も少なからず注目されていた。しかし本論文で注目するのは、マティオラの喪失に直面したロシア人の精神状態そのものの分析ではなく、「故郷」の概念である。すなわち「村人にとっ

---

[93] ロシア語で *Прощание с Матёрой*。

[94] 母なる地球・母なる大地である。

[95] マティオラ島は、四方を水に囲まれた大陸に似ているからである。

てマティオラとは何か」というイメージを、その行動や精神状態などの描写の分析を通じて明らかにしていく。

作品における「故郷」のマティオラは、隠遁の場所、自分のルーツとつながる場所として提示されている。

> 「*ボゴドゥル*[96]*はマティオラでより歓迎されたのか、それとも何か別の理由で島に惹かれたのか、しかし、隠れ家となるとボゴドゥルはマティオラを選んだ*」〈*Или привечали Богодула в Матёре больше, или по другой какой причине приглянулся ему остров, но только, когда дошло до пристанища, Богодул выбрал Матёру.*〉（p. 17）。

安定、未来への自信という感覚などを与えてくれるのである。

> 「*マティオラに帰る度、彼*[97]*はいつも、まるでマティオラを出たことがないかのように、新しい家がなかったかのように、彼の後を辿り時間がどれほど簡単に繋がるかに驚いていた*」〈*Приезжая в Матёру, он всякий раз поражался тому, с какой готовностью смыкается вслед за ним время: будто не было никакого нового поселка, откуда он только что приплыл, будто никуда он из Матёры не отлучался.*〉（p. 42）。

時間と空間の流れの中で自分の位置、安定した場所を認識することで、自分自身や自分の居場所、アイデンティティを確認することができる。「島は静かで平和だった。母なる土地であればあるほど、その運命は明確な境界を持ち、その先にはもう固い土地はなく、小川が流れていた」〈И тихо, покойно лежал остров, тем паче родная, самой судьбой назначенная земля, что имела она четкие границы, сразу за которыми начиналась уже не твердь, а течь.〉（p. 23）。

「故郷」は高齢者と若者の両方とつながっており、自分自身の一部である。それが失われることで揺らぎを感じ、将来への不安を感じる。「今、この世は二つに割れた。それだ！私たち、老人たちにとって…私たちは、どこにも要らない。神よ、お許しください！」〈Нонче свет пополам переломился: евон че деется! И по нам переломился, по старикам… ни туды мы, ни сюды. Не приведи Господь!〉（p. 19）、とボゴドゥルと話す時、主人公ダリアが嘆く。

変化の時代、喪失への恐怖などが出現する中で、人々はこの「安定」を過去に求め始め、過去の古い時代を理想化し、懐かしみ、マティオラという故郷を救うという希望を大切にする。「ああ、良心のことね。昔は良心があった。今はあるかないか。それがある者は良心的で、ない者は非良心的であった。今はどっちつかずになっている」〈Раньше ее видать было:

---

[96] マティオラに住むポーランド人。

[97] 過去にマティオラを離郷した主人公の息子。

то ли есть она, то ли нету. Кто с ей – совестливый, кто без ее – бессовестный. Теперь холера разберет, все сошлось в одну кучу – что одно, что другое.〉（p. 21）。

作品において「故郷」の概念を縁取り重要な象徴的役割を担っているのが、正教の象徴的なマティオラの埋葬儀式である（20 章）[98]。先祖の墓前での懺悔から、埋葬として認識される島の沈没までの全行程が描かれ、人間にとって記憶を残すことの重要性を示す。

正教の信仰によれば、死のサクラメントと埋葬儀式は不忘却への通路である。ダリアにとってマティオラ（母）を埋葬する準備を行うことは非常に重要である。小屋を掃除し、清潔にし、白く塗る。これにより、彼女の記憶の中で永遠に生き続けるという確信を得ることができる。このように、故郷を失った後でも記憶は自分の一部となり、自分のアイデンティティを維持することに貢献する。また埋葬儀式である小屋の掃除は、記憶を持つ者としての主人公にとっては重要であるが、よその者、マティオラに縁のない者には理解できない。例えば「おばあちゃん、気が狂ったの? 生きるつもりないの？明日燃やされるのに、白塗りするなんて。何をやっているんだ」〈Ты, бабка, в своем уме?! Жить, что ли, собралась? Мы завтра поджигать будем, а она белит. Ты что?!〉（p. 99）、と残骸物の焼却担当者が小屋を白く塗る主人公に言う。

ある場所が「故郷」として現れるのは、その場所との記憶や深いつながりがある時である。そのため村人は、最後の旅に出る前に忠実な友人であり最も近い親戚としてマティオラを「マティオラはもういない。ご冥福を（略）」〈Вот и нет Матёры – царствие ей небесное（略）〉（p. 108）と見送る。

さらに作中の「故郷」の概念を語る上で、環境的なモチーフにも言及する必要がある（8 項）。例えば「どんな土地が水没するのか。祖父や曾祖父が何世紀にもわたり手入れをし、肥料を与え、何世代にもわたり育ててきた最高の土地は（略）」〈Надо – значит, надо, но, вспоминая, какая будет затоплена земля, самая лучшая, веками ухоженная и удобренная дедами и прадедами и вскормившая не одно поколение（略）〉（p. 43）といった記述である。

ヴァレンティン・ラスプーチンは水力発電所建設の必要性をめぐるダリアと孫のアンドレイの対立を描きながら、マティオラたちだけではなく、一般の人々にとっても自然保護の重要性について考えさせる。天然資源の適切な管理の重要性、自然の生態系を破壊することの悪影響などについてである。

---

[98] 全章を通して見られる。

ビクター・アスタフィエフ『魚の王様「ボイエ」』（1976）の分析

ビクター・アスタフィエフの 『魚の王様』[99]（1976）も「農村文学」の代表的な小説の一つとして認識されている。しかし『マティオラへの別れ』のように、この小説の意義はそれだけではない。「人間と自然」の関係に着目する「エコロジー文学」の要素も随所に見られる。「人間と自然」の関係というプリズムを通しての「故郷」の概念が看取できると考えられるのである。

この小説は 13 の短編小説で構成されている。すべてのストーリーが作家の故郷のクラスノヤルスク地方にあるシベリアの力強い「生命の川」、イェニセイ川という、単一で一貫した芸術的・物理的空間に置かれている。分析には第 1 話「ボイエ」を選んだ。この短編小説は主人公が語り手となり、語り手の故郷であるクラスノヤルスク地方北部の小さな町、イガルカ町に久しぶりに帰ってくるところから始まる。

物語には「家族の中の人間関係」と「人間と自然の関係性」という 2 つのコンフリクトが描かれている。この 2 つのコンフリクトは人間の生活における自然の重要性を説明するための道具であると同時に、地域の問題に読者の関心を向けさせるための試みでもあるように思われる。

まず「家族の中の人間関係」から見た「自然」について解説する。家族と問題があり、「孤児院から生家に戻った後の家族との関係は、またうまくいかなかった」〈Отношения мои после возвращения из детдома в лоно родимой семьи опять не сложились〉（p. 17）ため、主人公は若くして故郷を離れることになる。

しかし、主人公は「記憶」を持つ人間としてイガルカに帰る。「去ったが、静かに覚えていた。どの両親がいるのか、最も重要なことに、みんな、どの兄弟姉妹がいるのかを覚えていた」〈Но я ушел. Навсегда. Чтоб не быть «громоотводом», в который всаживалась вся пустая и огненная энергия гулевого папы и год от года все более дичающей, необузданной в гневе мачехи, ушел, но тихо помнил: есть у меня какие-никакие родители, главное, ребята, братья и сестры.〉(p. 17)。『マティオラへの別れ』にもあるように、人間の原点の地で「故郷」の「生命の川」エニセイ川の場所と一体化するためには、記憶のナラティブは特別な役割を果たす。

[99] ロシア語で *Царь-рыба* “Бойе”。

ライダマンによれば、「生命の川」は神話的意識に根ざした巨大なイメージである。古代の人々にとって「生命の川」のイメージは、他の国々における「生命の木」のように、存在の構造全体、すべての始まりと終わり、地と天、換言すれば大きな宇宙誌の視覚的・視覚的な体現としてあった（ライダマン, 2003, p. 108）。

父親との負の体験をもつ主人公は、ノスタルジーにより過去に「光」を求めている。

> 「*川岸の焚き火のそばで、ブイの灯りがきらめき、星の金色の雫が底まで突き刺さるみたい、幸せな時間や夜があった。波の音、風の音、タイガの音だけではなく、田舎のキャンプファイヤーを囲む人々の淡々とした話にも耳を傾けていた*」〈*Случались счастливые часы и ночи у костра на берегу реки, подрагивающей огнями бакенов, до дна пробитой золотыми каплями звезд; слушать не только плеск волн, шум ветра, гул тайги, но и неторопливые рассказы людей у костра на природе.*〉（p. 14）。

しかしラスプーチンと異なり、ノスタルジーの主な対象は過去の村の生活、生き方、昔話などではなく、タイガや川といった故郷の自然的要素である。

主人公にとって自然とは、町の喧騒から離れて安らぎを与えられ、家族との葛藤が忘れられる心の安らぎの場所である。

> 「*そのような時、あなたは自然と二人きりになったような気がして、やっと自分の周りにあるすべてのものを信じられる、信じるべきだと、小さく密かな喜びと共に感じるのだ*」〈*В такие минуты остаешься как бы один на один с природою и с чуть боязной тайной радостью ощутишь: можно и нужно наконец-то довериться всему, что есть вокруг.*〉（p. 14）。

> 「*そして光は消え、自然界のすべてのものは、その幼く純粋な魂だけが聞こえるとき、待ち望んでいた平和を得るだろう*」〈*Каким ощутил себя сейчас вот, в редкую минуту душевного покоя.*〉（p. 14）。

アスタフィエフは、人間は自然の一部であると強調している。「都市／自然」のアンチテーゼは、生まれ育った土地の自然が都市や対人関係などにおける困難を克服するための一種の「松葉杖」になることを示す。主人公は「私はただ、自分の周りの世界を肌で感じ、目で慣れ、この貴重な心の安らぎの瞬間に自分を葉の短い茎で生命の木に自分を取り付けたかのように感じた」と述べている（p. 14）。

一方で「人間と自然」の間に存在する対立に関する記述も見られる。現代人は漁業や水力発電所の建設などで自然を破壊する存在として描かれている。「そしてある日、ネズミが姿

を消し、夜の泥棒のカサカサひっかく音になり、陽気に軋む音がなくなった」〈*И вот однажды мыши исчезли, смолк ночной воровской шорох, царапанье, бодрый писк.*〉(p. 24)。

人間は、自然の恩恵を責任を持って利用しなければ、自然から罰せられることを理解しなければならないと言われる。アスタフィエフの「故郷」の概念は、「友人としての自然」と「罰を課す自然」という 2 つのイメージに置かれている。この 2 つのイメージが主人公の父の愛犬「ボイエ」と「シャーマンカ」[100]に投影されている。「ボイエ」とはエヴェンキ語で「友達」という意味である。「ボイエはエヴェンキ語で友達のことだ。コーリャは犬を自分なりに呼んでいた」〈Бойе или Байе – по-эвенкийски друг. Коля кликал собаку по-своему.〉(p. 18)。

エヴェンキ語を使うことで、タイガを生活の糧とするだけではなくタイガから精神的なパワーを吸収するシベリア先住民の存在に注目し、改めてシベリアのタイガの保全の重要性を説いていると言える。「自然」の集合イメージであるボイエは人間を助けることができる。「シベリアの言い伝えによれば、犬は犬になる前は人間であり、善人であった」〈Повторю лишь северное поверье: собака, прежде чем стать собакой, побыла человеком, само собою, хорошим.〉(p. 18)。

人間が自然を傷つける[101]と、罰を与えるシャーマンカに出会う危険性がある。自然がなければ、人間は生きることができない。「コーリャはイガルカに留まり、タクシー運転手として働き、結婚したばかりだが若い妻や仕事に触れることはなかった。精神的に川の森に留まっていたから」〈Коля задержался в Игарке, работал таксистом, только что женился, но ни о молодой жене, ни о работе не поминал, мысленно пребывал в лесу, на реке.〉(p. 22)。「ボイエあるいは自然」はただ正しい態度を必要とするだけであり、それで人間は救われるのである。

まとめると、アスタフィエフによる「故郷」の概念は人間と自然の関係というプリズムを通して提示されていると言えよう。天然資源を適切に扱うことの重要性、シベリアの先住民族にとってのタイガの重要性などに関する主張が窺える。

[100] シャーマンの女性形。
[101] 作品では、ボイエが殺される。

ヴァシリー・シュクシン『村人—「スチョプカ」と「蛇毒」—』（1963）の分析

シュクシンは短編小説の巨匠として知られる。主要な作品は主人公の魂に生じる葛藤を描く短編小説である。シュクシンの作品は、彼が生まれ育ってきた「故郷」であるアルタイと切っても切れない関係にある。主人公はすべて村人で、同郷の人々である。これは作家と故郷の間に特別なつながりがあること、故郷を美化していること、また故郷の問題について考えさせることなどの特徴の存在を示す。

物語自体は人間関係の道徳的要素を明らかにすることを意図しているが、一方でラスプーチンとアスタフィエフと同様、「故郷」の概念に着目してその実体を明らかにすることが主な目的となっている。本論文ではシュクシンの短編集『村人』[102]（1963 年）に着眼し、その中から 2 つの物語「スチョプカ」と「蛇毒」における「故郷」の概念を抽出する。

この 2 つの物語は互いに対照的である。「スチョプカ」では主人公が物理的に帰る「故郷」について語る光景が描かれている。一方「蛇毒」では、過去に離郷し遠隔地から「故郷」について語るという立場からの考え方が記述される。つまり「故郷」にいながらそれについて語る観点と、離れた後の観点が描かれているのである。まず「スチョプカ」を概説する。

「スチョプカ」は主人公のステパン・ヴォイエヴォディンが刑務所を出て村に帰郷する、「こんな思いで、いい夜に、本道を迂回して、ステパン・ヴォイエヴォディンは母なる村に帰った」〈В такой-то задумчивый хороший вечер, минуя большак, пришел к родному селу Степан Воеводин.〉（p. 115）という場面から始まる。

「あんた、あと 3 ヶ月だけだったでしょう?!－知っているんだ」〈– Тебе же три месяца сидеть осталось! – Знаю не хуже тебя…〉（p. 120）というように、主人公は刑期満期出所まで 3 カ月ほどを残していた。ところが主人公は脱獄を決める。

主人公にとって「故郷」は力の源「＝これでいいのだ...すっきりした、これで満期まで耐えられる」〈Ничего… Я теперь подкрепился. Теперь можно сидеть.〉（p. 120）、特別なつながりを持つ「とても会いたかった」〈Я сильно без вас соскучился.〉（p. 119）場所で、それなしには生きてられない存在である。

主人公の「故郷」との特別な絆は、一つは親戚や隣人との出会いの描写、もう一つは.故郷

[102] ロシア語で *Сельские жители* “Стёпка”, “Змеиный яд”。

であるシベリアの歌の演奏を通じて描かれる。前者は母と父が「息子に会えて嬉しかった」〈Рада она его была видеть〉(p. 116)、妹が「兄を見たら、手を上げ、喜んでいた」〈Увидела брата, всплеснула руками, замычала радостно.〉(p. 116) という反応を見せ、隣人も含めてみなステパンに会えて喜び懐かしむ。この小説において「故郷」は、いつでも歓迎し、平和と温もりが感じられる場所として提示されているのである。

この小説の中で特別な役割を果たすのが、ステパンとその隣人たちによるシベリア歌謡の演奏である。「お許しください、お母さん、私のすべての行いを、時々駄々をこねていたことを…」〈Прости мне, ма-ать, За все мои поступки, Что я порой не слушалась тебя-а!..〉(p. 118)。これは物語の地域性、すなわちシベリアの特徴を強調するものである。歌う歌には、主人公が「故郷」に対し、自分の罪と 3 カ月を待たず「故郷」に逃げ込んだことを懺悔するという趣旨も含まれている。このように「スチョプカ」における「故郷」は、彼のシベリア人としてのアイデンティティと切り離せないものであると言える。

一方「蛇毒」は、母親が病気になったため治療薬を探してほしいという手紙を受け取り、必死に蛇毒を探しはじめるマキシム・ポロキチンについての物語である。マキシムは「故郷」から遠く離れた都会に住んでいる。母と生まれ故郷から離れたことで彼の魂は痛み、「母を憐れ、心が痛んだ」〈Заболело сердце – жалко стало мать.〉(p. 103)、「母と故郷を離れたことに対して罪悪感を覚えた」〈Он подумал, что зря он так редко писал матери, вообще почувствовал свою вину перед ней.〉(p. 103) といった心境になる。

しかし主人公は母のためなら何でもするとして、最後に蛇毒を見つける。

「スチョプカ」と同様、「蛇毒」にもシベリアの地域性が強調されている。これは医師が主人公に対し「母親はどこに住んでいる？」と尋ねた際、ステパンが「クラスノヤルスク地方、村に」〈В Красноярском крае. В деревне.〉(p. 106)、と答えたところから窺える。

また母の薬を届ける際、「同郷人」であるモンゴルのイグナートに助けられる場面も注目に値する。これは「故郷」が人を結びつけ、個人的アイデンティティの一部であるだけではなく、それぞれの社会も形成していることを物語っている。

このように、シュクシンの「故郷」の概念は、地域的アイデンティティの一部となっている同郷人の間の人間関係を通して提示されている。故郷とは家族や友人など社会全体を結びつける場所であり土地である。そのため離郷することは、恥や罪悪感など、家族と疎遠になる時と同様の感情を引き起こしうるのである。

ウラジーミル・チビリキン 『騒げ、タイガ、騒げ！』（1962）の分析

ウラジーミル･チビリキンはロシアの森の保護を訴える数々の作品を発表していることで知られる。作品はレオニード・レオノフが自身の名を冠した作品『ロシアの森』で用いたライトモチーフを大きく取り入れており、ロシアにおける人間と自然の関係に着目している。同様に「人間と自然」をテーマにしているビクター・アスタフィエフとは異なり、チビリキンはエコロジー文学の作家として、シベリアの林業というテーマについてしばしば統計的・分析的データなどを引用しながら自身の主張を展開している。ケメロヴォ州マリインスク市出身であることにより、ロシアの「シベリアの森」に対する独自の特別なイメージが形成される。

分析対象には『騒げ、タイガ、騒げ！』[103]（1962）を選んだ。この作品を選んだ理由には、3 つの多面的な性質を含む点が挙げられる。一つは「小説」で、シベリア・アルタイ共和国でテレツキ林業が設立される実話について、主な参加者と発案者の伝記を通して芸術的なスタイルで語る部分である。二つ目は「エッセイ」で、シベリアにおける森林保護というテーマに関する作家自身の考察の部分である。三つ目は「手紙」で、シベリアの森林問題について読者から寄せられた手紙の内容が記述されている。

「小説」の部分は 1950 年代末に起きた実話を基にしている。若い学生グループがアルタイに向かい、複合林業を設立したいという願望に燃えていた時のことである。『騒げ、タイガ、騒げ！』の分析では「エコロジー」の主要なテーマに着眼が置かれた作品における「故郷」の概念が所在する要素を抽出することを試みる。

作品全体を通じたメインのライトモチーフは「シベリア杉」である。エピグラフの最初の行からこのことが読み取れる。「これは杉だ！これは杉だ！-愛で答えよう。-これは杉だ！」〈Это кедр! Это кедр! —Я влюбленно отвечу. —Это кедр!〉（p. 1）という部分である。

第 1 部の主人公であると同時に、アルタイにおける複合林業を創設した実質的な発案者であるセルゲイ・シプノフ（フォテイ）は「故郷」を愛する活動的なシベリア出身の少年として描かれている。「春になると、セルゲイは一刻も早く家に帰ろうと、試験を早めに終わらせた」〈Весной Сергей сдал сессию досрочно, чтобы поскорее уехать домой.〉（p. 1）、「レニ

[103] ロシア語で *Шуми, тайга, шуми!* 。

ングラードに向かう途中、彼はタイガを夢見ていた」〈По пути в Ленинград он грезил тайгой.〉（p. 7）といった記述からそのことが窺える。

生粋のシベリア人であるセルゲイは、シベリアの内側からシベリアのことを知り尽くしており、シベリア杉を守るために何が必要かを、理論的ではなく実践的に理解している。

> 「*彼は専門学校卒業後に林業家として働き、他の人たちよりも森をよく知っていること、独立心が強く断定的な判断を下すこと、本や講義からすべてを一通り学ぶのではなく、必要なものだけを選んで学ぶこと有名だった*」〈*Их привлекало, что он после техникума успел поработать лесничим и лучше других знал лес, что он самостоятелен и категоричен в суждениях, что брал из книг и лекций не все подряд, а с выбором, только нужное ему.*〉（p. 2）。

主人公はシベリアの人間として、人間及び動物界にとってのシベリア杉の有用な特性について多くの事実を挙げ熱心に語る。「人々は長い間、シベリア杉の並外れた生命力と治癒力を確信しており、この木の樹脂汁を"生かす樹脂油"と呼んでいた」〈Народ давно уже убедился и в исключительных живительных, лечебных свойствах кедра, назвав смолистый сок этого дерева «живицей».〉（p. 3）といった部分がそれである。

> 「*アルタイとサヤンのタイガの鬱蒼とした針葉樹の樹冠の下で、シベリアの自然の美しい創造物が生まれ、生き、そして死んでいく。アルタイ・ワピチ*[104]*である。そのパトロン、シベリア杉との関係にあるこの高貴な鹿は、驚くべき調和と純粋さに満ちている*」〈*Под густым хвойным пологом алтайской и саянской тайги рождается, живет и умирает прекрасное творение сибирской природы — благородный олень, который находится со своим покровителем в отношениях, исполненных удивительной гармонии и целесообразия.*〉（p. 3）。

このように、シベリアの森林管理のための適切な利用及び保存などの方法を理解するにはシベリアが「故郷」であるという場所との密接な関係が重要であると言える。

作家はタイガを擬人化し、生命体のように語っている。「一人で？　いいえ、タイガ全体が騒ぐ」〈— Одни?— Зачем один? Вся тайга шумит.〉（p. 5）、「タイガは怖くない。何が怖いの？　見たことのない人は恐ろしいが、愛する人は歓迎され、暖められ、もてなされる」〈Тайги не боится. А че бояться-то? Она тому страшна, кто сроду ее не видал, а кто ее любит,

[104] アルタイ共和国で棲息するシベリア鹿。

она и приветит, и согреет, и накормит.〉(p. 6)、「スギ・タイガは騒いでいる、風の中を歩いている、まるで人々に言いたいかのように。助けてくれたら、あなたにも、あなたの子供たちにも、孫たちにも、百倍にしてお返しするわよ.....」〈Шумит, ходит под ветром кедровая тайга, будто хочет сказать людям: «Друга не оставляют в беде, а я ваш друг. Помогите мне, и я воздам сторицей — вам, детям и внукам вашим…〉(p. 26)。

第 2 部はシベリア森林保護に関するチビリキンの個人的な意見で、主に 1950 年代の森林面積の減少に関する統計データを基にその諸問題や解決方法などについて考察されている。第 3 部は作家宛てに送られた手紙の収集である。ソ連の一般市民から科学者に至るまで、当時の林業の現状は多くの人々にとって切実な苦痛の源であったことから、この問題に特別な注意が払われるようになったのである。

このように『騒げ、タイガ、騒げ！』はシベリアにおける林業に関連する多くの統計データ、実際の科学者の意見などを紹介する、「エコロジー文学」に属する小説の 1 つであると言える。さらにエコロジー的要素だけではなく、「故郷」の概念も看取できるのである。

第 1 に、小説内で繰り広げられるストーリーはチビリキンの「故郷」のシベリアを舞台にしており、故郷の運命に対する不安やシベリアの基本的要素の一つであるシベリアの森林の将来の存在に対する懸念などが示されている。第 2 に、アルタイにおける複合林業創設についての実話を通して、作家はシベリア林業の問題に対する解決策とその実施例の存在を紹介し、読者にテーマへの関心と森林保護への希望を抱かせる。このような関心はシベリア人と彼らの故郷の間に直接的なつながりがあることから、小説の読後、主にシベリア人と先住民族の間で生じうる。また第 3 部の手紙の差出人の住所はモスクワ、ロストフ、ミンスク、クリミアなどであり、森林管理のテーマが他の地域に広まる可能性を持っている。

すなわち『騒げ、タイガ、騒げ！』では、シベリアの森林に存在する問題とその解決方法の描写などを通じて「故郷」の概念が明らかにされており、作家は「故郷」との強いつながりと愛情を示し、その将来について懸念していると言うことができる。

ヴァシリー・フェドロフ『マーリエフカ・クロニクル』（2016）の分析

ヴァシリー・フェドロフは、ヴァレンティン・ラスプーチン、ビクター・アスタフィエフ、ウラジーミル・チビリキンと同様、シベリア文学作家に属する。1918 年にケメロヴォ州シェグロヴォ村[105]に生まれ、幼少期と青年期を同州マーリエフカ村で過ごす。作品における主な方向性は精神的、道徳的、市民的、愛国的な詩である[106]。

フェドロフの作品における主なモチーフの 1 つは「故郷」である。『マーリエフカ・クロニクル』[107]（2016）という詩集は、作家が暮らした「故郷」であるマーリエフカ村を中心に書かれている。この詩集から「自分の生まれ故郷を見て...」[108]、「さらば、村よ！」[109]、「マーリエフカに住めば...」[110]、「友達へ」[111]、「ルーツ」[112]、「杉の板」[113]の 6 編の詩を選び、さまざまな側面から描かれ作家にとって重要な「故郷」との関係に着目しながら、フェドロフにおける「故郷」の概念の特徴を見出していく。

「ルーツ」では、シベリアが作家の先祖や親戚などが住んでいた場所であることから、こうした過去との関係性に着目した「故郷」の姿が見られる。

> 「*私は自分の先祖のことについて第四代までしか知らない。言い伝えにあったのを覚えている。私の曽祖父は、ヴォルガ川の上流から遠く離れたアストラハンまで歩いたそうだ。ある時、ヴォルガ川が曾祖父のボガティール軍を鼓舞し、躊躇することなくシベリアの自由な川に会うために急いだ*」〈*Знаю родословную свою только до четвёртого колена. Что за ним – не слышал ничего я. Прадед был, и – помню из преданий – он ходил по Волге с бечевою от верховья к Астрахани дальней. В некий час не волга ли внушила прадедовой силе богатырской, чтоб она не мешкая спешила к вольным рекам стороны сибирской.*〉（p. 13）。

---

[105] 現ケメロヴォ市。

[106] ヴァシーリー・フェードロフ科学国立図書館の公式ページより。

[107] ロシア語で *Марьевская летопись*。

[108] ロシア語で“Я гляжу на родные места...”。

[109] ロシア語で“Прощай, село! ”。

[110] ロシア語で“Когда ты в Марьевке живёшь...”。

[111] ロシア語で“Друзьям”。

[112] ロシア語で“Корни”。

[113] ロシア語で“Кедровая доска”。

このほか、「シベリアの川はすべて彼ら（祖父たち）の草原の顔が映っていたと言う」〈Говорят во всех сибирских реках отражались их（дедов）степные лица.〉（p. 15）、「父は 10 代からシベリアのタイガを建てはじめた」〈Мой отец совсем ещё подростком строить стал сибирскую тайгу.〉（p. 15）などの記述もある。

「ルーツ」における「故郷」は「祖先と子孫」及び「過去と現在」を結びつける特別な空間として機能している。「過去」との一体感は、作家の「シベリア人」としての自認、つまりシベリアの一部としての自認に寄与している。「シベリア人である私は、イルティッシュ、オブ、レナが流れる森の土地で育った...」〈Сибиряк, я рос в лесном краю, где текут Иртыш, и Обь, и Лена...〉（p. 13）、「シベリア人である私も、幼い頃から厳しいやり方で身を固めた」〈Сибиряк, я тоже с малолетсва закалял себя в пути суровом.〉（p. 15）という記述にそれが窺える。「ルーツ」の中で作家は、「故郷」を記憶の場所として、個人的及び空間的な自己認識の場所として示している。言い換えれば、そこは心理的安定を与えてくれる場所なのである。

次に「自分の生まれ故郷を見て...」と「マーリエフカに住めば...」の 2 編を見ていく。前者は「故郷」が心の傷を癒し安らぎを与えてくれる場所として描かれている。具体的には「流れよ、流れよ、魂が疲れた喪失感を満たせよ」〈Я гляжу на родные места: лейся, лейся в меня, красота! Лейся, лейся заполни утраты, от которых душой изнемог.〉（p. 50）。「マーリエフカに住めば、菜園の世話をしているとき、全部が良くて、うまくいっているように思える」〈Когда ты в Марьевке живёшь, обхаживая грядки, мне кажется, что мир хорош, и в мире всё в порядке.〉（p. 53）のような部分である。

「友達へ」と「さらば、村よ！」では、「故郷」の概念は別の側面から明らかにされている。すなわち「故郷」とその「出身者」の強い結びつきである。故郷から離れた場所にいてもこの結びつきは保持され、時にノスタルジーや憧れなどを引き起こす。それは以下のような記述に現れる。「さらば、村よ！　私はあなたの畑の息子だ。私はあなたの緑の広がりが大好きだ」〈Прощай, село! Я сын твоих полей. Мне мил простор твоих зелёных пашен.〉（p. 51）、「私の国は何年たっても一周できない。他人により美化された場所はたくさんあるが、誰にもあなたの不滅の名を知る幸福を上げない」〈Мою страну не обойти в года. Есть много мест, прославленных другими, но никому я счастья не отдам нести твоё немеркнущее имя.〉（p. 52）、「いや、友達よ、私はまだあなたを忘れてはいないし、ときどき都での生活を思い出すが、路面電車を見る前よりもずっと田舎者である...」〈Нет, друзья мои, вас я ещё не забыл и столичную жизнь иногда вспоминаю. Деревенский я весь, даже больше, чем был до того, как

увидел трамваи...〉(p. 61)、「彼女（田舎）のくぐもった鳴き声、私には永遠のように思える」〈Глухое мычанье её, на меня оно вечностью веет.〉(p. 61)、「そして内省の中で憧れの瞬間が訪れる...若い頃、本を読みながら、せめてどこかで都会人になることを夢見ていたことを思い出すが、今はそんな夢も見ない」〈И в раздумьях приходят минуты тоски...Помню в юности, книжки читая, я хотя бы мечтал где-то стать городским, а теперь и о том не мечтаю.〉(p. 65)。

「杉の板」にも注目してみよう。ウラジーミル・チビリキンの『騒げ、タイガ、騒げ！』にも見られたように、シベリアの魂を構成するシベリア杉の特別な役割は、フェドロフにも見て取ることができる。例えば「大地そのものが杉について心を痛み、杉が育ってきた場所の白樺の下草に、まるで墓地のように記念碑が立っているのは、無意味ではない」〈Сама земля о кедре боль таит, не зря ему в берёзовом подросте на месте, где он рос, как на погосте нерукотворный памятник стоит.〉(p. 73) のような部分である。フェドロフはチビリキンのような「エコロジスト」ではないが、シベリアの自然あるいはシベリアのタイガの運命に対し、決して無関心ではないのである。

フェドロフの 6 つの作品を分析してみたところ、「故郷」の概念は 1.安定の場所、2.アイデンティティを構成する場所、3.人格を形成する重要な要素、4.シベリア空間を構成する特徴的な自然要素、という 4 つの側面から明らかにされていることがわかった。これらの側面は前述のシベリア文学作家にも見られ、シベリアの「農村文学」及び「エコロジー文学」における「故郷」の概念の普遍性を示唆している。

謝辞

終始熱心なご指導を頂いた北海道大学国際広報メディア・観光学院のパイチャゼ・スヴェトラナ准教授、西川克之教授、天田顕徳准教授、ネイティブチェックを行った芳賀恵に感謝の意を表します。

インタビュー調査またアンケート調査の実施及び分析にあたり、全ロシアシュクシンV.M.記念博物館・自然保護区のマリーナ・トロプチーナ博物館長、ヴァシリー・フェドロフ科学国立図書館のヴェラ・ラヴルシキナ図書館郷土史部門主任司書、自治州文化機関イルクーツク郷土博物館のエレナ・マヌーシュキナ担当部門長、クラスノヤルスク郷土博物館のアレクサンドル・チェレパノフ担当部門長にはひとかたならぬお世話になりました。ありがとうございました。